

521-189ウ

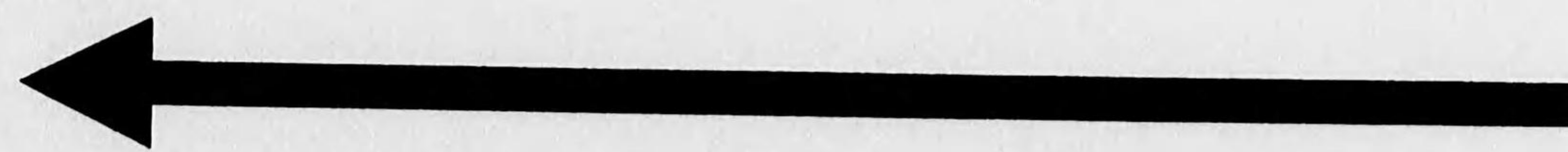


1200500745216

X  
複写



始



Y

30. 9. 30

2971

521  
I.89

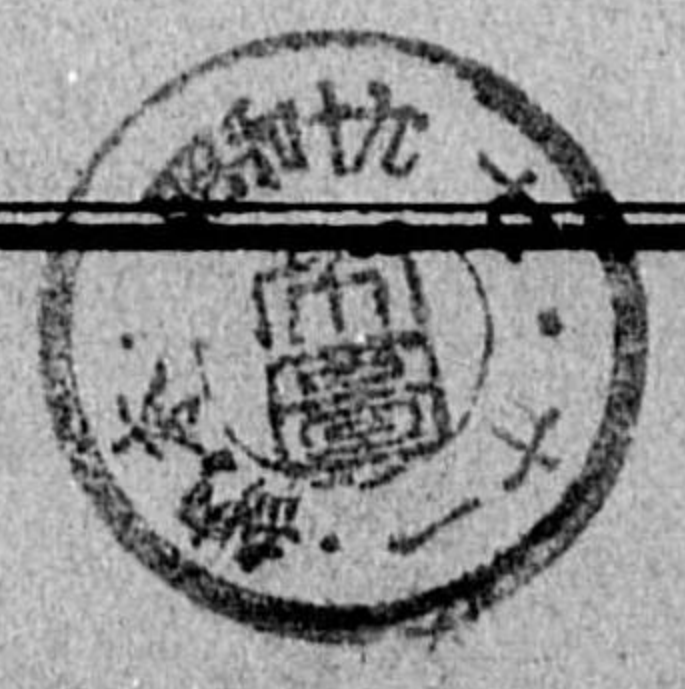
生活研究會藏版

佐野繁次郎裝釘

日本建築の美

社寺建築を中心として

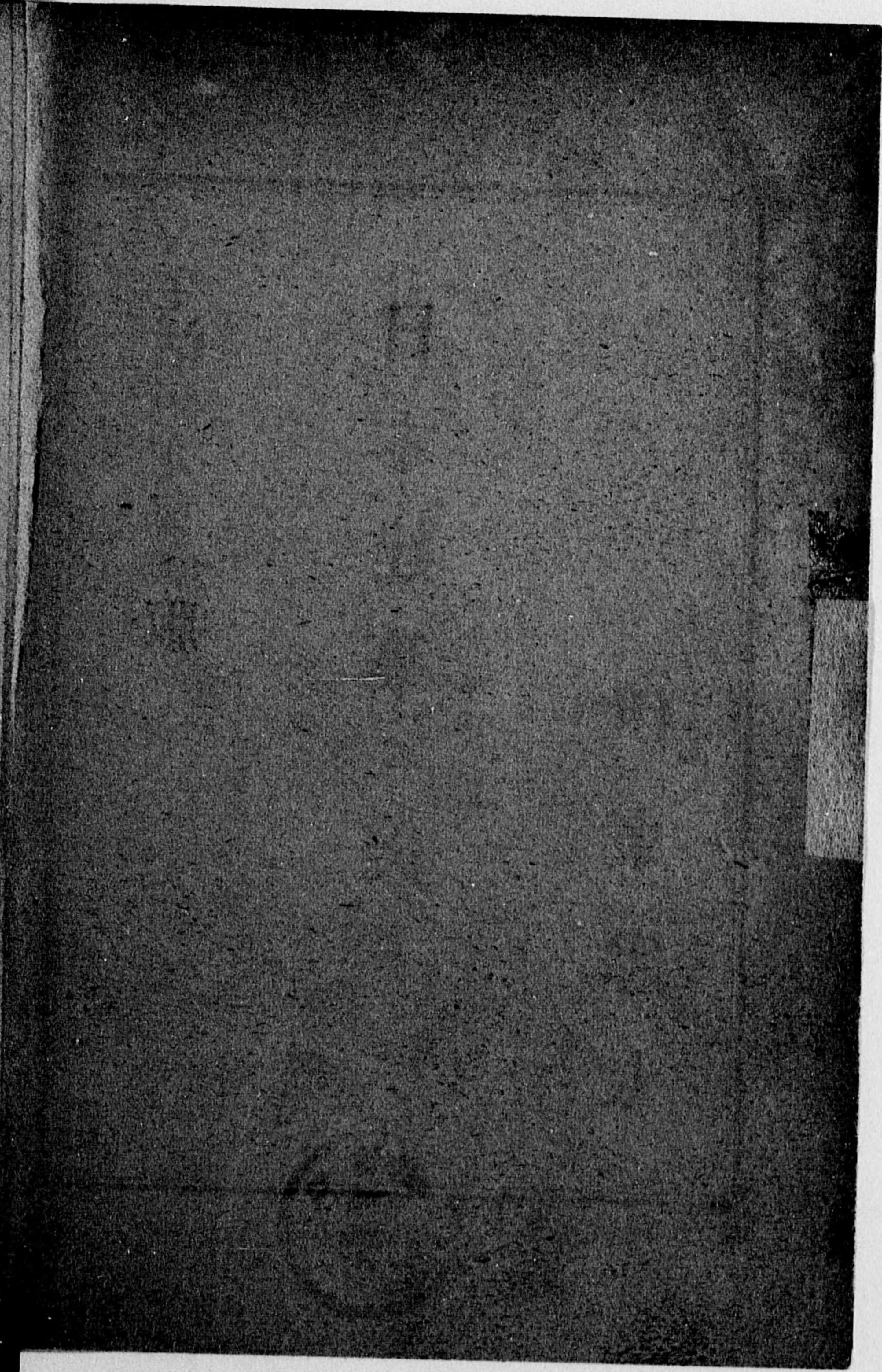
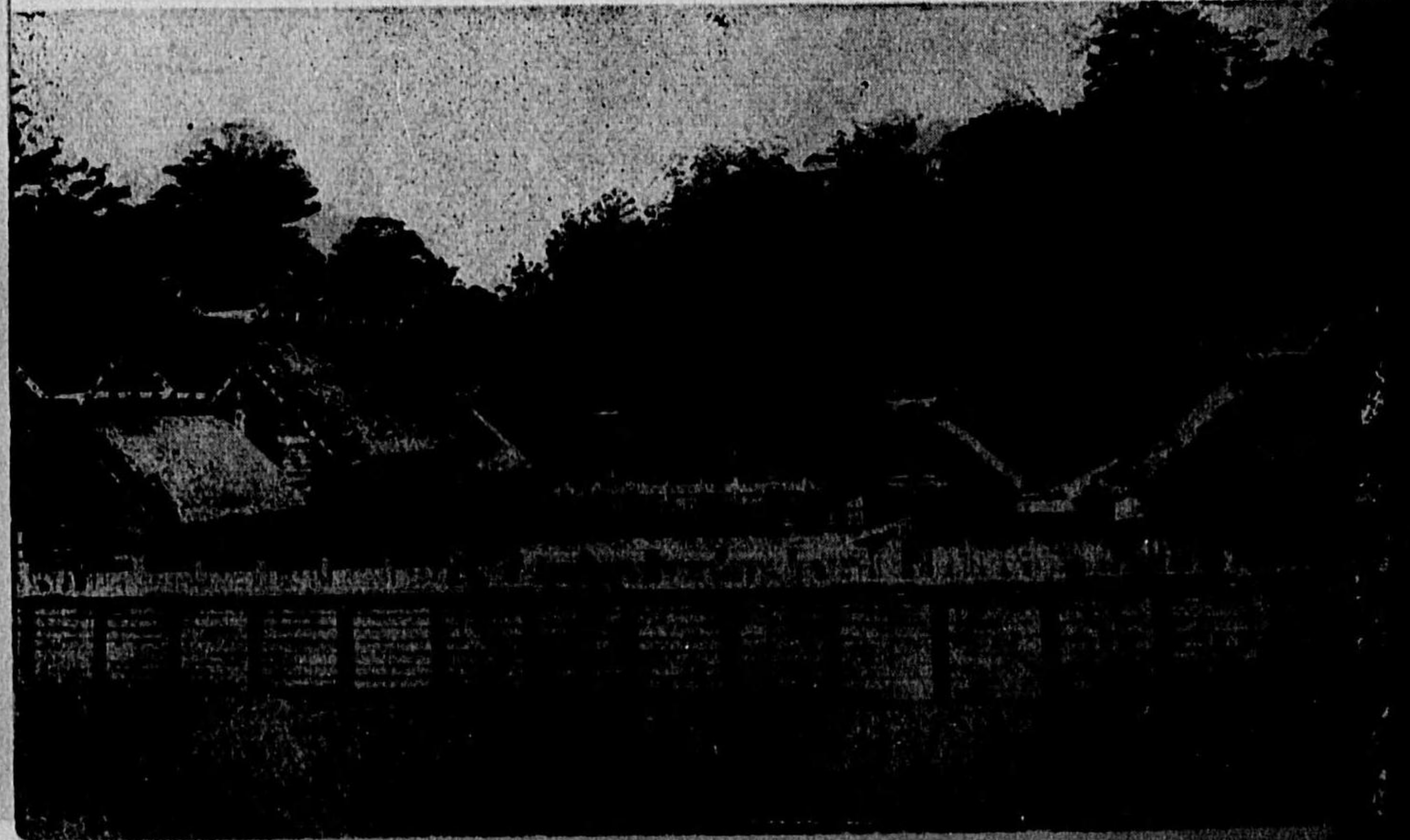
伊東忠太





1 上は出雲大社 本殿（大社造）

2 下は皇大神宮





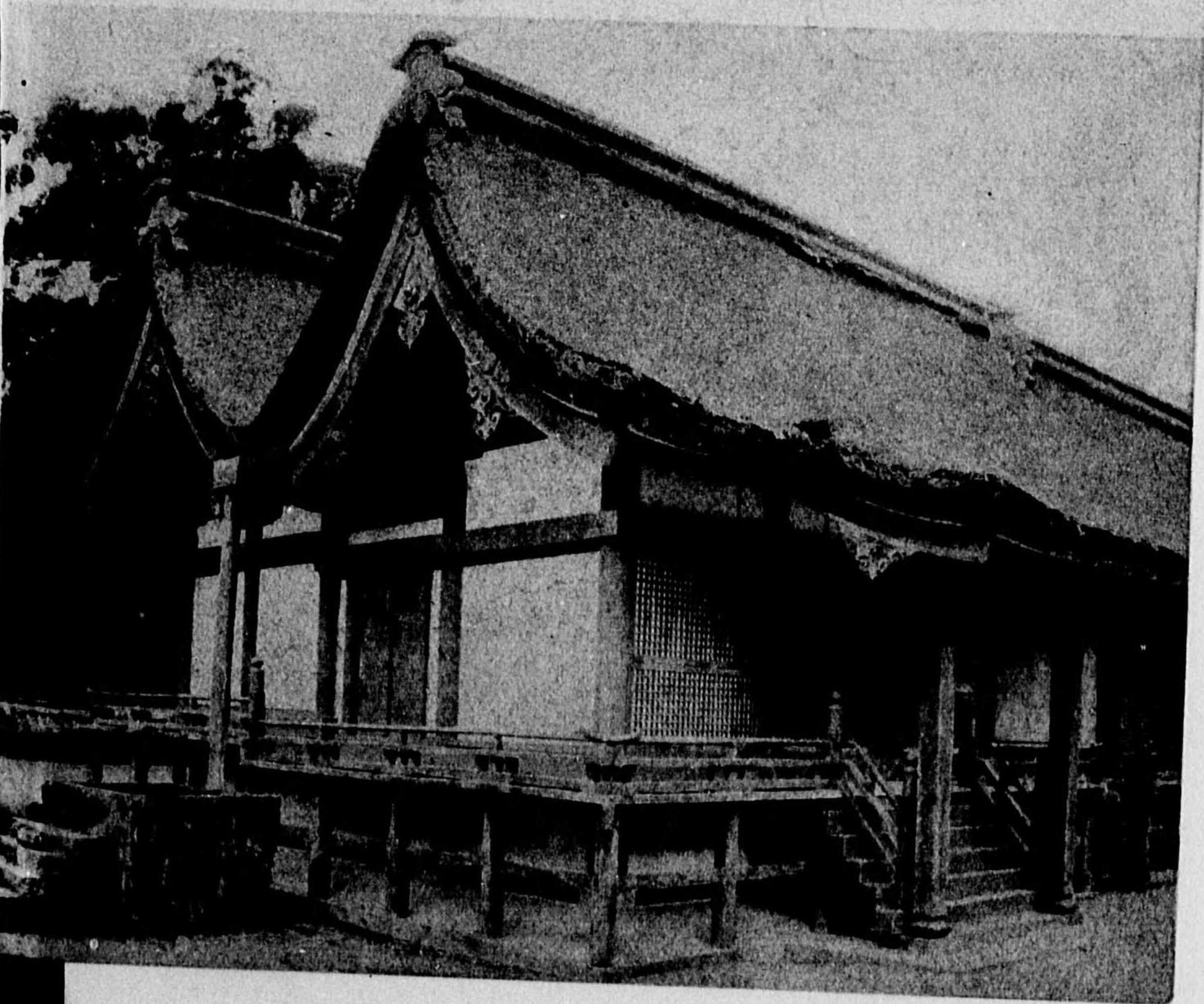
5 上は久能山東照宮本社

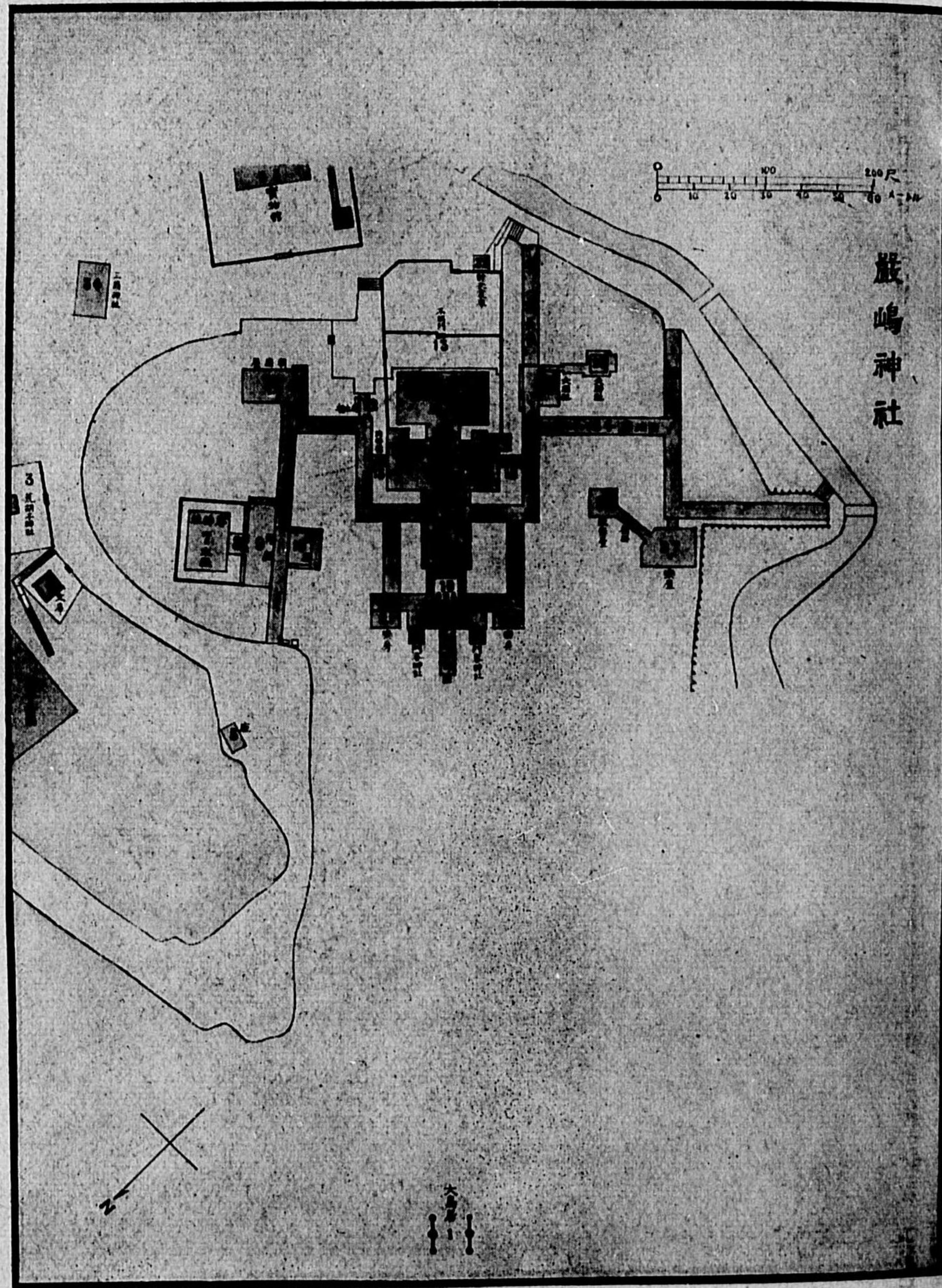
6 下は日枝神社（日吉造）



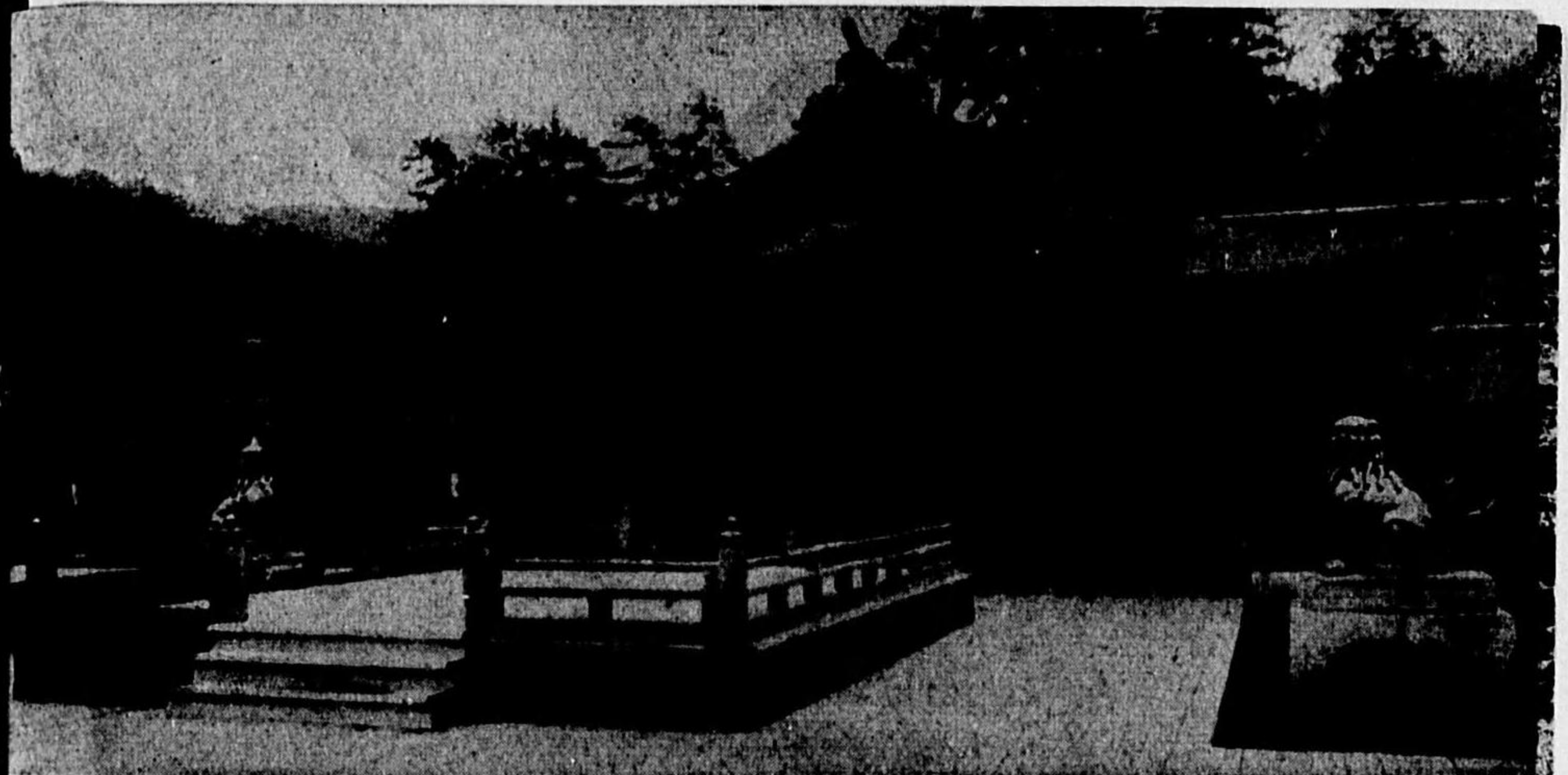
3 上は建水分神社 本殿（中央春日造、左右流れ造）

4 下は宇佐神宮（八幡造）



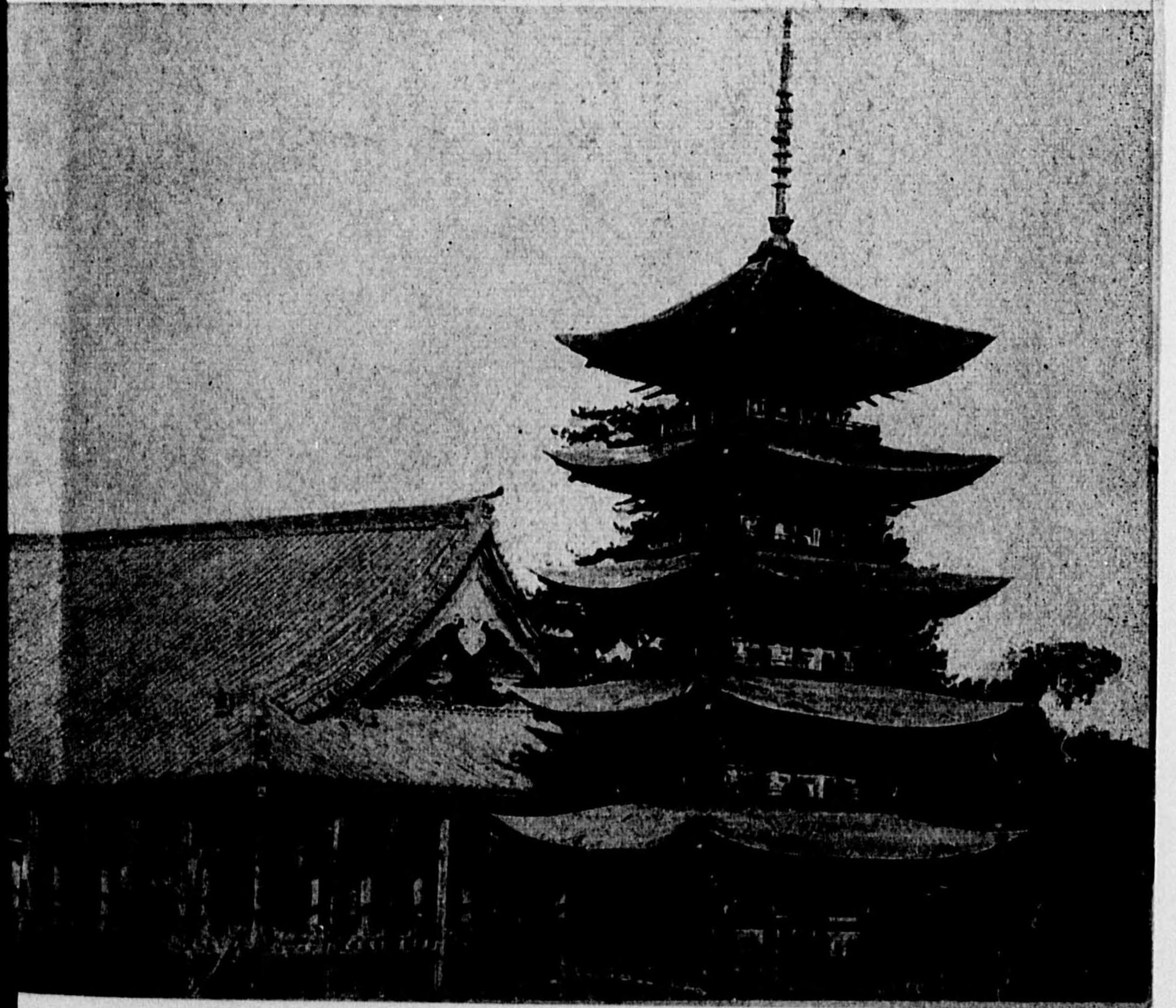


9 嚴島神社プラン



7 上は安藝嚴島神社平舞臺

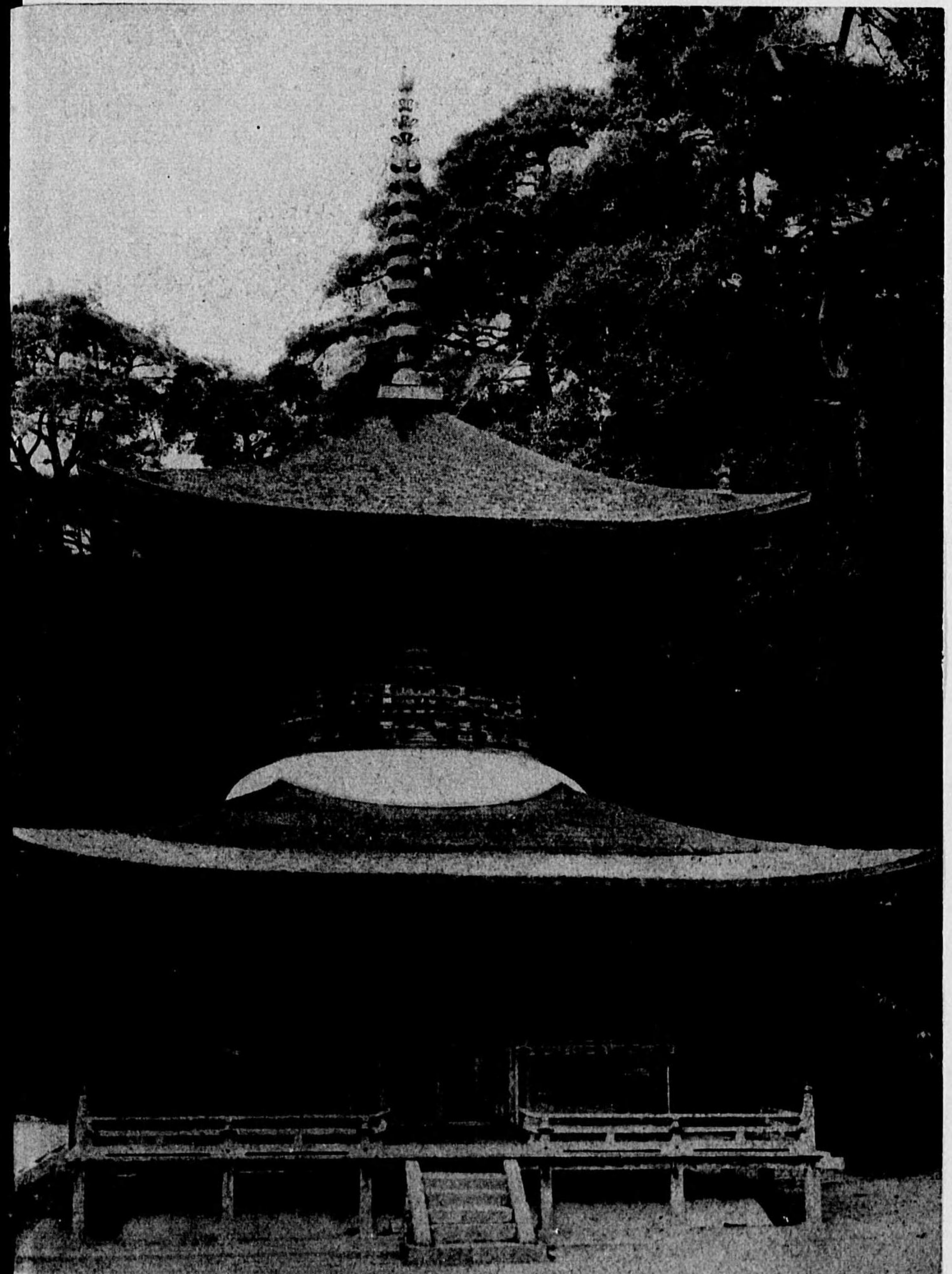
8 下は同嚴島神社五重塔と經堂(千疊閣)





11 上は法隆寺金堂

12 下は法隆寺東院夢殿



10 石山寺多寶塔



目次

世界建築界に於ける日本の社寺……………三

神社と其の建築……………一〇

一、神社の概観……………一〇

二、神社と團體……………一四

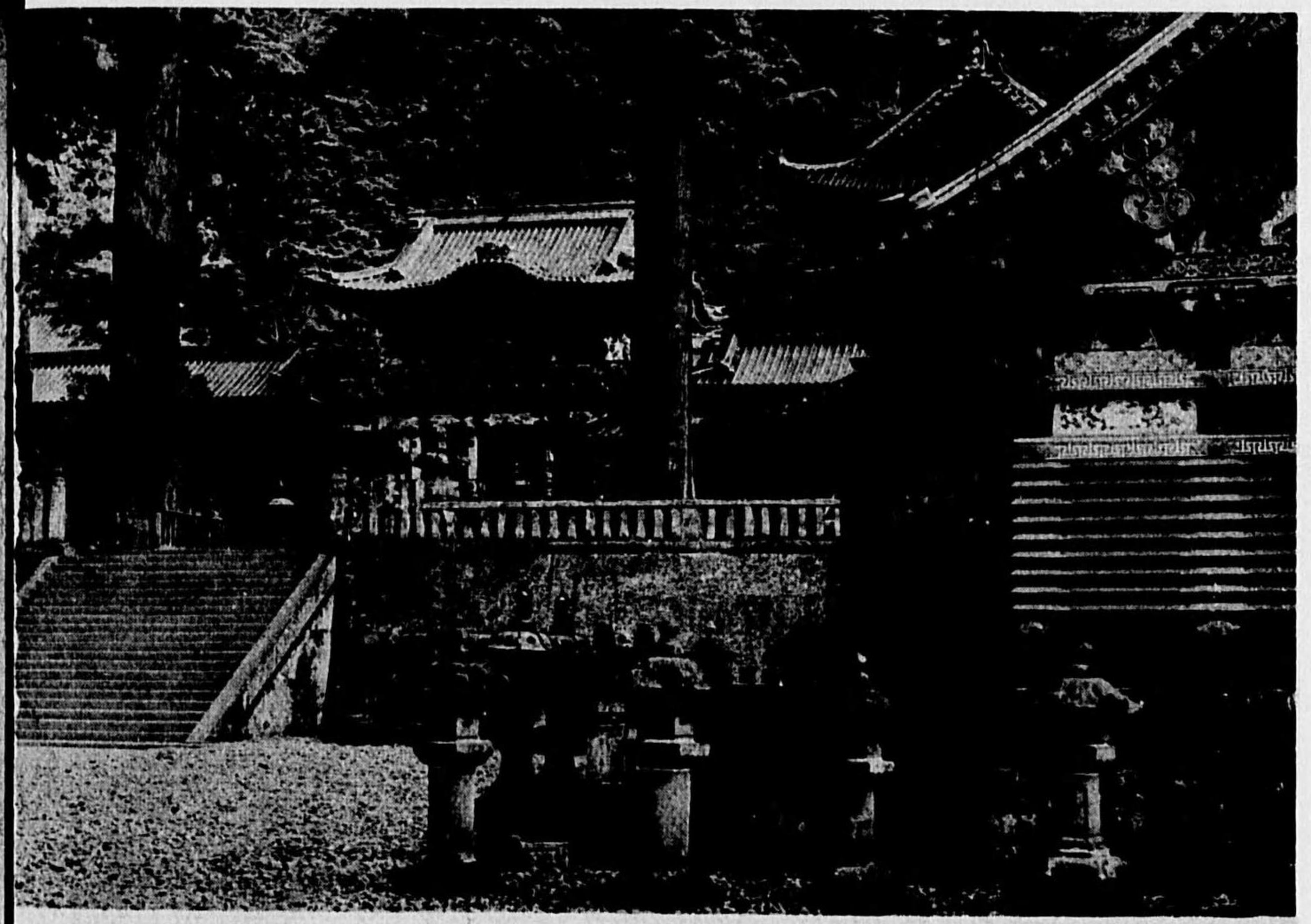
三、神社建築の變遷……………一五

四、新神社の様式……………二〇

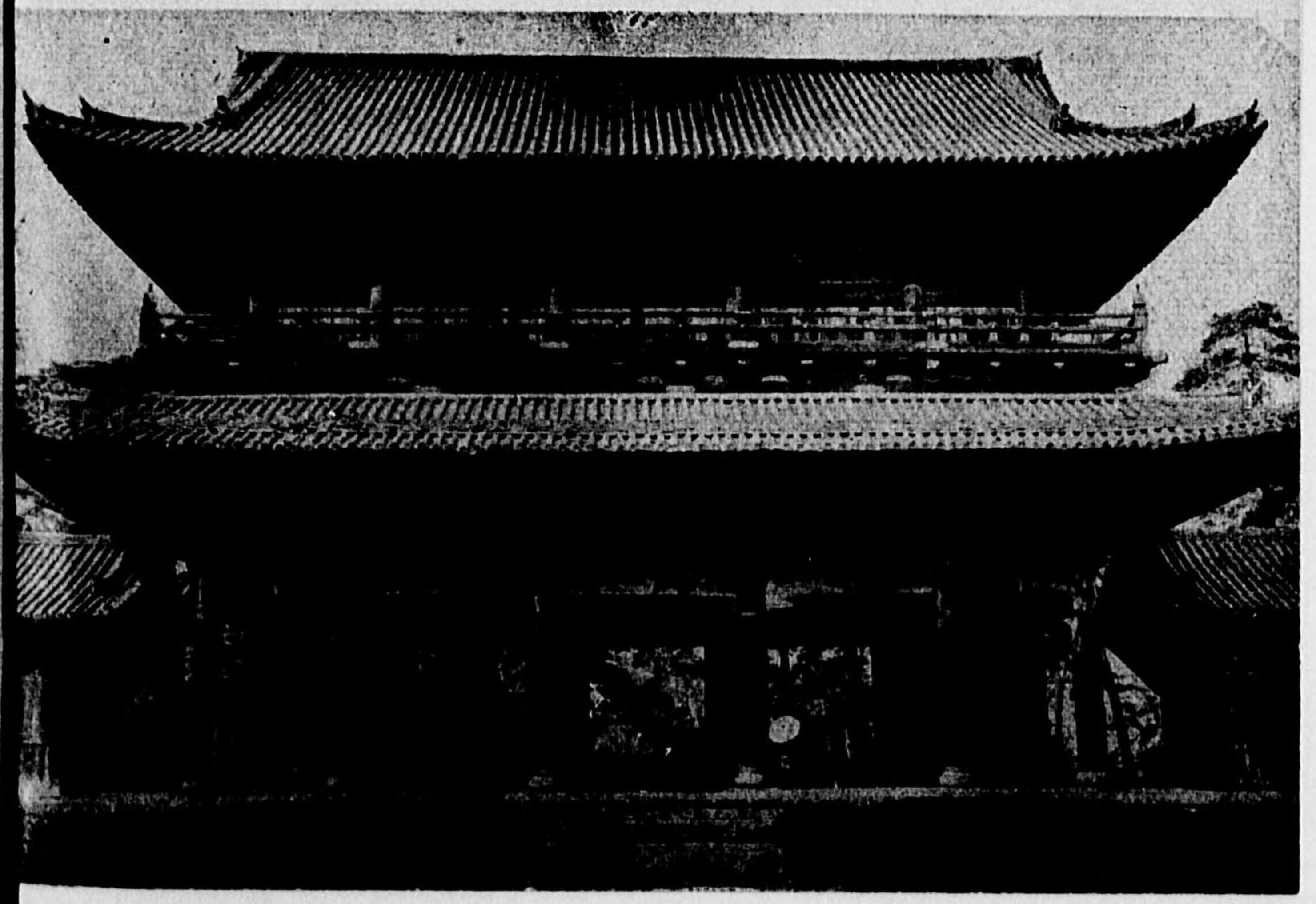
五、神社木造論……………二四

神社建築の發達……………二九

總論……………元



13 上は日光東照宮（權現造）中央陽明門



14 下は南禪寺山門



第一章 無建築の時代——磯城神籬……………三

第二章 神社宮室無別の時代……………五

    其の一大 社造……………五

    其の二大 鳥造……………六

    其の三 住吉造……………六

第三章 神社宮室有別の時代……………六

    其の一 神明造……………六

    其の二 神明造の變態……………七

    其の三 寶龜二年制定の造殿儀式に就いて……………七

第四章 曲線形適用の時代……………七

    其の一 春日造……………七

    其の二 流れ造……………七

    其の三 變態……………七

    其の四 八幡造……………八

    其の五日 吉造……………九

    其の六 入母屋造……………九

第五章 神佛混淆の時代……………九

    其の一 規模の伽藍化……………九

    其の二 各種の變態實例……………九

第六章 本殿拜殿連結の時代……………九

    其の一 權現造……………九

    其の二 八棟造……………九

第七章 現今及び將來の神社……………九

    其の一 現今の神社建築……………九

其の二 將來の神社建築……………六

伊勢大神宮……………九

建築より見たる伊勢神宮……………九

嚴島と其の建造物……………一〇

日本佛塔建築の沿革……………一三

緒言……………一三

第一章 總説……………一三

    (一) 佛塔形式の起源……………一三

    (二) 立塔の目的……………一三

    (三) 佛塔の種類……………一四

    (四) 塔の各部の名稱……………一七

第二章 塔の經歷……………一九

    (一) 飛鳥・奈良朝時代の佛塔……………一九

    (二) 平安時代の佛塔……………二三

    (三) 鎌倉・室町時代の佛塔……………二三

    (四) 桃山・江戸時代の佛塔……………二三

第三章 塔の沿革……………二四

    其の一 塔の資格の變遷……………二四

    其の二 塔の形式の變遷……………二五

    其の三 塔の構造及び裝飾の變遷……………二五

第四章 結語……………二六

殿堂建築の話……………二六

出雲大社……………二六

東大寺大佛殿	一七
大極殿	一七
結論	一三
美術より見た日光	一六
一、緒言	一六
二、日光廟の由來	一七
三、東照宮の造營	一九
四、東照宮の建築の配置	二〇
五、東照宮の規模	二〇
六、東照宮設計の方針	二四
七、設計方針の實現	二六

# 日本建築の美

——社寺建築を中心として——

## 世界建築界に於ける日本の社寺

世界の何れの國に於いても、其の古代の中心建築は宗教的建築であつた。日本に於いても亦其の太古に於ては神社建築が中心であり、中古佛教渡來以後は佛寺建築が中心となり、そして明治維新以後公共建築が中心となつて今日に至つたのである。但し神社が宗教であるか否かは大いに疑問の存するところで、未だ解決されてゐないが、茲には姑く宗教的建築として取扱ふことにする。

世界各國の宗教建築は其の宗教の性質の異なるに従つて其の構成を異にし、各自特殊の名稱を有する。支那では道教の伽藍を觀と稱し、佛教の伽藍を寺と稱し、更に佛、儒、道の諸教に屬する各種の殿堂を一括して、廟と通稱して居り、印度に於ける印度教、佛教の伽



4 藍は一括して英人はこれをテンプルと謂ふが、印度教のものはこれを神祠と呼び、佛教のものはこれを佛寺と呼んで區別することが妥當である。埃及、バビロニア、アッシューリア、ペルシャ、希臘、羅馬諸國の古代宗教の殿堂も英人は總てテンプルと呼ぶが、これ等も神祠又は祠堂と譯すべきである。基督教のチャーチ、猶太教のシナゴグ、回教のモスク等に至つては寧ろこれを譯さざるに如かぬが、強ひてこれを譯して前者を教會堂、後者を禮拜堂と呼んでゐる。

さて日本の神社は、支那の道教に屬する特殊の廟即ち古の帝王、名臣等を祀るもの、或は自然現象を神格化してこれを祀るものと近似の性質を有し、更に遠く西亞諸邦の神祠とも若干類似の點を認めるが、併し日本の神社には彼等とは大いに異なる獨得の性質がある。それは我國の本格の神社は我が皇祖皇宗を奉祠する官幣國社であり、其の流れを汲むものが功臣を祀る別格官幣社であり、其の他に天神地祇を祀る各階級の神社がある。此の我が國の神社の特殊性は夙に外人にも認識され、英米人はこれをシュラインと稱してテンプルとは言はぬのである。

要するに「神社」はただ日本のみに限られ、特殊の宗教的存在及び宗教的建築であり、外國の如何なる宗教にも宗教的建築にも適用さるべきものではない。日本の神社の建築も亦これに従つて、其の構成の精神、其の施設の意義に於いて斷然外國の宗教建築と相異なるものである。其の建築の様式・手法・材料・構造等は、日本の國土と國民の特殊性から産れ出たもので、日本独自の創造であることは論を俟たぬ。

日本の佛教は、元來欽明天皇の御宇に百濟から輸入され、次いで奈良朝に入り唐より傳來せる奈良六宗が併立し、平安朝に入り天台、眞言の二宗を輸入し、鎌倉時代に於いて臨濟、曹洞の禪宗を宋から將來したが、其の間に日本に於いて創立された宗派、即ち融通念佛、淨土、眞、日蓮、時等の各派が興り、日本の佛教は最早印度の佛教でもなく、支那の佛教でもなく、新たに日本の佛教となつたのである。即ち日本の佛教建築は、元來其の範を支那に採つたのであるが、終にこれを換骨奪胎して、今や勿論印度の佛教建築でなく、支那の佛教建築でもなく、新たに日本の佛教建築を創建したのである。

5 即ち日本の神社建築は、日本國民が皇祖皇宗に對する敬虔な尊崇の念から創造された世

真無比のもので、世界宗教建築界に異彩ある光輝を放つものであり、日本の佛寺建築は元來支那建築から出たものであるが、終にこれから脱け出して別の新機軸を出したのは、日本民族固有の精神、思想、趣味、技能等の力に由るので、洵に我が建築の世界に誇るべき偉蹟である。

明治初年我が國に歐米の建築家が渡來した時、彼等は日本の神社を評して「これ實に最も低級なる原始的建築である、南洋の蠻族等の造る醜矮なる小屋と同工異曲のものである」と言つたので、當時の人は「成る程」とこれを妄信した。然るに、最近獨逸の建築家ブルノ・タウトが伊勢大神宮の社殿を拜して其の純眞簡明にして、しかも崇高端嚴なる風格に魅せられ「これ實に日本建築の靈のみならず、實に世界建築の靈である」と言つたので、世人は再び「成る程」と感激しつゝあるのである。

我々が我が國の神社・佛寺を以て世界に誇らんとするのは、唯、其の本質に於いて世界無比であるが爲めだけでなく、又單に其の建築の獨創的異彩あるが爲めだけでもない、別に其の古今東西に冠絶する光輝ある歴史を有するが故である。我が國建築の歴史を回顧すれば

太古以來今日に至る迄、大體に於いて三大期を劃することが出来る。第一期は開關の太古から佛教渡來まで、此の期間の建築は南洋的性質を有する日本固有のものであり、其の中心は神社即ち官室、官室即ち神社であつた。第二期は佛教渡來から明治維新まで、此の期間の中心建築は、主として佛寺建築であり、其の性質は多量の支那系の元素を含有してゐる。第三期は明治維新から今日に至るまで、此の期間の建築の主なものとは外國の感化に因るもので、其の中心は公共建築である。

即ち我が國の第一期の文化は神社建築に由つて、第二期の文化は佛寺建築に由つて、第三期の文化は公共建築に由つて代表されると云ふことが出来る。又第一期の建築は南洋的、第二期はアジア大陸的、第三期は外國的又は世界的とも言ひ得るので、我が國の建築は極めて順調な進歩發達を経たものと認められる。しかも此の三期の中心建築が連綿として今日に至つて共存共榮の實を現はしてゐることは眞に世界稀有の現象である。これを外國に比べれば、例へば埃及の第一期文化の産物たる古代埃及の豪壯魁偉な建築は全然滅亡し、殘骸となつて沙漠の中に埋もれ、其の上に建てられた第二期の基督教建築も全く廢滅して

僅かに枯骨の残片を留め、第三期の回教建築が今や其の上に建つてゐる。又、例へば波斯第一期文化の遺物はヘルセポリスやスサに廢墟として散在し、第二期の薩珊文化の建築も全然死滅して、斷片的に残骸を遺し、今や第三期の回教波斯文化が既往の遺趾の上に建てられてゐる。又例へば希臘の第一期文化の花として謳はれたパルテノンは、今や靈魂を失つた廢殘せる一遺骸として淋しくアクロポリスの上に横たはり、第二期文化のピザンチウム式の建築は魂のぬけ殻として形ばかりの姿で残つてゐる。

此の間に在つて我が日本の第一期文化を代表する神社は、其の數内務省の臺帳に登録されて居るものだけでも十二萬に上り、何れも國民崇敬の中心として、我が國體の尊嚴を具體的に語る靈跡として、彌榮えに榮え行きつゝあり、第二期文化を代表する佛寺は、文部省の公認するものだけで七萬以上に及び、何れも國民信仰の的となつて永く榮え行くのである。第三期の公共建築の前途は洋々として際涯を知らぬのである。

我が國の建築史が獨り斯くの如き世界無比の經路を辿りつゝあるのは何故であるか、それは言ふ迄もなく我が國體の然らしむるところであると同時に、古來未だ嘗つて外國より

威力を以て其の文化を強ひられたことがないからである。彼の埃及、波斯、希臘等の諸國の如きは、皆外敵の爲めに固有の宗教文化を奪はれ、外敵の宗教文化を強制されたのであるが、我が國が未だ曾つてその國辱を蒙らぬのは洵に天佑といふべきであるが、畢竟我が國の尊嚴犯すべからざるものがあるに由るのである。

・私は此の意味に於いて我が國の神社、佛寺を神聖な國寶と信じ、其の建築の本質、材料構造、様式、手法等を徹底的に研究することは、ひとり建築の責務なるのみならず、我が國民の均しく深甚の關心を以て此の問題に臨むべきことを痛感する。

## 神社と其の建築

### 一、神社の不思議

先づ神社建築を考へる前に當然考へねばならないのは、神社とは何ぞやの問題である。神社を正しく理解することが出来て、初めて神社建築を正しく理解することが出来るのである。もとより私には神社の本質が何であるかと云ふ様な専門に立入つたことは十分に判らないが、聊か神社建築を手がけたので、不徹底ながら或る所信は持つてゐるのである。そこで前提として述べたいのは、日本の神社の現状はどんな風であるかといふこと、竝にそれに就いての私の感想である。

日本現在の神社数は、内務省に登録されてゐるものだけでも十二萬以上に上つてゐて、地域的には、殆ど全國の津々浦々にわたつて隅々まで分布してゐる。ところが、それ等の神社を観ると種々の不思議なことがある。恐らく七不思議ぐらゐはあらうかと想はれる。其の中でも第一に感ぜられる不思議は、東京、都中でも見受ける神社の現象である。今日の東京は、あちこちに獨、米、英、佛等の諸國の風を模倣した所謂洋式建築が續々建てられたことであるが、殊に目ざはりになるのは、七階、八階を數へる粗末な米國風のコーマーシャル・ビルディングがニョキ／＼と建てられたことである。ところが、其の四角な殺風景な建物の下に、時として千木、葛緒木を屋根に載せた、數千年前の古様式其のまゝの神社建築が見られる。其の適例は日比谷の大神宮であるが、其の對照の強さは實に驚くべきものであつて、これは恐らく日本のみに見られる奇觀であらう。しかし大抵の人は無關心に見て通つてゐる。一體それ等の人々は、米國式の摩天樓と純日本の古建築との異様な對照を何とも感じないのであらうか。私は少しく神經の鋭敏な人であるならば、異様な感を起さないといふことはあり得まいと思ふ。



それから今一つは神田の三崎町にある三崎神社である。私は毎度其の前を通るので早くから気がついてゐるが、此の神社は土藏造であつて坊間のある民家と少しも違はない。白壁で、防火戸のある所など、確かに土藏造通有の形である。ところが其の屋根を見ると、反屋根で千木がついてゐる。即ち下は現代の土藏造で、上は數千年前の建築様式である。これも我々から見ると甚だ不思議なものであるが、人々は何とも思はないで其の前を往來してゐる。次に地方へ行つて見ると、今度は又他の意味で頗る不思議な事が幾つかある。汽車の窓から覗いても、田の中、畑の中、山の中、市街の中の到る處にコンモリと一むら繁つた森のあるのが見えるが、それ等の森の中には必ず大小の神の宮がある。これが又甚だ不思議なものであつて、それ等の森や宮は大抵其の創立以來のまゝの地點に、周圍の變化とは無關係に残存してゐるのである。環境は刻々に目まぐるしいばかりの變化をして、昔の山林が伐り拓かれて大都市が形造られ、昔の原野の上には坦々たる道路が通ずるといふ風に、桑田變じて海となる以上の有様であるにも拘らず、森と神社だけは時代を超越して永久に其の現状を維持して來てゐるのである。そしてたゞ何等かの事情があつて、こ

れを他へ遷さうといふやうな問題が起つても、直ちに喧しい議論が起つて、頑強に動かさない。道路開通のためとか、學校建築のためとかいふ公共的必要の前にも、神社だけは決して其の地を譲らうとしない。これは一般の事として何者も怪まないが、神社がさういふ根強い力を持つてゐるといふことは、實際不思議なことである。

又もう一つ不思議なのは神社の祭禮である。祭の式は各地方の各神社によつて異なるがそれ等は何れも一種獨得の不思議なものである。其の祭日には官の氏子達が狂氣の様に喜び騒ぐ。老若男女を問はず、凡てが時代を忘れ己を忘れて歡喜する。こんな事は世界に類例がない。

これ等のことを日本人は長年の習慣で別に不思議とも思はぬ様であるが、しかし靜かに考へて見ると確に「たゞごと」ではない。決して冗談では出來ぬことである。どうしてもこれには深い理由がなければならぬ。そこでこの様に強大な力を持つて深く民心に食ひ込んでゐる神社とは抑も何であるかと云ふ疑念が當然起つて來る。

## 二、神社と國體

一體、神社とは何であらうか。自分が常識的に考へた所では、凡そ神社成立の動機には二つあると思ふ。一つは祖先崇拜であり、他の一つは自然的崇拜である。そこで後者の方は暫く措いて、祖先崇拜の動機から出發した正しい神社について、今少し深く考へて見たい。

日本の神社の出來た根本動機が祖先崇拜にあることは無論であるが、しかし祖先崇拜教は世界の大部分の國にあつて、決して日本獨得の風習思想ではない。だから日本の神社が尊いのは單に祖先崇拜の故ではなくして、日本だけが今日尙依然として昔のまゝの佛を持續し、而も全國民の崇拜的となつて彌榮え行くことである。これは想ふに我が日本には萬世一系の天皇があつて國の中心となり、國民が一齊に其の中心に向つて崇敬を致すとともに、天皇の祖宗はまた國民の祖宗であるが故に、これを崇拜するといふ特色ある基礎の上に考へを置いてゐるからのことであらう。

支那の儒教も祖先崇拜を尙び、殊に祖先の祭祀を絶やしてはならぬといふことを力説してゐるが、併し乍らそれは個人的であつて國民的ではない。支那の天子も祖先を祭るが、國民とは没交渉である。これは云ふまでもなく萬世一系でないからである。我が國の神社が強い力を有するのは萬世一系の國體のためである、とする私の議論は、此の一事例を以つても證明されると思ふ。神社の建築を考へるには先づこれだけのことを理解してかゝる必要がある。

## 三、神社建築の變遷

さて、それならば祖先を祭る神社は如何なる形式に據つて造らるべきものであるかといふと、それは、孔子の言つた「神在すが如し」の一語で盡きる。祖先が生存してゐると見えて、其の神靈を奉安する建物を作り、生ける人の如くこれに奉仕するといふのが神社建築

の本旨である。其の適例は出雲の大社であつて、これは天孫が大國主命のために造られた官室即ち住宅である。又伊勢の大神宮の形は恐らく當時の天皇の官室其のまゝのものであらう。これは垂仁天皇の御代の造營であるから、恐らく垂仁天皇の官室の形に倣つたものに相違あるまい。即ち、この二つの例は何れも「神在すが如し」が根本になつてゐると思ふ。

ところが其の後、神社建築は時代と共に變つて、現在では神社の様式が十幾つかに別れてゐる。そこで問題となるのは、神社の初めて起つた動機は判つたが、時代と共に變るものであるとすれば、明治時代の神社は明治式の建築、大正時代に造られる神社は大正時代の宮殿建築でよいであらうかといふことである。かうなると理窟がむづかしくなつて來るが、私はそれには賛成しない。それは大變に間違つた考へであると思ふ。何故に誤であるかを説明するに先だつて、出雲大社以來の建築について聊か述べて置きたい。

上代の最古の神社建築様式が出雲大社の「大社造」であることは無論であるが、其の次に來るのは「神明造」で、これは伊勢の兩宮に其の典型が見られる。先づ日本古代の神社

建築で主要なものと云へば此の二つである。降つて平安朝時代になると、「大社造」から出發して變化したものに「春日造」があり、「神明造」から變化したものに「流れ造」があり、それから今一つ特殊なものとして「大社造」「神明造」の兩方を祖として生れたと見られるものに「入母屋造」がある。以上の五種が我が國神社建築の根本的の型であつて、其の他は何れも枝葉の變化に止まつてゐる。例へば「權現造」の如きは、桃山時代に完成して、今日猶盛に流行してゐるもので、東京の神社では上野の東照宮、水田町の日枝神社等がこれに屬するが、決して新しい様式ではなく、以上の五種中の或る要素を取り合せてプランを變へただけのものに過ぎない。

かういふ風に見て來ると、日本の神社は今迄に各種の變化を見たが、根本的には平安朝が打止めで、それ以後は變つてゐないと云はねばならない。とすると、時世につれて、明治式、大正式、昭和式の神社を建造しようといふ議論は、甚だ誤つたものであることが判る。多くの人は皆この根本の觀察を誤つてゐるのである。

上代は文化状態の判明せぬ時代である。建造の様式からいふと其の系統は南洋的である

と云へるが、文化の性質は明かにすることが出来ない。最もはつきりと判るのは、平安朝で、これは前代に續々輸入された支那の文化を日本化して大成した時代である。言ひ換へれば「和様」の時代、日本趣味の成立した時代である。だから神社建築もこの時代に完成したのであつて、同時に又それで終を告げたのである。それ以上に強ひて變化させようといふのは意味のない事であつて、謂はゞ一種の建築的遊戯に屬する。そのやうなものは決して造るべきでないと思ふ。

其の理由を説明すると、純建築論に入ることになるが、一體建築の様式は個人が遊戯的の氣分で造るべきものではない、といふよりも造り得られるものではなく、いつ誰が造つたといふ事もなく、しらすくの中に時代の要求に因つて出来るものである。何か一つ珍しいものを造り出してやらうといふやうな不純な野心では決して出来るものではない。

日本の神社建築は前にも述べた通り宮室建築に關聯して出来たもので、「大社造」「神明造」が其の當時の宮室を模本として造られたばかりでなく、「春日造」も「流れ造」も皆其の時の宮室の建築様式から暗示を得てゐるのである。だから平安朝に至るまでの變化は、

何れも皆宮室の建築様式に率ゐられて餘儀なく變化したのである。

そこで、これ等の變化の動機を仔細に研究して見ると、大體に於いて三つに別れると思ふ。其の第一は配置の變化である。

配置の變化の動機は神社の民衆化といふことが其の第一にあると云へる。最初に「大社造」の出来た時には、恐らく民衆といふ考へはなかつたであらう。伊勢の兩宮最初の御造營の時もこれ又同様であらう。それは何故であるかと云ふと、そもく其の造營の理由は皇室に於いて神器奉安の神殿を造られるのが主であつて、人民にこれを禮拜させようといふ考は決して主になつてゐなかつたと思ふ。だから其の建築は普通の宮室建築であつて、時に人民が禮拜するための設備はなかつたのである。ところが後になるとだんく神社の規模が完成して來て、それらの設備にも考慮を拂ふやうになつた。遺憾ながらまだ其の記録が得られないので、其の沿革を系統的に述べるわけには行かぬが、藤原百川が初めて制定した造殿儀式には、既に拜殿、幣殿等の名が現れてゐて、民衆の禮拜といふことが、考へに入れてあるやうである。其の後いつの頃からか一層複雑になつて、例へば神樂殿を置

くとか、神厩、神符授與所、手水舎等を設けるなど、甚だ賑かなものになつて來た。このやうなプランの變遷は民衆の要求に基くものであつて、祭祀の儀式が變化したためではなく、神社に對する民衆の觀念がだん／＼深くなるにつけて變つたものであらう。

次に形の變化したのは、云ふまでもなく其の模範とする宮室の型が變つたためである。此の事については前述したから多くを云ふ必要はない。

第三の裝飾細部の變化する動機は格別の大問題でもない。これ等は其の時、事に當つた建築家の一料簡で趣味的にすることである。だから其の時々の一般の流行を受けて、或は寺院建築から取入れたこともあらうし、神佛混合時代などには、寺院の裝飾其のものを流用したことさへもあるであらう。鬼に角あまり重きを置く必要のないものである。

#### 四、新神社の様式

神社の建築様式が變化した動機は大略右の如くであるが、そこで、それでは今日新たに

神社を造る場合にはどうすればよいかと云ふことが、次の問題になつてくる。

或る建築家は、昔の古い神を祭るには古い型でもよいが、新たに神社を造る場合には、一切の傳統を離れて自由な様式で造營すべきである、と云つてゐるが、これでは神社建築は時々刻々に何處までも變つて行つてよいといふ議論になる。私はこれに賛成することが出来ない。

この説をとりあげるならば、第一明治天皇をお祭りする神社は、明治以前の建築様式では不相應であると云はねばならぬ。まして今日は昔のやうに神社建築の必須材料である檜が豊富には得られず、又たとへあつたとしても、木材は火災に罹り易く腐朽し易い缺點があるから、いつそ總てを明治式にして鐵筋コンクリートにした方が、永久性があつていゝではないかと云はねばならない。

しかしこゝに考へねばならぬことは、建築材料が變れば、當然それにつれて形も味も變つて來る。異つた材料で同じ形を造らうとすれば其處に無理が出来る。學問上の原則としてこれは避くべきことである。ところが驚いたことには、近頃神社建築に對しても、其の

無理が無條件で行はれようとしてゐる。私は非常によくないことだと思ふのである。

我々人間は其の生活状態が刻々に變るものであつて、住宅は我々の生活を入れる容器であるから生活が變れば住宅が變るのは當然である。だから例へば江戸時代の建築は、勿論現代には不向であつて、從來の木造建築が震災を一轉機として漸次に鐵筋コンクリートに換へられるのも敢て怪しむに足りないが、しかし神社は人間の住宅ではなく、神靈の在ます官居である。神靈の生活は劫久に不變である。それを時々刻々に變轉すべきものとして神社を造るといふのは、神の生活を人間の生活と混同するものである。これ程不合理なことはない。だから神社は何時でも既往の型に依つて建てるのがふさはしくもあり、又必ずさうしなければならぬものである。

以上は私が神社建築は新様式に依つて造るべきではないとする一つの論據であるが、更に又此の事は他の方面からも論ぜられる。それは神の生活が不變であり、靈の生活が永遠であると共に神に對する國民の觀念も、神に奉仕する祭式も、依然として昔のまゝに變らないことである。これ等のものが若し變化すれば、神社建築も必ずそれに伴つて變らねば

ならぬが、さうでない以上は建築形式ばかりが變るといふのは意味のないことである。即ち今までの神饌であつた海の物、山の物が西洋料理となり、祝詞もローマ字で口語體に書かれ、神座も椅子、テーブル式に改められるといふやうな時が來れば、神社も在來の建築では不適當であるから、其の時にこそ建築様式を一變して所謂文化的建築とすることも必要であるが、其處まで變化せぬ以上、妄りに建築ばかり變へるといふのは宜しくない。

しかし舊型に據ると云つても、如何なる型に據るべきかは、これ又深甚の考慮を要するので、必ずしも舊型の直寫模倣たる必要はない。元來既往の型にはそれぞれ特殊の條件があり、それにそれぞれの意味がある。其の意味を、十分に理解してかゝることが必要である。ところがそれに注意してゐる人は甚だ少い。日本の建築物は其の種類に應じて、内容に材料に、或は形に裝飾に、それぞれ獨得の異つた意味を持つてゐる。それを知らずに漠然と處理すると、とんでもない錯誤に陥るのである。

## 五、神社木造論。

住宅は生活に都合よく出来てゐるべきなのであるから、其の主たる意味は内容にある。材料は煉瓦でも木でも拘る所はない。ところが神社は初めから材料に意味を持つてゐる。それは木材殊に檜である。此の事は古事記にも出てゐて、太古からの仕來りであるから妄りに破る理由はない。そこで木材を以て造るとすれば、當然木材にふさはしい形がひとり出て來てくる。即ち材料が原因で形は結果である。これは動かすことの出来ない約束であるから、鐵筋コンクリートで作つても形が同じであればいゝといふ説は成立しない。それは本末顛倒の考へであり、木造の形に似たものは出来るかも知れないが眞の同じ形にはならない。形は兎に角としても味が出て來ない。木材の持つてゐる和やかな温かい味のあつた感じは、石や鐵では眞似ようとしても眞似ることは出来ない。これは彫刻でも同じことで、木彫と石彫とは、たとへ其の現す人の形は同じでも感じは違ふ。形の上では寸分違

はないとしても印象が違ふ。要するに神社は木で造つて、はじめて神社の感じが現れるのである。

そも／＼日本人が其の祖先の靈を祭る神社を木造としたのは、木材が多かつたといふのが確に根本的の物質上の動機であらうが、又國民性として清淨潔白を尊み、檜を白けて白木のまゝで建てるといふ精神上的の觀念に基くものと思ふ。伊勢兩宮の二十年御造替といふことも、常に清新にして汚れない、すが／＼しい感じを尊む所から來てゐると思ふ。だから神社は第一に其の材料を尊重せねばならない。

或は神社を木造にしたのは文化が幼稚であつたため、當時大いに文化が進んでゐたならば石の様に堅牢な耐久材料で造つたであらうと論ずるものもあるが、我等の祖先は夙に石を使ふことを知つてゐたのである。現に棺槨くわんかくや磯城ひそぎなどには石を用ひてゐる例が多くある。だから神社も石を以て造らうと思つたのなら、立派に造り得たのである。しかもそれを敢へてしなかつたのは、石を以て作るべきではなかつたからである。これは思ふに木に對する或る深い信仰があるからの事であらう。

今日まで神社が木材のものとして傳はつてゐるのは、それだけの理由のあることであつて、昭和の今日と雖も神の宮居としては矢張り昔の型がよいのである。

かういふ説を述べると、それは成る程理窟かも知れないが要するに學究の迂論で、今日實際にそんなことが出来るものではない。殊に東京の様な土地では一層のことである。場所によつては三十年乃至五十年毎に一回火災に罹る。神田の神保町、小川町などは其の適例である。そんな所へ木材の神社を建てるのは愚の骨頂である。矢張り止むを得ないから鐵筋コンクリートにする外はあるまいと、云はれるかも知れない。しかし私はさうは考へない。甚だ頑固のやうであるが矢張り木材説を固守したい。

理窟で行くなら、火事が恐ろしいために神社の本質を没却してもよいのかと私は反問したい。併し勿論東京の市街建築の如きは、將來必ず全部が不燃物質で造られる日が来るであらう。それが幾十年の後であるか、幾百年の後であるかは固より今日豫斷することは出来ないが、其の曉には殆ど全部が鐵筋コンクリート若しくはこれに優る新材料で造られるのであらう。しかしそれがために神社の材料や建築様式が變らねばならぬといふことはな

い。コンクリートの市街建築の中に木材の神社が存在してゐることは危険この上もないと云ふものもあるが、そんなことは少しも憂慮するには及ばない。要は火災に對する注意を怠らねばよいのである。私はそれよりも更に恐ろしいのは、神社をコンクリートにしたために、その耐震耐火性に神官神職が氣を許して、注意を怠ることに由つて却つて危険の度を増すことである。常に戦々兢兢として神社を守つてゐる所に神へ仕へる敬虔の念が出て來るのであつて、油斷をするといふことは、精神的罪惡であると思ふ。

27  
會つて或る人が、其の崇敬する神社をコンクリートにしたいといふから、私はこれに答へて、それは以での外である。強ひて造れば造れぬこともあるまいが、しかし出來上つたものは社殿ではなくして、只社殿に似た建築物である。御神體格納庫とも云ふべきものであつて、社殿といふべきものではないと云つたら、君の議論は極端であると云つて笑つたが、そこまで徹底せねばならぬと私は考へてゐる。又他の一面から想像すると、東京全體が見渡す限り一面に硬い建築ばかりである中に、一點の和かい温か味のある木造の神社があることは、どれだけ見る人の感情を和らげ、崇敬の心持を與へるかも知れぬと思ふので



ある。尤もこれは私の理想論であり、當事者はどう考へるか分らぬが、兎に角、私としては、どこまでも木造で行きたい、昔の型式を失ひたくはないと思ふ。

今日は昭和維新の時代である。日本獨得の文化を建設すべき時代である。國體の尊嚴を大いに發揚すべき時である、といふやうなことは大抵の人の口にする所であるが、これは至極結構なことであつて、私としても勿論衷心から賛成する。ところが、さういふ人たちが、神社建築の精神を理解せず、これをコンクリート造にせよと主張するのは何事であらう。我が國民精神の根本であり基礎である神社を理解せずして何の國體論であらう。苟くも神國日本の基礎の上に文化を樹てようと思ふ人は、先づ神社の眞の意味を廣く民衆の間に吹込んで、我が國體の基く所を十分に知らしめねばならぬと考へる。

## 神社建築の發達

### 總論

神社とは、我が國の皇祖皇宗、天神地祇、臣下の特に功績あり、記念すべき事蹟あるものを祭る所を意味し、神社建築とはこの祭祀に必要な建物である。この必要と云ふ語は、實用上と、尊嚴を保つ體裁上との兩方に通じてゐる。

我が國は其の國體上、神社建築は神代の太古から今日に至るまで、連綿として持續して來た。假令其の間に隆替の變遷はあつても、大體に於いて順次に發達し、太古の簡單なものから今日の複雑なものとなつた。其の原因も種々考へられるが、要するに祭祀の施

設の推移、人民の嗜好の變遷、知識の進歩等によるもので、特に中世に於ける佛教の影響は著しく神社の形式を變化せしめた。

元來、神社は皇祖皇宗を祀るもので、所謂宗教的分子は全く含んでないのであるが、後世漸く宗教的なものとなつて來て、何處の神社は何の利益があるとか、何の神は何に效驗があるとか云ふ迷信から、終に全く宗教となり終り、それが建築の上にも影響を來たしたわけであらう。神社の真相を顯揚するためにも、こゝに神社建築の起源及び發達の順序を講究し、將來に於ける我が國の神社建築が、如何なる方針を採つて進まねばならぬかを考へるのも決して無駄ではあるまい。

さて、神社建築の沿革の概要を述べるにあつて、先づ困難なのは時代の分類である。何故ならば、神社は始終改造されてゐて、古代の様式を其の儘に存してゐるものは、殆どないからである。例へば伊勢神宮は二十年毎に造營され、賀茂及び住吉神社は二十一年毎に改築され、宇佐八幡宮は三十三年毎に、出雲大社は六十年毎、春日神社も六十年毎と云ふやうに改築された。其の改築される毎にいく分かづつ形式が違つて來たのは止むを得な

いわけで、従つて今日から千年、二千年前の神社の眞正の形式はどうしても知ることが出來ない。僅かに今日の形式から古代のものを推測するに過ぎない。此の點、神社建築は佛寺建築よりも餘程調査に困難を感じるのである。

併し乍ら、幸ひ古文古書、繪卷物など參考にするものが多く、此の遺物の乏しいのを補つてゐる。それで一部はこれ等の記録に由つて大體の發達の歴史を考へ、一部は現在の神社建築に就いて實地を調査し、兩方から綜合して來ると日本神社建築史の大凡の組立が出来る。先づ第一期は無建築の時代と云つて、神を祭るのに建築を必要としなかつた時代、第二期は神社宮室無別の時代、大社造及び其の系統の時代、第三期は神社宮室有別の時代即ち神明造の時代、第四期は曲線形適用の時代、即ち、春日造又皇子造及び流れ造等の時代、第五期は雜種の形式出現の時代で、入母屋造が此の内に屬する。第六期は本殿・拜殿連結の時代、即ち權現造及び八棟造の時代である。

時代	名稱	形式
神代より奈良朝の 終りまで	磯城神籬 大社造 大鳥造 住吉造 神明造	正方形、前後切妻 長方形、前後切妻 長方形、前後切妻 長方形、左右切妻
平安朝より足利時 代の終りまで	春日造 流日造 八幡造 日吉造 入母屋造	直角形、妻入り、向拜あり 直角形、平入り、向拜あり 内陣切妻造、外陣流れ造 直角形、入母屋、平入り、向拜あり 〃 〃 〃
豊臣及び徳川時代	権現造 八棟造	本殿、間の間、拜殿を連結す 権現造の複雑なもの

以上の外に、別に多数の變態があるが、これは各論の所で説明しよう。

第一章 無建築の時代——磯城神籬

我が國には太古、神社建築といふものは存在しなかつた。元來「社」即ち「ヤシロ」とは屋代のこと、物體の名稱ではなく場所の名だと云ふことである。尤も「ヤシロ」の原語に就いては他に異説もあるやうであるが、此の説が一番實際に適合すると考へられる。そこで、太古の神を祭る方法は如何なるものであるかと云ふと、清淨な土地を選んで石を築いて周圍を區劃し、これを磯城と名づけ、此處に神籬「ヒモロギ」を植ゑ、この神籬に神體を迎へて祭祀を行つたので、屋代と云ふのは即ち此の意味ださうである。次に神籬と社との考證をあげる。

〔鐘廻響〕神 籬

(上略) 此語の本義は生諸樹おひもろぎの「於」の省りたるにて、本は神靈の憑鎮り坐る森の樹立

を指て申侍りき。其は上代は出雲伊勢などを除てはをさく／＼官殿はなくして、三輪山などの如く、生茂れる森ぞ即ち神の御社なりつればなり。

〔東雅〕社、ヤシロ

ヤシロとは屋代也（中略）大倭國青垣三諸の社は大三輪大神の願のまに／＼大己貴神の齋奉られし所也。しかるに此の社のごときは宮殿等の制もあらず、唯其の齋場を設けられしところにて、漢にして社と云ふものゝ如く也ければ、社の字を用ひて、ヤシロとは讀し也。

大和の三輪神社は日本の國土の靈を祀る神社であつて、三輪山の樹林が一つの大きな自然の神籬であると云ふことが出來よう。當時の祭祀の式場の周圍の磯城は、磯堅城とも磐境とも云つた。

〔古事記傳〕

（上略）磐境は伊波紀と訓べし。崇神卷に磯堅城と同じことなり。神を祭る場を石を築周らして構へたるなり。

又神武天皇が靈時を鳥見山に設けて郊祀を行はれたと云ふことが歴史に見えるが、これも磯城を築き、神籬を植えて祭場とせられたものであらう。要するに我が邦最初の神社には建築物はなかつたのである。

殊に自然物に靈ありとしてこれを祀るものには此の型が用ひられてゐる。例へば武藏國兒玉郡の金鑽神社などは矢張り一つの小さな山其の物を神殿とし、その山の麓に拜殿を建て、居る。此の小山は、昔砂金を産した爲めにその砂金を産するところの山を神體として祭つたらしく、和銅年中の創設である。又陸奥の八溝黄金神社もそれと同様だと云はれ、大和の石上神宮にも本殿がない。此の種の實例は他にも若干あるので、これに由つて考へて見ると、祭祀に社殿を持たないものは元來自然物崇拜から出發したので、此の式は後世まで長く持續されたことが分る。

## 第二章 神社宮室無別の時代

## 其の一大社造

日本の建築は宮殿を以て始る。伊弉諾、伊弉冉二尊の時に已に八尋殿が建てられた。これは必ずしも八尋の大きさがあつたわけではなく、八尋とは大きいことの形容であるらしい。兎に角、此時已に相應なる宮室が出来てゐたのである。其の形式は所謂底津磐根に宮柱太しき立て、高天原に千木高しりて、柱は太く板は厚く廣く、と云ふ風であつた。

そこで我が國の皇祖皇宗を祀る神社の最古の形式を考へると、無論これは宮室の形をそのままに適用したものと思はれる。即ち出雲の大社がそれで、所謂大社造と稱される。此の社は元來天孫瓊々杵命が、大國主命の爲めに造らしめ給うた宮室であつて、日本最古の神社建築である。今日の神社はもとより神代の形式を其のまゝに存しては居ないが、大體

に於いて舊式を遺してゐる。次に大社の建築法の概略を説明しよう。

大社建築に就いては、不思議な云ひ傳へがあつて、人皇十二代景行天皇の御宇に造立された時には、高さ三十二丈で、中古に十六丈となり、今は八丈になつた、と云ふのであるが、實際に三十二丈や十六丈の建築があつた筈もなく、これは八の字の倍數を以て高いことを形容したものであらう。其の三十二丈の正殿に就いては、古來金輪の造營と云つて圖面が傳へられてゐる。これに依ると、柱は三本を合せてこれを鐵輪で巻いて直徑一丈としたものらしく、又桁は長八丈、厚三尺、背四尺五寸と云ふことであるが、このやうな細高い宮殿は實際には在り得ない。

現在の大社の本殿は二間四方の宮殿で、中心に心の御柱が特別に太く立つてゐる。それと前後にある柱を「うづ柱」と稱へてゐるが、これは他の柱よりもやゝ太く、奇妙なことには他の柱と列を離れて、少し外側へ出てゐる。心柱から向つて右の方に障壁があり、その障壁の後が神座である。四方には廻り縁があつて高欄が附いてをり、階段は前の右の間の前に付いてゐる。即ち入口は前面の右の間になるので、二た間の前面であるから、入口

が中央と云ふわけには行かないのである。屋根は前後に切妻があり、破風は元來直線形であるべきのが、今日では少し曲線になつてゐる。軒は肘木も何もなく一と軒で、屋根は檜皮葺で、棟に千木、勝男木がある。

これを、我が國最初の原始的建築として古來工匠間で傳へてゐる天地根元宮造と稱するものと比較して見ると、非常によく似てゐる。つまり大社のプランは太古の住屋のプランをそのままに傳へたもので、此の類型が今でも朝鮮の北部殊に日本海に面する地方に行はれてゐるのは注意すべきことである。今の皇居内の賢所の形式もこれと同様であると云ふことである。又大和の橿原神宮の本殿は、京都御所の内の賢所を移したものであるが、これも同様の形式である。

出雲國八束郡に神魂神社と云ふのがあつたが、其のプランも外觀も、凡てが全く出雲大社と符合してゐる。唯中の障壁が、大社のは右にあるのに、これは左にあることのみが違つてゐる。この附近にある熊野大社も全然これと同型である。

### 其の二 大鳥造

大社造から出て少し變化したものに大鳥造がある。其の代表的實例は和泉の大鳥神社である。其のプランは大社造の「心柱」と前面の「ラア柱」とを取り去つて内部を前後の二區に分ち、前部を「外陣」後部を「内陣」とし、「内陣」の中央に神座を置き、入口を前面中央に開いて、其の前に御階を置いたものである。即ち社殿の後面と兩側面の姿は全然大社造と同様であるが、たゞ前面が變つたので、左右均齊の儀式的風貌を備へたことになる。大鳥神社の千木の直線であることは出雲大社より多く古式を遺してゐるわけである。此の種の他の實例には越中高岡の射水神社や、伯耆の大山の麓に（西伯郡大高村）大神山神社などがある。

## 其の三 住吉造

大鳥造から出て更に少し變化したものに住吉造がある。

此の造り方は、攝津の住吉神社の本殿に於いて観ることが出来る。これは大鳥造を縦に引き延ばした形で、屋根も軒も直線形であるが、後世の仕事として懸魚だの鬼板などがあつた。勝男木は五本で四角、外部は丹塗になつてゐる。此の型の實例は住吉神社以外には見當らない。

## 第三章 神社宮室有別の時代

## 其の一 神明造

神明造は伊勢大神宮の社殿の様式で、大社造とは、系統を異にしてゐるやうに考へられる。何故かといふと、大社造は古代の住居そのまゝといふ風で、起源も滿洲・朝鮮にあるかと思はれるが、神明造の起源は南洋方面にあるらしく、其の形式も大いに儀式的に整つて來てゐる。要するに大社造とは別個の系統に屬するものと認められる。大日本史に

垂仁帝興天祖神宮于宇治五十鈴川上、雄略帝遷建豐受宮于度會山田原、二宮通稱曰伊勢大神宮、其宮殿之制、與皇居無異、屋皆茅茨、木不彫鏤、上安冰椽堅魚木、潔樸不華、而宏偉尊嚴、蓋莫以加之焉、唯皇居之制歷代之久、文質殊宜、而神宮則萬世不敢改其制也、若其天下諸社雖有尊卑之等、大小之異、蓋皆取則於比、而各有所斟酌也、云々。

と論じてあつて、當時の皇居も矢張り大神宮と同じく、神明造であつたといふのであるが、併し、皇居の制と大神宮の制とが全く同じであつたか、大神宮は皇居よりも多少鄭重なものであつたか、もとより垂仁、雄略の頃の宮室の詳なことは分らず、又創立の際に於ける大神宮の形式もよく分らないのであるから、其の比較研究は今日到底出來ないところ

である。要するに太古に於いては宮室即神社、神社即ち宮室であるといふ定説が大神官にまで適用し得るか否か、問題になるのである。但し國史の上にも明記してある通り、崇神天皇の御宇、始めて神授の鏡劍を笠縫邑に奉祀し、天社、國社を定めたと云ふのだから、此の時、皇居から神社が分れて、始めて神社建築が獨立したものと見て差支へないやうであるが、其の建築様式が皇居と神社と同一であつたか區別が出来たかは不明である。

此の笠縫邑に於ける奉祀の状況及び天社、國社の制度は今日に傳はつてゐないから、考へることは出来ない。それから垂仁天皇は皇女倭姫に命じて伊勢に内宮を建て、神鏡を奉安し、又日本武尊は神劍を尾張に止められて、爰に熱田神宮が創立せられた。雄略天皇の朝には、丹波の豐受大神を伊勢の度會に遷して外宮を造られたが、これ等は何れも神明造であつた。其の當時の形式は、若し今日の伊勢大神宮を以て推すことが出来るならば、それは大社造の如く住屋的でなく、已に餘程進歩した意匠が加へられてゐたと考へられる。

伊勢兩宮の建築は、天武天皇以來二十年毎に造替されて、其の都度に厳しく古式を守つて來たと云ふが、多少の變遷は免れない。現に延暦の儀式帳に載つてゐるところと、今

日現に見るところとを比較して見ると、容易に其の差異を發見することが出来るのであるが、大神宮のことを餘り詳しく書くのも畏れ多いことであるから、此處には内宮の方の建築についての概略を記すに止めよう。

全體のプランは先づ中心に正殿を置く。正殿は即ち神座のある所である。其の左右に東西兩寶殿があり、この三字を繞つて瑞垣があり、南北に門がある。其の外に内玉垣、外玉垣と云つて二重の玉垣を繞らす、其の外に板垣をめぐらし鳥居を四方に建て、其の前に蕃堀と云つて目隠しのやうな短い堀を立てる。外玉垣門の内の右手に、四丈殿がある。此の外若干の屋舎が附屬してゐるが、第一に此の配置に就いて注意すべきは、後世の神社の如く、本殿の前に祝祠屋とか幣殿、拜殿とか云ふものがなく、唯幾重にも垣をめぐらすのである。必定これは當時の皇居の配置に依つたものであらう。

これ等の建築物の中で、正殿が最も完美なものであるから、神明造の標本として、これの説明をしよう。正殿のプランは三間二面——三間二面といふのは正面が三間で側面が二間であること——で、前の中央の一間が入口で扉があり、其の他は凡て板壁で、周圍に椽



があり、高欄があり、前の階段には登り高欄がある。これ等は創建の時のものではなく、天武天皇以後のものであらう。全部檜造、左右切妻で、千木、勝男木が茅葺の屋根の上に出てる。又棟持柱といふのが、別に離れて左右に立つてゐて、棟桁を支へてゐる。

此の建物に就いて二三注意すべき點は、第一に棟持柱は、最古の神明造の「そば軒」が、今のよりは遙に深く出てるたので、これを支へるため特に遊離した巨柱を立てた遺風である。又凡ての柱、椽柱まで所謂「底津盤根に宮柱太しき立て」で、掘立て柱になつて居り、其の太さも、底部から上に行くに従つて段々細くなり、頭部は凡そ一割の細りとなつてゐるのは、昔自然のまゝの木を使つたしるしである。千木は向つて左を上、右を下に交叉し「拜み」の所で二本の面が、段違ひになつてゐるのは、昔丸木を重ねたまゝを細か何かで縛つた遺風であり、屋根を貫通して高く空中に聳え、其の末端は水平に切つてある。又千木の「拜み」の下に「鞭掛け」又は「長小舞」と云つて、左右各四本の筭の様な棒が植ゑ込まれてゐるのは、元來「小舞」の痕跡であると解せられる。茅の葺き收めの所に「泥障板」、其の上に「覆」又其の上に「勝男木」が十本列んでゐる。

## 其の二 神明造の變態

伊勢神宮の外、熱田神宮のも近頃神明造に改築され、殆ど大神宮と同じであるが、ただ屋根が檜皮葺である。東京では日比谷の大神宮が殆ど本格の神明造であるが、屋根は銅板葺である。靖國神社は随分崩れた神明造で、屋根は厚板葺である。芝の神明も破格な神明造である。地方では、安房の安房神社、鎌倉の鎌倉宮、信濃の生島足島神社、水戸の常磐神社、宇都宮の二荒神社などあるが、何れも正格なものではない。今日では左の條件を備へたものが、皆一括して神明造と稱されるのである。

- 一、屋根の上に千木、勝男木あり、棟には覆を冠し、其の下に泥障板あり。
- 一、屋根は直線形にして茅、檜皮、銅板、柿板等を以て葺き、瓦を用ひず。
- 一、素木造、切妻平入りにして、絶対に繪彫刻の類を用ひず。
- 一、破風と千木は必ず一直線内にあり。

一、棟持柱、長小舞を備ふ。

そこで神明造の變態と、本格の神明造とを區別するために、古來我が國の工匠の間で、伊勢大神宮の造り方を「唯一神明造」と呼んでゐる。即ち、「純正神明造」を意味してゐる。

### 其三 寶龜二年制定の造殿儀式に就いて

以上の大社造、及び神明造系は、何れも屋根の形が直線形であるが、次の時代に現れる春日造や、流れ造のやうな曲線形の屋根は何時頃から出たものであらうか。春日造は、春日神社から出たものと假定して置いて、春日神社の傳記を調べると、そも／＼此の神社は和銅年間、藤原不比等が常陸の鹿島の神を奈良の三笠山の下に奉祀し、神護景雲二年に至つて香取、牧岡の神を合せ祀つて春日神社が出来たので、其の社は丹塗を以て塗られ、本邦の神社を丹塗りにすることは、此の時が始めてあると傳へられる。此の神護景雲の春

日神社の形式は、今の所謂春日造であるかと云ふのも亦疑問である。それは寶龜二年の官符に大中小社の規定があつて、これは藤原百川が勅を奉じて制定したとなつてゐる。若しこの規定が信すべきものであるとすれば、寶龜時代の神社は必ず神明造であつたに相違ないのであるが、大社造も此の制定の外に現存してゐたものと考えられる。先づ寶龜二年の造殿儀式を調べて見ると、其の全文は左の通りである。

太政官符 神祇官并五畿七道諸國司

應<sub>三</sub>早定<sub>二</sub>置天下諸社、大中小神殿、雜舍、瑞垣、珠垣、鳥居并四至内地町數<sub>一</sub>事

正一位正三位以上 爲<sub>二</sub>大社<sub>一</sub>

從三位從四位以上 爲<sub>二</sub>中社<sub>一</sub>

正五位從五位以上 爲<sub>二</sub>小社<sub>一</sub>

一、大社四至限<sub>一</sub>九町<sub>一</sub>

三間檜皮葺正殿一字 高一丈二尺、在板敷戶一本、 堅魚木八丸 長五尺、徑九寸、 千木四支 長一丈、三三、 瑞垣一重 方二丈、高七、 珠垣二重 方五丈六尺、高八尺、 内外鳥居二基 内一本高九尺口徑八寸、外一本高一丈口徑九寸、 三間檜皮葺幣殿一字 高一丈、高八尺、

丈一尺、在、五間草葺拜殿一字尺<sup>高八</sup>、五間板葺儼殿一字尺<sup>高八</sup>、五間板葺直會殿二字尺<sup>高八</sup>、  
板敷戸一本、三間草葺盛家二字<sup>在戸</sup>、左右板葺廊二字<sup>各高七尺</sup>、五間外舎二字<sup>高八</sup>、五間  
厩二字。

一、中社四至限<sup>八町</sup>、

三間檜皮葺正殿一字<sup>高一丈一尺</sup>、堅魚木六丸<sup>長四尺</sup>、千木四支<sup>長一</sup>、瑞垣一重<sup>方二丈</sup>、  
高七尺、珠垣一重<sup>方三丈五尺</sup>、内外鳥居二基<sup>高八尺</sup>、三間板葺幣殿一字<sup>高七尺</sup>、三間板<sup>板</sup>  
葺、葺拜殿一字<sup>高七尺</sup>、五間板葺儼殿一字<sup>高七尺</sup>、三間板葺直會屋二字<sup>高七尺</sup>、五間外舎二字

一、小社四至限<sup>四町</sup>、

二間<sup>一本</sup>作三、板葺正殿一字<sup>高八(一本作七)尺</sup>、堅魚木四丸<sup>長四尺</sup>、千木四支<sup>長八</sup>、瑞垣一重<sup>方二丈</sup>、  
高五尺、鳥居一基<sup>高六尺</sup>、三間草葺拜殿一字<sup>高七尺</sup>、三間板葺儼殿一字<sup>高七尺</sup>、五間雜舎二  
字<sup>同</sup>、

右被<sup>二</sup>左大臣宣<sup>一</sup>稱、奉<sup>レ</sup>勅諸國神社正殿雜舎、并四至町敷所<sup>レ</sup>定如<sup>レ</sup>件、宣<sup>レ</sup>仰<sup>二</sup>在國司、  
以<sup>二</sup>正稅物敷<sup>一</sup>令<sup>レ</sup>造進、自<sup>レ</sup>今以後不<sup>レ</sup>可<sup>レ</sup>違失、若有<sup>レ</sup>破損<sup>一</sup>者、應<sup>レ</sup>令<sup>二</sup>社司修造<sup>一</sup>、尤<sup>レ</sup>其勤<sup>一</sup>、

者、科<sup>二</sup>大被<sup>一</sup>解<sup>二</sup>却見任<sup>一</sup>、官宣<sup>二</sup>承知<sup>一</sup>、依<sup>レ</sup>宣行<sup>レ</sup>之、符到奉行。

寶龜二年二月十三日

正四位上行左大辨兼右兵衛督藤原朝臣百川

左大史外正六位上阿部志斐連東人

然し此の文書については、古來學者の疑ひがあつて、多くの人はこれを信じないやうで  
ある。其の理由の大意は、第一寶龜二年二月には藤原百川は正四位下である筈である。正  
一位正三位以上と云ふは語をなさない。元來位階の正従は相均しきもので、正従に由つて  
等差を附けるものでない。況や亦正史に徴すとも、三位以下で大社に列せられた例は澤山  
にあるのである。それから、此の官符に依れば大社の正殿は高一丈二尺とある。伊勢大神  
官は並びなき大社であるから、必ず一丈二尺の制によるべきである。ところが延暦二十三  
年の儀式帳には、正殿一區高一丈一尺とある。寶龜に定めた制度が延暦の時に變つてゐる  
と云ふことは有り得べからざることだといふので、一々尤もなことと思へるが、私として

はこれを全く跡形もない捏造であるとは考へられない。勿論随分不審な點も多いので、容易には信じられないのだが、中々面白い點もあつて、要するに、尙研究すべき問題だと思ふ。此の記録に従へば、大社の正殿は三間二面で正面に一戸あるのだから、無論神明造であり、千本の長さから考へても、これが破風の先きが屋根の上に延び出てるたものであることが分る。本殿の回りに瑞垣があり、其の外に二重の玉垣がある點は、よく伊勢の大神宮のプランに似てゐるではないか。唯二重とも各五丈六尺とあるのが不思議である。小社が二間とあるところから考へると、小社は大社造であつたかのやうでもある。一體に瑞垣の大きさから測定すると、建物が甚だ小さいことになつてしまふので、此の點もかなり疑問である。

又、幣殿拜殿の位置が何處にあつたかもよく考へることは出来ない。併し伊勢大神宮などには外幣殿と云ふのはあるが、別に拜殿といふ建物はなく、此の時に至つて始めて幣殿拜殿といふ文字が現れるのである。

若し此の官符が信すべきものなら、寶龜の頃の神社は神明造を本としたものであつて、

無論未だ曲線形の屋根は出来てゐないのである。又若し此の官符が信すべからざるものならば、曲線形の屋根は已に神護景雲年中春日神社創立の時に出来たのであらうといふ想像もなし得る。此の問題は他日別に述べることにして、こゝでは唯、私には此の官符を全く捨て去ることの出来ない旨を述べるに止める。

#### 第四章 曲線形適用の時代

##### 其の一 春日造

日本の神社建築に曲線形を適用した始めは、春日造と流れ造であると思ふ。勿論小さい部分に一寸した曲線を用ひたことは、この前からもあつたであらうが、重要な部分が曲線から成り立つといふことは春日造及び流れ造が始めである。春日造は大社造から、流れ造は神明造から出たものであつて、其の前後は不明であるが、春日造から先きに述べるのが

順序であると考へられる。

今一間四方の大社造の社殿に向拜を付けて、向拜の屋根を本字から庇の形に附出す。そして此の本字の屋根と向拜の屋根を曲線形の輪廓に由て連結すれば春日造が成り立つ。春日造にも千木、勝男木は缺くべからざるものである。又屋根は直線形であつて、本字と向拜との取り付けが圓滑でない場合でも、春日造の原型と見て差支へない。

一間四方春日造の例には、大和の春日神社を始めとして、京都の吉田神社、河内の牧岡神社、大和の大和神社、同龍田神社等がある。

### 其の二 流れ造

春日造と同じやうな理窟で、若しも神明造の社殿に、其の前面の間敷と同じ間敷の向拜を付け、其の屋根を本字の屋根と連続させれば流れ造になる。本字と向拜の屋根の連結が折線でも流れ造には相違ないが、普通の場合には一つの曲線になる。流れ造の特徴は切妻

屋根の後流れと前流れと形が均齊でなく、其の曲線が前後相異つて、而も均衡を保つところに妙味があるのである。流れ造には千木、勝男木がないのが普通であるが、有るものも珍らしくはない。京都賀茂御祖神社は流れ造の古式を存する最善の實例である。此の外流れ造の神社は全國到る處に現存してゐるので、日本の神社の大多數は流れ造である。

### 其の三 變態

春日造と流れ造にも色々な變態がある。一間の春日造が最も純正なものとするれば、三間の春日造も一種の變態と見られる。大和の談山神社の本社が此の例である。

春日造を二つ並べて、一つの建物とし、横に棟を入れて、縦の棟を連結し、棟の形をHの字形にしたものは京都の官幣大社平野神社の本殿である。流れ造は三間二面を本格なものに見做すときは、一間の流れ造も變態の部に入る。三間三面のもの、三間四面のもの、五間のもの等種々ある。京都の官幣大社松尾神社は三間四面で、武藏の大宮にある水川神

社の本殿は三間三面である。

河内水分村の建水分神社は、春日造と流れ造を連結して、一つの規模を作つてゐるもので、中央が春日造で左右は流れ造で其の間に廊があつて連絡を付けてゐる。これと丁度同じやうな意匠になつてゐるものは大和の吉野の奥にある水分神社である。やはり中央に春日造、左右に流れ造がある。同じ神を祭るのであるから、其の建物の形式も同じでいゝわけで、これは至極面白い事實だと思ふ。

京都の吉田神社の社殿は最も違例であるが、附屬の太元宮社と云ふのが八角のプランで佛堂の性質がある。唯屋根を寶形にせず、縦に棟を取つて入母屋にして千木、勝男木を附けたので、何造とも名の付けやうがなく、一種の除外例として取り扱ふより外はない。

#### 其の四八 幡造

今までは單に本殿の形式に就いてのみ述べたが、更に其の建築の配置を考へて見ると、

古代に於いては、單に本殿を瑞籬、玉垣で圍み、それに鳥居を建てたものであり、それから幣殿、拜殿等が垣と垣との間に建てられることになつたやうである。ところが平安朝の終りの頃には神社の規模が一變して來た。それ等のことは後に説明するが、先づ此の道程にある八幡造、日吉造、入母屋造について記さう。

八幡造と云ふのは、本殿の内陣と外陣との棟を別々に取つて、其の棟は横に並行してゐるが、其の間の谷に樋を架ける。内陣の屋根は切妻造、外陣の屋根は流れ造である。宇佐の八幡宮、男山の八幡宮は此の形式で今日現存してゐる。鎌倉の鶴岡八幡宮は、今のものは全く違つてゐるが、創立當時は矢張り八幡造であつたと想はれる。

宇佐八幡宮は豊前の宇佐町にあつて、本殿が三字ある。一の御殿といふのは八幡大神を祭つて、聖武天皇の神龜二年二月二十七日の創建、此の御殿と云ふのは比賣大神を祀つて天平元年の創建、三の御殿は大帯姫命を祀つて弘仁十一年の創建、それから陽成天皇の元慶三年、三十三年に一度造替といふことになつた。現在の建物は安政から文久へかけて出來たもので、本殿の内陣は切妻造、外陣は流れ造である。此の様式が弘仁時代に成るもの

で流れ造の發生以後にあることは當然であらう。

男山の八幡宮は、山城に在つて、其の由緒は清和天皇貞觀元年七月十五日宇佐八幡大神の神社により勅を下し、今の地に六字の寶殿三字區殿を造營せしめられ、同二年四月三日に鎮座ありと云ふので、即ち所謂弘仁時代の中期以後に創建せられたので、宇佐八幡を移したといふだけに、其の建築法もよく宇佐に似てゐる。有名な黄金の槌といふのは内陣と外陣との間の谷に架けてある。創立の際には此の八幡も宇佐の如くに三字に分れて建てられたのであるが、何時の間にか三字を一棟に續けてしまつたものらしく考へられる。本殿の前には幣殿、舞殿、樓門があり、周圍に廻廊があり、廻廊の兩方に東西四脚門があり、東の四脚門の北に神庫がある。かういふ風に全體の規模が非常に伽藍に似てゐる。此の伽藍的の規模は後世おひ／＼に完成したのであるが、其の時期に就いては、百練抄に、

保延六年正月二十三日石清水八幡宮寶殿並廻廊、寶藏、若宮悉災焼亡云々。

とあるから、此の時の規模はほど想像される。又同書に、

正治三年二月二日寅時石清水山上釋迦堂、西三條堂、大塔、小塔、報恩寺鐘樓等焼失。

とある。此の堂塔の事はまだよく調べてゐないが、八幡の大塔、又琴塔と云つて近世まで甚だ有名であつたのは、正治に焼けた大塔の後身かも知れない。

鎌倉の鶴岡八幡宮は、康平六年八月源頼義が奏請して石清水八幡宮を勸請したもので、創建の時には矢張り石清水八幡と同様の形式であつたらしく想像される。今日の社殿は文政十一年の再建にかゝるさうであるが、やはり樓門が中門の位置に建ち、周りに廻廊をめぐらし、廻廊東西に掖閣がある。唯本殿、拜殿の形式が今日のものは權現造になつてしまつた。此の神社の建築沿革を調べて見ると、創立以來左の年代に於いて再建されてゐる。

創	立	康平六	年八月	此の間十九年
改	築	永保二	年	此の間百九十九年
	第一回再建	弘安四	年	此の間十六年
	第二回再建	永仁五	年	此の間十九年
	第三回再建	正和五	年	此の間二百十八年
	第四回再建	天文三	年	此の間九十年

第五回改築 寛永元年 此の間二百〇四年  
第六回再建 文政十一年

此の外修繕したことは澤山あるが、第一回の改築の時、既に今日の規模を大成したものである。吾妻鏡にも、

壽永三年正月一日 藤判官代邦通爲奉幣御使、著廻廊

とある。今日の權現造となつたのは第五回寛永の改築でなければならぬ。何故ならば權現造は足利時代以後のものであつて、且つ記録にも特に改築としてある。要するに由井ヶ濱に創建された時は極く簡單なものであつたのを、永保二年現地に移し規模を擴張したもので、本殿は所謂八幡造即ち宇佐や男山と同じであつたらしく思へる。

以上八幡造の例として宇佐、男山、鶴岡の三社をあげて、本社形式を比較したが、今度は其の規模の有様を比較して見よう。何れも廻廊以内だけの話で、外の部分は略すが、此の三社を比較すると左の共通點を發見する。

一、正面中央に樓門あり。

一、其の左右より廻廊起り本殿を圍む。

一、東西廻廊に掖門を開く。

一、本殿は所謂八幡造の形式を有す。

一、本殿と樓門との間に幣殿の意味の建築物あり。

其の五日 吉 造

日吉造は一種特異の點があるから時に説明を要する。日吉神社は近江の滋賀郡坂本村にあつて、俗に山王と云ひ、大山咋神を祀つてある。創建年代は何時であるか確かなことは判らないが、社傳によれば、天智天皇七年の鎮座といふことである。何れ傳教が叡山を開いて、此の社を鎮守としてから神社らしい規模になつたものと見える。日吉即ち日枝、即ち比叡である。本宮の現今の規模は、前に樓門があり、周圍は、廻廊ではなくて玉垣であり、其の中に本殿と拜殿とがある。本殿は天正十四年四月十八日の再造で、其の形式は聖



帝造と唱へられてゐるさうである。概略の形状は所謂五間三面、周圍に椽をめぐらし、正面に一間の向拜があつて、屋根は入母屋である。此の形式の主な特異の點は、後の軒が一線に通つてゐないので、其の左右の端が葺き下しになつて「すがに破風」を附けてある。又側面第一の間の所に扉があつて、其の前の所の高欄が斷れてゐる。椽の下の手法にも一寸變つてゐるところがある。此の社の攝社大神宮の本殿、同樹下神社の本殿もこれと全く同様の形式である。要するに日吉造は、後から見れば春日造二つを背中合せにした形であり、前から見れば入母屋造であり、横から見れば春日造の正面の一方がのびて流れ造になつた形であり、洵に珍奇な形であるが、これは、三間二面の内陣の前と左右に外陣を廻らし、之に合理的に屋根を架けた手法である。私は此の外にまだこれと同様の形式を見たことがないので、日吉だけの實例で直に別種の形式として取扱ふのは或は少しく不當かも知れないが、兎に角別に一種と見做して置かう。

此の様式が何時發生したのであるかといふことは、明瞭ではないが、日吉山王新記に、或記云、慈覺大師御代、吉家賢秀、造五間之神殿四面廻廊並樓門、云々

とあり、又天台南山無動寺建立和尚傳に、

同仁和三年丁未、於大宮御社前造立率都婆一基、云々

などあるところから考へると、弘仁時代に於いて規模が大成したものと思へる。そこで日吉造の様式も此の時代に出来たものと考へられる。即ち入母屋で向拜を有する神殿は、弘仁時代に於いて出来たので、弘仁以前は春日造にせよ、流れ造にせよ、又は八幡造でも、尾根は皆切妻であつて入母屋のものは一つもなかつたやうに思はれるのである。日吉神社は叡山と密接の関係があるし、古來面白い沿革もあるやうである。又古圖にも面白いものが残つてゐるが、往古の規模の一端を考へるに、日吉山王新記に、

日吉山王記云、檜皮葺五間、向、南、拜殿三間、四面廻廊、正面有二階樓門門樓一本、作三樓門

東西有二脇門、廻廊西方名各字一本侍所有之、西方塔有、西南角法華轉讀讀下一本不斷經

所在之、云々。

又玉海には左の記事がある。

治承三年二月二日庚寅、未刻頭權大夫光能朝臣、送書於行願之許云、日吉社解狀三通

進覽之、可令計申者解狀云、今一度狀無殊事、仍子注載文

日吉社司等解申請天裁事

請特蒙天裁被改造大宮神殿已下舍屋等、狀、檜皮葺三間三面神殿一宇、同一間四面拜殿一宇、同一階樓門一宇、同中門二宇、同廻廊六十一間、同十間三面彼岸所一宇、同十間二面雜舍一宇、同三間三面聖眞子殿一宇、同一間面竈殿一宇、云々。  
こゝに云ふ大宮とは即ち三輪明神を祀る所で、今日の攝社大神々社である。これ等の記事で大體の有様を知ることが出来よう。

#### 其の六 入母屋造

入母屋造といふのは屋根が入母屋造になつてゐる社殿をいふので、日吉造は半分入母屋造であるが、これが完全な入母屋に進化したのは恐らくは弘仁時代又は藤原時代の初めてであらうと想はれる。京都の八坂神社は天慶の建築と記録され、其の様式は全く紫宸殿の型

に由つたものである。

入母屋の社殿は恐らく此の頃に起つたものと考へられるのである。但し現在の建築は承應三年十月の再建である。

此の社殿は中心に身舎を置き、其の周圍に廂即ち鞘の間を繞らしたもので、當然入母屋造となるべき性質のものであるが、後世プランの如何に拘らず、屋根を入母屋にする風が行はれることになり、鎌倉時代に此の類例が多く現れ今日に至つてゐる。近江の郷上神社は鎌倉時代の好例である。

#### 第五章 神佛混淆の時代

前述の通り、神社の社殿は元來素木造で屋根は切妻に限られたのであるが、漸く變化して屋根は入母屋となつたものが現れ、廻廊や樓門なども盛んに用ひられる様になり、これに従つて丹塗で塗り、繪様を加へ、一見佛寺の如く、又は當時の大内裡の宮殿の如くなつ

たのである。

その大成した時期は明確ではないが、恐らく藤原時代の中期以後ではないかと思はれる。

そも／＼神社建築の特徴としては古來次のやうな條項が算へられたのである。

第一、屋根の形が切妻であること。

これは大社造、大鳥造、住吉造、神明造、春日造、流れ造等で證明されるやうに、元來日本の建築の屋根は切妻を以て起つてゐる。

第二、屋根を瓦にて葺かないこと。

日本の本來の社殿は茅茨を以て葺き、漸次檜皮又は板で葺くやうになり、今では銅板で葺くに至つた。瓦は佛寺建築と共に三韓から傳來したもので佛寺に特有のものであつた。

第三、下地壁を用ひないこと。

日本の本來の建築の外壁は皆板壁であつて、土壁は用ひない。元來、日本では木材一

式、尙廣義に云へば植物性材料一式の建築が發達したので、土、瓦、石等の礦物性材料を用ひることは三韓、支那から傳來したのである。それ故社殿建築は日本固有の手法を守る精神から、極力礦物材料を忌避し、壁なども皆板羽目を用ひる。

第四、裝飾の質素なこと。

元來日本固有の社殿には斗供もなく、其の他の繪様や彫刻物等の裝飾もなく、色彩もない極めて質素なもので、唯清淨でありさへすればそれでよいとしたのである。後世裝飾の複雑になつたのは皆大陸建築の影響である。

日本の神社建築の要素は概略此の様なものであつたが、次第に大陸的手法が混入し、支那趣味の社殿が現れ、神佛混淆の氣運に伴つて境内に佛堂や塔などを入れることになつたので、神社の體裁が一變したのである。

### 其の一 規模の伽藍化

神社の規模、社殿の建築の變化の具體的現象を見ると、第一に顯著なのは、樓門、廻廊が備はつて來たことである。春日神社に關しては、

〔玉海〕

治承二年二月十六日辛巳（中略）春日社修造之間、四面可建廻廊之由、大衆上奏、云々。

〔百練抄〕

治承二年五月卅日、春日社今度修造之時改瑞垣可造廻廊之由、衆徒進奏狀、云云。

〔大日本史〕

是歲治承二年春日社（中略）蓋廻廊佛寺所設非社殿正式、然當時諸大社、往々有設廻廊樓門、者古制漸變矣。

と云ふやうな有様で、治承二年に春日神社の面目が一新したことが明らかである。又、賀茂神社は、

〔鳩嶺雜日記〕

元永二年十一月一日戌時、鴨御祖社寶殿並中門廻廊雜舍等焼亡、云々。

〔百練抄〕

仁平三年七月二十五日、奉幣加茂社、依左大臣狼籍、可被改造中門東西廻廊之由、被申之、云々。

然るに延暦五年の時の賀茂修繕の官符には玉垣のことはあるが、廻廊のことが見えない。無論此の時には中門廻廊がなかつたのである。

藤原氏時代には、純正の神社の規模を備へたところは殆どないと云つていゝ位で、其の神社が大規模であつて、國民の崇敬が深ければ深いだけ、新式の分子が多かつたやうに思はれる。即ち國民の崇敬の念は最早精神的でなくして形式的であつたのみならず、神道は著しく佛教と融合したかの如くに想はれる。次に二、三の例を擧げて、神社の體裁の著しく變化した有様を研究して見よう。

山城大原野神社に就いては、

〔壬生家文書〕

元久二年八月廿七日、(中略) 兼々二尺寸五裳見木顛倒、打<sub>三</sub>破中門廊等<sub>二</sub>者云々。  
同北野神社に就いては、

〔三長記〕

建永元年六月二十九日巳卯、(中略) 可<sub>レ</sub>修造顛倒廻廊事。

同祇園社に於いては、

〔百練抄〕

承久二年四月十三日壬申、丑刻祇園社焼亡、御殿並東南廊、南大門、藥師堂已下皆爲<sub>二</sub>灰燼<sub>一</sub>云々。

此の様な例は實に無數にあるので、又玉垣を改めて廻廊とした例には熊野神社に左の傳記がある。

(前略) 本者、白河院御時、寛治四年比十二ヶ所權現四面廊者平垣也、本殿五間四面也、證誠殿前七間七面廊經所也、證誠殿後四面廊者七間也、御聖體安置三間、緣起奉納

間也、三味僧宿所二間、命子後殿二間、已上七間也、西小門脇經所五間、東門脇五間、南間二間、北間三間也、三方閉垣、一萬十萬、前閉垣也、失火之後檢校修理別當快實造功

増<sub>三</sub>御寶殿、増<sub>三</sub>禮殿、増<sub>三</sub>長床、増<sub>三</sub>四間廊、

於<sub>レ</sub>自<sub>二</sub>寛治四年正月十六日<sub>一</sub>至<sub>二</sub>于天正三年三十九年六間<sub>一</sub>造<sub>レ</sub>之。

又廻廊を新たに造營したことの例には有名な安藝嚴島神社がある。これは平清盛が建てたものである。

〔源平盛衰記〕

(前略) 依<sub>レ</sub>之清盛社殿を造替し、古にし鳥居を立改、廻廊百二十門造り登き、云々(中略) 吾爲<sub>二</sub>百王守護<sub>一</sub>離<sub>二</sub>本所<sub>一</sub>近<sub>二</sub>玉城<sub>一</sub>、御寶殿並廻廊百八十間造立して、我を嚴島大明神と崇むべしと宣へば、云々。

中門、廻廊新設の一例としては太宰府神社があげられる。

〔安樂寺草創日記〕

御殿者、延喜五年乙丑八月十九日、安行承建立、其後永觀二年甲申、大御御輔正菅原、中門廊一字、廻廊四十六間造營畢。

〔太宰府天滿宮故美〕

圓融院永觀二年此御社の中門一字と廻廊とを始作らる。又、同時常行堂寶塔院を建らる。

斯くの如き伽藍的規模であつても、本殿、——少くとも本殿は流石に切妻造が多くあつて、屋根も殆ど常に檜皮又は柿葺であつたらしく、瓦葺は極めて稀であつたやうである。佛堂の檜皮葺が珍しいよりは社殿の瓦葺の方が珍しい様に思はれる。此の例は阿蘇神社に於て見ることが出来る。

〔太宰管内志〕

緣起に、往古者社地廣大也、四方有鳥居樓門、廻廊長百二十間、或八十間也、神殿者檜皮葺也、其餘之殿舎廻廊皆瓦葺也、於三十三年國中一統取棟別、造阿蘇神宮、云々。

要するに平安朝以降、神道は次第に佛教と融合し、佛教の勢力が旺盛であつたために、終には神社の規模が、まるで、伽藍と區別の出来ないやうになつてしまつた。其の名稱さへ、宇佐八幡は曾つて宇佐八幡大菩薩神社と唱へられ、常陸の大洗と酒列さかづりは「大洗磯崎藥師菩薩神社」「酒列磯崎藥師菩薩神社」と云ふ不思議な名前を附けられた。此の様な例は澤山にあるので、これ等を見ても、神社建築の形式、手法、さては其の細部に至るまで、如何に佛寺に似ねばならなかつたか、想像されるであらう。

斯くの如き神社に於いては、其の本殿も佛堂に類似するに至つたのは又必然のこと、第一に屋根に千木、勝男木がなく、入母屋造で、向拜は普通本宇の正面の間數より少く、例へば五間社殿に三間又は一間の向拜をつけると云ふやうな工合であつた。又切妻であつても、流れ造でない場合には大いに佛堂的の外觀を與へる。プランにしても若干佛寺的ではあつたが、細部に於いては微妙に社寺の區別が顯はされてゐる。

## 其の二 各種の變態實例

以上述べた新規模の神社の形式の種類は、實に複雑で、容易にこれを秩序的に分類することは出来ない。若し詳しくこれを説き出したならば到底收拾することが出来ないから、此處には世に重要視されてゐる二、三の變態的形式の例をあげるに止める。

安藝の嚴島神社の建築は、頗る不思議なもので、創建は推古天皇の端正元年といふことであるが、創建當時の建築の様式はもとより分る筈はなく、其の後の沿革も詳でないが、今日の規模に改造したのは平清盛であることは事實である。尤も此の時の規模が、今日のものと全然同じであるか否かは尙不明であるが、一遍上人繪卷によれば、海の中に四角な廻廊が建てられ、其の前に中門があり、後に本殿等があり、中門と本殿とは鋪石の代りに棧橋を以て連結し、中央には舞臺があつたらしく描かれてゐる。併し高倉上皇御幸記によれば、其の殿廊の組織は實によく現在の物に符合してゐる。兎に角現在の建築は元龜以降

の改築のものであるらしいが、客人神社の一區だけは立派な鎌倉式の手法であるところを見ると、此の神社は各時代に色々の變遷があつたことが分る。海を敷地とした所が此の神社の特色であるが、これは恐らく支那によく見る湖心亭から暗示を得たものと思はれる。湖心亭は湖の中に亭子を建て、曲折した橋に由つて陸に通ずるものである。本殿は九間四面切妻造で、屋根の上に千木、勝男木があるが、これは維新以後に附け加へたので、本来は瓦棟で、千木、勝男木はないのである。本殿の前に幣殿、拜殿、祓殿と建てられてあるが、何れも非常に異様な細部を有する。

備中の吉備津彦神社の建築は明德元年であるが、其のプランは頗る異様で、内陣が中心に位し、屋根は比翼入母屋造と云つて、内陣の上と外陣の上とに并行に横棟を取り、これを縦の棟で連結したもので、即ち棟が工字形をなしてゐる。此の外、細部の手法にも興味ある新工夫があるので、我々はこれを「吉備津造」と名づけて重要視してゐる。

筑前國糟屋郡の香椎宮の本殿も非常に風變りなもので、其の創建は聖武天皇の神龜元年と云ふのであつて、現在の建築は享和元年のものだと云ふから、江戸時代後期に屬するが、

頗る變つた様式で、特にこれを「香椎造」と呼んでゐる人もある。

最後に最も奇異な變態的神社は駿河大宮の淺間神社である。これは重層の社殿で、上層が本殿で流れ造の形式であり、創立は大同年間といふが、今の建築は徳川家康の造營と云はれてゐて、實に唯一の重層社殿の例で、時に「淺間造」と呼んで珍重してゐる人もある。

## 第六章 本殿拜殿連結の時代

### 其の一 權現造

權現造の形式は如何なるものかと云ふと、私はこれを、本殿と拜殿とを中殿を以て連結し、一塊の建築物としたものと解釋する。中殿といふのは、何時でも同一の稱呼を有するわけではなく、或時は石の間、或時は間まの間、或時は中殿等と唱へられてゐる。然し要するにいつでも本殿と拜殿とを連結するもので、縦に棟を取つた前後に長い（多くは）廊の

様な性質のもので、棟の高さも多くは本殿、拜殿よりは低く、軒も多くの場合では本殿よりも低く、拜殿と同じに廻つてゐるものもあれば、拜殿よりは更に低いものもある。此の本殿、中殿、拜殿の三つを取り合せて一つに纏めた建築の形式を我々は「權現造」と名づけてゐるので、「神道名目類聚抄」には左右が切妻で前に向拜が附いてゐる形を畫いてこれを權現造又堂社造と名付けてゐるが、此の形式は建築學上の所謂「權現造」ではない。

權現造が何時頃から始まつたかといふことは能く判らないが、私は豊臣秀吉の豊國廟が其の嚆矢であると信じて居り、豊國廟は恐らくは寺院の開山堂から暗示を得たものと考へてゐる。京都の北野神社の今の建築は、慶長十二年の建築で、俗に「八棟造」といふが、八棟造は權現造の複雑になつたものである。即ち慶長四年に權現造が現はれ、八年の後は八棟造にまで進んだことになるかと假定される。そしてこれが我が邦神社建築の最後の造り方であるし、現に今日でも、まだこれ以外の造り方が現出しないのである。

權現造にも色々形の異なるものがあり、就中中殿の構造形式は大いに權現造の大體に關係を持つてゐる。此の床が若しも拜殿、本殿より一段低くなつてゐて殆ど土間のやうな性質



であれば、それは「石の間造」と名づけられ、又中殿と拜殿と同じ高さであれば、便宜上「中殿造」と名づける。故に権現造は、プランによつて區別すれば、

(甲) 石の間造

(乙) 中殿造

又其の外形によつて區別すれば、

(甲) 拜殿に於いては

(イ) 切妻造、向拜

(ロ) 入母屋造、向拜

(ハ) 入母屋造、千鳥破風、向拜唐破風

(乙) 本殿に於いては

(イ) 流れ造

(ロ) 入母屋造

(ハ) 重層入母屋造

等であつて、更にこれを順列錯列すれば、尙幾多の種類が出来得る理窟である。

(甲) 石の間造

「石の間造」の著しい例は、駿河の久能山、下野の日光山、東京上野の各東照宮などである。何れも有名な建築であるからこゝには委しい説明は省く。

東京上野東照宮本殿は三間三面の入母屋造、妙なところに千木と勝男木があるが、これは實に申し譚的の千木、勝男木とでも云はうか、石の間は三間、拜殿は七間三面で、三間の向拜がある。屋根は最も普通のやり方で、拜殿が入母屋、前面千鳥破風に軒唐破風が附いてゐる。注意すべき點は、本殿と石の間と軒を同じ高さにして引き通したることである。

尙仙臺市大崎八幡宮は慶長十四年に伊達政宗が造つた名建築である。

石の間造だけに限らないが、凡て権現造の神社の規模は、大抵本社周囲には通例透塀を繞らし、正面に唐門を置くのである。

(乙) 中殿造

「中殿造」は石の間造に比べて餘程數多くある。

官幣大社香取神宮は此の通例の一つで、本殿は流れ造で屋根に千木、勝男木が載せてある。拜殿も比較的簡單で正面に千鳥破風もなく、向拜に唐破風もない。

東京でも此の例は澤山あつて、麴町區永田町の日枝神社、神田の神田神社、根津の權現社、湯島の天神社等皆この類である。中でも根津權現社は本殿は三間三面の入母屋造、中殿は桁行四間、拜殿は七間三面、三間向拜、入母屋造、前面千鳥破風、向拜唐破風で最も完備した形である。これを上野東照宮の造り方と比べて見れば、其の異同の點が明白に分るであらう。神田神社もほと同一の手法であるが、拜殿が五間三面で一間の向拜がある。

要するに中殿造と石の間造とは、全く同一種のものであるが、理窟の上から云ふと、石の間造が中殿造よりも先になるのである。何故かと云へば、元來本殿と拜殿とは離れて建てられたものであるから其の間に土間がなくてはならない。其の土間に便利の爲めに屋根を蔽つた形が即ち石の間造であらう。其の後更に便利のために、拜殿から一度土間へ降りて本殿へ上るといふ面倒なことを止めて、土間の上に床を拵へ、拜殿と同じ高さ上げた

形が中殿造である。故に歴史的觀點から、石の間造を中殿造より先に置いたのである。又本殿、拜殿の形に關しては、これも歴史的の觀察から、簡より繁に入ると云ふ筆法で、本殿は流れ造を最も先に置き、入母屋造を其の次に置き、重層のものを其の後とした。拜殿に於いては、切妻を先とし、入母屋を中とし、入母屋に正面千鳥破風をかけ、軒唐破風をつけたものを後とした。

### 其の二八 棟 造

八棟造は、權現造の拜殿に千鳥破風と唐破風を有するもの、左右に翼を出した形であつて、棟の數は七つになる。即ち本殿に横に一棟、中殿に縦に一棟、拜殿に横に大棟、前に千鳥破風の棟、其の前に軒唐破風の棟、左右の翼に各一棟である。八棟造とは、八の字を以て數の多いことを形容したのであらう。

此の適例は京都の北野神社である。慶長十二年片桐市正が奉行で豊臣秀頼が造營したも

のと云ふことである。拜殿の左右に翼が出てゐて、こゝが奏樂の間になつてゐる。要するに八棟造は我が國神社建築の中で最も複雑であり、同時に最も意匠に富んでゐるやうでもある。

東京龜戸の天満宮がやはり八棟造である。これは北野のやうに豪華艷麗のものではないが、大體の意匠は非常によく似てゐる。此の神社は本殿の後の方に別に千鳥破風が附いてゐるから丁度棟の数が名稱通り八つになる。向拜の上は普通唐破風であるが、これは千鳥破風になつてゐる。本殿の屋根は流れ造になつてゐる。先づこれ等が最も棟の複雑なもののやうである。

日向の官幣大社鶴戸神社も八棟造であるがこれは少し異様な例である。

八棟造の社殿は私は餘り多くの例を見ないのであるが、京都の北野神社を以て其の標準として差支へないと思ふ。

八棟造は權現造の少し變化したものであるから、權現造に石の間造と中殿造とを區別した様に、石の間造の八棟造と、中殿造の八棟造とを區別することが出来る。北野神社は石

の間造に屬し、龜戸天満宮は中殿造の方に屬する。

さて、日本の神社建築の形式の發達は以上述べた通りで、大體に於いて、粗より密に入り、簡より繁に入り、野より文に入るといふ工合で、大社造の如き原始的性質のものが終に八棟造の如き複雑なものへと發達した。然しながら、これが發達すればする程純正の神社の形式とは遠ざかつて來てゐるのである。其の遠ざかつて來たのが即ち形態上の發達であるが、精神上の衰頹とも見られると思ふのである。

## 第七章 現今及び將來の神社

### 其の一 現今の神社建築

維新以降神佛分離が勵行されて、神社に於ける別當寺は廢せられ、境内の佛寺的建築が取り毀されたが、神社の大體の形式には依然として佛教的趣味の残つてゐるものが可成り

多い。其の後、官、國幣社、大、中、小の社格に應ずる建築の規定が作られ、これに依ると、本殿は大社が三間三面、中社が三間二面、小社が一間四方、何れも流れ造で千木、勝男木はない。拜殿は大社が三間二面、中社が三間三面、小社が三間二面、何れも入母屋造である。尤もこれは既往に溯らず、今後新たに作るものに適用しようとしたので、畢竟社殿の徒らに厩大浮華に流れざる様にとの注意である。然しながら此の規定は何に準據したものであるか、將來の神社が何故に流れ造でなければならぬのかは解し兼ねるので、又現に此の規定通りに出來た新しい官、國幣社もないやうに思はれる。云ふまでもなく神社建築の配置は其の土地の高低、廣狹、周圍の状態、方位等種々の原因に拘束されるので、とても一定の型に嵌めることの出來ないのは、始めから明瞭であるから、我が國神社の祭祀の方法が統一された結果、神社建築の形式も又統一せねばならぬと云ふ考へも必要には相違ないが、又他の一方から、少くとも建築家の側から見れば、此の規定に由つて、千年来變化極まりなく大いに建築界を指導して來たところの神社建築を束縛して、將來に向つて一步も進むことが出來ないやうにしてしまつたならば、甚だ遺憾だと思ふのである。

今假に一大神社を興さうとするならば、果して何れの形式を選ぶであらうか。權現造には飽き果てたと云ひ、神明造や大社造は餘りに簡素無味だとし、流れ造は平凡、伽藍式は如何にも寺院臭いとかぞへて見たあげく、古を模倣するのは面白くない、かと云つて新機軸を出して破天荒の様式を造るほどの勇氣もなく人も許さず、已むを得ず現在の神社を模範として、少しこれを改竄するに過ぎないのが現状である。併しながらこれは神社に對する吾人の認識に缺陷があるので、若し深く神社の本質を考察するならば、翻然として悟るところがあると思ふ。

次に參考までに官幣大社三十九社に就いて其の本殿の形式を掲げる。

所在地名	神社名稱	正殿の形式	祭神
國郡市町村			
山城、京都	賀茂別雷神社	三間二面流れ造	別雷神
京都	賀茂御祖神社	三間二面流れ造	玉依姫他一柱
綴喜、八幡町	石清水八幡宮	十一間六面八幡造	品陀別命外二柱
京都	市松尾神社	三間四面流れ造	大山咋命外二柱

越前、敦賀市氣比神宮 三間四面切妻向拜 伊沙奢別命外六柱  
 大隅、始良、隼人町鹿兒島神宮 三間二面流れ造 穗々手見命  
 伊豆、三島市三島神社 三間二面流れ造 事代主神  
 尾張、名古屋屋市熱田神宮 三間二面神明造 草薙神劍  
 駿河、富士宮市淺間神社 重層、上層三間二面流れ造、下層五間四面流れ造、入母屋一間  
 近江、滋賀、坂本村日吉神社 五間三面向母屋一間  
 紀伊、和歌山市日懸前神宮 五間三面向母屋一間  
 出雲、簸川、大社町出雲大社 二間二面大社造 大國主命  
 豐前、宇佐、宇佐町宇佐神宮 三間四面一間向拜八幡造 譽田別尊外二柱  
 大隅、始良、霧島村霧島神宮 五間三面向母屋一間向拜 瓊々杵尊  
 淡路、津名、多賀村伊弉諾神社 伊弉那岐命  
 筑前、糟屋、香椎村香椎宮 前面五間、後面三間側面三間 仲哀天皇  
 日向、宮崎市宮崎神宮 三間二面流れ造 神武天皇

南那珂、鵜戸村鵜戸神宮 八棟 造 鵜草葺不合命  
 山城、京都市平野神社 相棟春日造 今木神外二柱  
 山城、〃 稻荷神社 三間三面流れ造 倉稻魂命外二柱  
 大和、磯城、三輪町大神神社 (正殿なし) 倭大物主櫛隠玉命  
 〃 山邊、朝和村大和神社 一間一面春日造 倭大國魂神外二柱  
 〃 丹波市町石上神宮 (本殿なし) 布都御魂劍  
 〃 奈良市春日神社 一間一面春日造 建御賀豆智命外三柱  
 〃 北葛城、河合村廣瀬神社 一間二面春日造 若宇迦賣命  
 〃 生駒、三郷村龍田神社 一間一面春日造 天御柱命國御柱命  
 〃 吉野、川上村丹生川上神社 一間一面流れ造 高禰神闇禰神  
 河内、中河内、枚岡町枚岡神社 一間一面春日造 天兒屋根命外三柱  
 和泉、堺市大鳥神社 一間二面大鳥造 大鳥連祖神  
 攝津、大阪市住吉神社 一間四面住吉造 表筒男命外三柱

大阪	市生國魂神社	三間	五面	生島神足島神
西宮	市廣田神社	一間	二面春日造	撞賢木殿之御魂 天疎向津媛命
武藏、大宮	市氷川神社	三間	三面流れ造	須佐之男命外二柱
安房	安房、神戸村安房神社	三間	二面神明造	天太玉命
下總	香取、香取町香取神宮	三間	四面流れ造	伊波比主命
常陸	鹿島、鹿島町鹿島神宮	三間	三面流れ造 <small>(權現造)</small>	武甕槌命
大和	高市、畝傍町橿原神宮	京都御所賢所	移建	神武天皇外一柱
山城、京都	市平安神宮	三間	二面流れ造	桓武天皇孝明天皇

其の二 將來の神社建築

我が日本の國體は永久に持續され、我が國運はますます隆盛に赴く限りは、我が神社建築も亦これに伴つて永久に持續され、ますます隆盛に赴かねばならない。従つて一方に於

いては新たに神社が出来ると同時に、他の一方に於いては古社の改築とか大修繕とか、又は一旦廢滅したものを、再興するといふやうな仕事が出来て來ると思ふ。此の場合に於いて、神社建築の一定の方針を確立し、神社建築の體面を維持することは、必要なことと思ふ。神社はどこまでも神社としての法則に依らねばならないのであるが、此の法則と云ふことが極めて漠然としたことで、容易に説明し難いのである。そこで我々は所謂神社の法則とは如何なる事であるかと云ふことを慎重熟慮しなければならぬので、此の方針に従ふ以上は、其の細部の手法まで厳しく制限する必要はなからうと思ふ。

私の差當りの愚見は、凡そ神社建築の原則として、其の形式は其の祭神の時代の建築、即ち「神を祀る神在すが如し」の格言により、祭神の住まれた宮室のまゝを適用することが最も適當であると思ふ。尤もこれ迄歴史形式の已に定まつてゐるもの、例へば春日神社と春日造の關係のやうなものは別問題であるが、若し新たに神代若しくは上古の人を祭神とする神社を造るならば大社造か神明造、やゝ下つて流れ造などで適當と思ふ。中古以下の人を祭る神社ならば入母屋造でも權現造でもよいであらう。これに反して太古の人に

権現造を配し、近頃の人に大社造を配するといったことがあれば、これは非常にをかきなことになる。然らば、明治時代の人を祭神とした神社は石造でも、煉瓦造でも乃至は普通住宅のやうなものでも構はないかと云ふと、それはさう簡単に行かない。何となれば神社は靈の建築であつて肉の建築ではなく、信仰の建築であつて理窟の建築ではないからで、現代の人でも一旦死ねば其の靈は清淨無垢の靈界に歸つて、そこに其の祖先と共に永久に生きる。かういふ信念を以て神社を造らねばならぬと思ふ。即ち吾人は近代人の神社に於いても、吾人が靈の建築として信じる所の古式に由るべきであらう。要するに神社建築に漫りに新意匠を弄ぶことは、建築家の不謹慎な遊戯である。私は神社建築に就いては全然他の建築とは考へ方を異にし、飽くまで古式を尊重せねばならぬと思ふのであるが、只、構造や、細部に若干の改竄が許さるべきものと考へるのである。畢竟、神社建築の法則とは、極力古式を尊重し、妄りに一知半解の理窟を以てこれを律してはならぬと思ふのである。

## 伊勢大神宮

伊勢大神宮の建築即ち匠家の所謂「唯一神明造」と稱する建築の型は、當然古代に於ける皇居の建築と同じものでなければならぬ。何となれば、太古に於いて我が國には特に神社建築と稱すべきものもなく、宮室即ち神社、神社即ち宮室であつたからである。

出雲大社は即ち大國主命の宮室であつた如く、伊勢大神宮は古代の天皇の宮室を其のまゝ、天照大神及び豊受大神の宮居として造られたのでなければならぬ。即ち皇大神宮の建築は元來其の伊勢に鎮座された垂仁天皇時代の宮室の型に因り、豊受大神宮の方は雄略天皇の時鎮座に相成つたが、皇大神宮と殆ど全く同式に據られたのであると想はれる。

然るに、天武天皇の御宇に至つて二十年式年御造替の制が定められ、持統天皇の御時第

一回の御造替が行はれ、爾來時に式年の二十年の長さに多少の異動もあり、時に國事多難の爲めに數回御造替が行はれなかつた事もあるが、大體に於いて連綿として今日に及んで來たのは、實に世界無比の典範で我が國の光榮これより大なるはない。而も其の御造替に當り忠實に古式に従ふ事が勵行され來つたので、たとひ微細なる部分に於いて若干古式の變更されたものがあるにしても、勿論儼然として古式が保たれてゐると見て宜しいのである。然らば今日の大神宮の建築は、少くとも天武、持統の朝に於ける官室のおもかげを傳ふるものと見て毫も誤りはないとせねばならぬ。但し今はこゝに大神宮の建築について詳細にこれを論議する事は、謹しんで遠慮したいと思ふ。

併し我が國には所謂「神明造」の様式になる社殿が澤山ある。私は之によつてほど大神宮の建築の有様を想知する事ができるのである。これは簡潔純朴の建築であるが、或一派の人の考ふるが如き原始的なる幼稚なものではなくして、十分洗煉された美しい建築である。それは純眞なる日本民族固有の精神を發揮した建築で、素木の檜を組み立て、萱で屋根を葺いただけで、無益な裝飾や彫鏤の巧を弄しない所に、森嚴犯すべからざる威容があ

り、世界の他の地方に會つて見ることの出来ない特殊の美しい建築である。

大神宮御造替の制が定められた原因は何であるか、これは私のみだりに忖度すべきものではないと思ふが、試みに建築家としての立場から私の所見を述べて見たいと思ふ。

私の考によると、御造替の周期間二十年は建築の保存期限であると思ふ。勿論社殿の建築が二十年にして腐朽するのではない。現に賀茂、春日の神社には三十年造替、出雲大社には六十年造替の制もあつて、堅牢周到なる社殿建築の壽命は、五十年や百年の短期でないことは自明である。それでは伊勢神宮の二十年造替といふ數字は、何處から割出されたか、私はこれは其の御屋根の保存期間であると想像する。

大神宮の建築材は凡て純良無比なる檜材であるから、二十年を経過しても些の朽損を見ない、むしろ新營當時の美しい色澤が漸く褪せて、却つて一段と落ち付いた重厚なる趣を生ずるのである。然るに森林の中に包まれた社殿の御屋根の萱は、雨露に曝される爲めに數年にして既に損じ、二十年を経過すれば著しく腐蝕し朽損するのである。しかも之を修繕する爲めに、職工をして御屋根に登らしむると云ふが如き事は到底許されない、即ち御



造替の制の定められた所以であらう。

均しく萱葺でも、農家の如きものであれば数十年乃至百年の壽命は確實である。これは家の内に人が住む爲めで、殊に火を用ひる爲めに室内の空氣が萱を通してこれを乾燥せしめ、爐に起る煙はよく萱の中に棲む蟲類を驅除して其の害を防ぐに由るが、大神官の場合には全く之に反するのである。若しも屋根が檜皮、こけら等であれば、保存期限は若干延長され、瓦銅であれば更に延長されるが、不幸にして藁や萱は此の點に於いて最も不利益である。總じて古代に於ける我が國民の性癖として何事にも清淨を好み、潔白を愛し、朽損したものは惜し氣なく之を棄て新調するの風があつたと思はれる。建築に於いても亦斯くの如く、一屋一代主義を原則とし、先代の住んだ家は之を棄て、次代の者は別に新屋を造つた様である。これ併し乍ら建築の唯一材料たる木材が極めて豊富であり、思ふまゝに無償で得られた爲めであると思ふ。

歴代の天皇の宮室も亦斯くの如く、御一代毎に轉々として其の宮室を移された。斯くの如き世態に在つて、伊勢の大神宮が若干の期間の後に造替され、常に清新純潔の威容を保

たれた事は素より當然の事ではなればならぬ。

御造替竣成に次いで正遷宮が行はれるが、これこそ我國に於ける最も森嚴莊重にして、最も神祕的な古式である。私は以前一度正遷宮の式に參列し其の他臨遷宮及び假遷宮の式に陪するの光榮を得て、其の式の模様の大體を拜見したので、一言これに付いての感想を述べて見よう。

式は夜色濃やかならんとする頃からはじまる。「神儀」は舊殿から出御になり、これに隣接して造替された新殿に遷御されるのである。準備すでに成つて諸員其の署につく。紅焰の庭燎時に聲ありて軽く沈黙を破り、白衣の仕丁時に來往して僅かに靜寂を和らぐ。轟々たる老杉、梢は暗黒の裡に没し、模糊たるを舍屋、影は老杉の間に消ゆ。萬象闕として森嚴の氣身に沁むを覺ゆるのである。聽て警蹕の聲と共に出御あり、前衛後従の長い行列が肅肅と進み來る。拜觀の恩典に感激する數萬の赤子は、涙に咽んで伏し拜む。參列の光榮に感泣する諸員は地にひれ伏して呼吸を呑む。少時にして入御あり、遷宮の大祭が茲に完了を告ぐる頃は夜も森々と更け渡るのである。

私は此の遷宮の式を拜観して感激いふところを知らざるものがある。申すまでもなく、これに陪する者は身太古に還つて長くも天照皇大神に咫尺し奉るるのである。予等は此の時に當つて、たゞ皇祖建國の偉業を想ひ、萬世一系の國體の尊さを知り、我が國文化の發達の歴史を考へて現時に及ぶとき感慨實に無量である。神代ながらの森林の中の御敷地、神代ながらの清淨なる社殿、神代ながらの森嚴なる大儀、身は此の神代ながらの景圍氣の裡に浸されて潤然として淨化されるを覺ゆるのである。

### 建築より見たる伊勢神宮

一

伊勢の皇大神宮及び豊受大神宮の建築は、匠家のいはゆる「唯一神明造」であり、兩宮以外には絶対に他に見ることのできぬものである。世に「神明造」の型に成る社殿は甚だ多いが、それはいづれも若干伊勢兩宮とは異なるものである。要するに伊勢神宮の建築は純眞なる古式であり、他の神明造なるものは多少改竄又は省略され、あるひは後世の手法が混和したものである。

唯一神明造は、我が國に三韓、支那の文化が傳來せぬ以前に於いて、純日本式の様式に由つて創案された建築であるが、其の性質は南洋系に屬するものである。今日に於いても南洋地方には此の種の建築が行はれてゐるが、しかし南洋建築は原始時代のまゝで多く進化するところなくして今日に及び、建築的に云へば甚だ幼稚なるものである。

然るに兩宮の建築は、其の性質こそ南洋的であり、其の原始時代には幼稚であつても、今日に傳へられた建築は既に洗煉をつくしたもので、まことにこれ太古に於ける我が國民の文化、其の心理、其の技術等を觀るべき貴重なる質料である。今日に傳ふる兩宮建築の様式は、少くとも二十年造替の制が定められた天武、持統の朝における宮室の型でなければ

ならぬ。何となれば我が國の純正なる神社は本來我が國の祖先の神々を奉祀するもので、神社の宮室は直ちに其の神社になつたので、宮室即ち神社、神社即ち宮室であるからである。即ち天武、持統以來其の形を變ふることなくして今日に傳へられた兩宮の建築は、少くとも兩宮當時の宮室と同型同式のものでなければならぬ。

兩帝以前の兩宮の建築は不明であるが、皇大神宮は垂仁天皇の御宇に、伊勢に鎮座に相成つた時の宮室と同型同式でなければならず、豊受大神宮は雄略天皇の御宇に鎮座に相成つたが、皇大神宮の型に由つて造營されたものと考へねばならぬ。

こゝに於いて當然起るべき問題は、垂仁天皇時代と天武天皇時代との宮室建築に若干の相違があつたか、或はなかつたかと云ふ事である。私は兩時代間に建築の根本的性質や様式、手法の基調に於いて相違はないが、只佛教渡來以後支那文化が非常な勢で浸入し來た爲めに、天武、持統の頃には兩宮の建築にも若干支那の素因が入つてゐるものと思ふ。それは今日に於いて指摘しうらと思ふのである。結局今日の兩宮建築から支那的素因を除いたものが垂仁天皇時代の建築であり、即ち、それが純日本式の建築であると思ふのであ

る。然して其の型は遠く神代から現存してゐたものと思ふべき理由が十分である。

然らば垂仁天皇時代の建築には毫も三韓、支那の影響はなかつたと云ふと、種々議論もあるのであるから、こゝにはしばらくこれにふれぬ事とするのである。

以上の推理を前提として伊勢兩宮の建築を視るのであるが、便宜上内宮即ち皇大神宮の建築について略述する事にする。

外宮即ち豊受大神宮は内宮の規模、様式に准じ、唯些細な點に若干の變更を加へたものである。

内宮の規模及び様式は、式年御造替に當つて往々微細なる變更はあつたが、素より大局に影響をおよぼすものでないから、こゝには便宜上現建築をもつて天武、持統當時の状態と見なすのである。御敷地は周知の如く五十鈴川の邊に、轟々たる老杉の森の中に南面して築かれ、縦に長い長方形であるが、四匝の垣をめぐらした其の内院の中に正殿が立ち、其の左右に東西寶殿が立つ。これをめぐつて第一の匝の瑞垣があり、其の南北に瑞垣門を開く、其の外に第二匝の内玉垣を周らし、南北に内玉垣門がある。其の外に第三の外玉垣門がめ

ぐらされ、南北に外玉垣門が設けられ、東西に脇門がある。其の外は第四匝の板垣で四方の入口に鳥居が立てられ、鳥居の外に藩塀とて目隠しの障壁がある。其の他、外玉垣南門の内に四丈殿があり、北の板垣鳥居の中に幣帛殿、御饌殿がある。別に離れて若干に付戸殿舎があるが、こゝには省略する。

## 二

斯くの如く左右殆ど均齊に建物を配置し幾匝の牆壁をめぐらし、幾重の門を経て正殿に達するの構圖はむしろ支那系に近似する型である。殊に藩塀は即ち外國傳來の塀の意味と解せられ、其の日本固有のものでない事が暗示せられる。而して其の全體の規模は後世の普通の神社とは全く其の調子を異にしてゐる。普通の神社の計畫に在つては公衆の参拜といふ事が考慮の中に加へられてゐるが、伊勢大神宮はこれと異り、唯だ皇國の祖先を奉祀する爲めに造られたものと想はれる。即ち一般の神社の上に超越して特に皇室の尊崇を

受けらるゝ所以である。

社殿の建築は唯一神明造であるが、其の説明は餘りに専門的になるから、こゝにこれを省略するが、其の重要な點は、第一に其の材料が良質の素木の檜材であり、屋根が葺で葺かれることである。構造については、其の柱は礎石なしに地中に掘立てられる。即ちいはゆる「底津幣根に宮柱太しき立て」である。妻には直線の千木が、向つて左の方が上前に、殆ど矩勾配に交叉され、末端は高く空中に突出する。いはゆる「高天原に千木高しりて」である。棟の上には十本の勝男木が並ぶ。殿の左右には遊離せる棟持柱が縁板を貫いて立ち、挺出せる棟木を支承する。此の柱は神明造に獨得なもので、太古の宮室に必須なものとして存在してゐたのである。千木の上部の交叉點に近い所に左右に四對の「おさこまひ」が笄の如くに突出するが、此の意義はまだ十分に解決されて居らぬ。

## 三

其の他微細な點について記述することはしばらく措き、大體を達觀した處で、此の社殿の建築は全然植物性の材料を以て造り(銚金貝及び釘の類を除外して)而も其の形は極めてよく整ひ、清淨無垢の姿、莊重森嚴の氣品、えもいはれぬ美しさがある。素より奇を弄し巧を衒ふが如き低級なる意匠を見ず、繊細煩縛の卑俗なる手法もなく、たゞ純眞簡明を以て徹底せる所に無限の尊さがある。人或はこれをもつて原始的なる幼稚の建築とするは大なる錯誤である。同建築の美は簡潔にして容儀の整ふにあるが、これ實に難事である。何となれば簡潔は動もすれば粗笨に陥るからである。而も大神宮の建築がひとり此の美を成せるは、蓋し古人の深甚なる敬虔の念と、純眞なる精神の力である。今の猥雜なる虚飾を以て俗眼を欺かんとする者は、大神宮の前に愧死せねばならぬ。

### 嚴島と其の建造物

何時の時代に誰の言ひ出したことか知らないが、安藝の宮島と丹後の天の橋立、陸前の松島を以て日本の三景と稱してゐる。日本狭しと雖も、所謂絶景の地はまだ外に澤山なければならぬのであるが、特に此の三箇所を三景として數へ上げたのはどう云ふ譯であらうか。少し餘談に涉るが私の考へる所では、日本の土地を中部・東部・西部と三つに分けて、其の各部に於いて、おの／＼風景絶佳な處を一つづつ擇ぶとすると、中部即ち近畿地方に於いては差當り丹後の天の橋立、東部に於いては松島、西部に於いては宮島となるのだらうと思ふが、此の三つの景色は各々特色があつて、それ／＼異つた美しい點を有してゐるし、又互に共通してゐる點もある。其の共通點といふのは海と山との取合せである。橋

立は若狹灣の一部であり、松島は仙臺灣の一部であり、官島は廣島灣に屬してゐる。さうしてこれに配するに天然の山を以てしてゐる。橋立には成相山があり、松島には富山其の他がある。さうして官島には彌山といふ美しい山がある。これは共通點と云へば云へようと思ふ。

さて、其の風景の中心となるべきものは何かと云ふと、これは各自非常に違つてゐる。橋立は地質等の方で云ふと所謂砂嘴であつて、狭い砂地が嘴の様に一里以上も海に突出してゐて、其の上に松が列を成して生えてゐる。言ひ換へれば、一直線の線の上に造られたところの景色である。松島は海の上に、大小無数の島々が點々と散布してゐるのであるから、橋立を線の景と云へば、松島は平面の景である。官島はどうかと云ふと、これは大いに趣が違つて、立體的であり、松島の平面的に對して立體的と云へさうである。即ち橋立は線、松島は平面、官島は立體、と云へよう。其の美しさの比較研究は、これは自ら見る人々によつて趣味を異にするから、こゝで優劣論をするのではないが、官島に就いて特に擧げなければならぬことは社殿の建築である。社殿の建築が風景の中心になつてゐる。

即ち前面に海を控へ、背には彌山を負ひ、其の間に水上の社殿の建築がある。此の海と山と社殿の三つが美しい調和をなしてゐる様は他には見られぬことである。勿論天下の名勝には、大抵建築が伴つてゐる。即ち天然に配するに人工を以てするといふ風であつて、必ず建築物が附隨してゐる。橋立には智恩院といふ伽藍があり、松島には瑞巖寺がある。其の他例へば和歌浦の紀三井寺の如き、或は金澤の稱名寺に於けるが如き、みな名勝地には必ず建築物が附隨するのであるが、併し乍らそれ等は風景の主要物ではない。官島は建築物其のものが主要物になつてゐる。此の點に於いて他とは著しく趣を異にしてゐる。又此の點に於いては恐らく日本國中で官島に比すべきものはなからうと思ふ。

官島は港灣岬角出入して、到る處風景の美に富んでゐるが、島を一周して見ると、嚴島神社の社殿の所在地點程美しい所はないと思はれる。背に彌山を負ひ、前に藝海を擁してゐる形勢は實に全島第一の勝景で、此處に社殿を造られたと云ふことは偶然ではなく、洵に適當な地を見立て、適當な建築をしたものであると云ふことが深く感じられる。

さて、さういふ次第で、此の嚴島神社の建築が、其の還境と調和する爲には、普通一般

の建築とは何としても違はなければならないことは又當然の話であつて、普通市街の眞中に建てられる建築物、或は森林の中に建てられる物、或は山の頂上に建てられる物などは、自ら其の設計の方針が異ならなければならない。若しも此の處に尋常一様の規模の建築を置いたならば、それは無意味である。果せる哉、此の嚴島神社の建築物は、日本に於いて他に比すべきものゝない一種奇妙な、餘程趣向の變つた建方をしてゐる。

そこで此の神社の建築の話をする前に、先づ云ひたいのは、此の社殿の建築を見た最初の感想は如何なるものであるかと云ふことである。此の神社に對して、吾々は殆ど現世を離れたやうな、一種の神祕的な、何とも形容の出来ない感じを懐くのである。それは水上に浮ぶ長い折れ曲つた廻廊、丹く塗られた社殿の色、背に聳えてゐる山の緑の色、又は森林の間から見える千疊閣や、五重塔の輪廓等に由つて起されるところの感じである。これ等は實に言ふべからざる美しさを吾々に感じさせるのであるが、一體如何なる人がかう云ふ考案を出したのであらうかと、歴史を辿つて調べて見ると、これは確に平清盛の造營である。現在の建築物は清盛當時のものではないが、其の規模に於いて、又大體の調子に於

いては、確かに清盛時代の趣味、即ち平家全盛時代の空氣が表れてゐる。餘談に涉るが、例へば奈良の法隆寺などへ行くと、えもいはれない崇高の念に打たれる。あれは何故であるかと云ふと、それを造つた聖徳太子の崇高なる御徳が建築物の上に現れて、延いて吾々に、崇高の念を懐かしむるのである。又東大寺の大伽藍の如きも、其の造營せられた聖武天皇の雄大な御人格が、直ちに建築の上に現れてゐるのである。更に新しい例をあげれば、桃山城の如き或は千疊閣の如きには、一種の豪壯にして又極めて無邪氣な氣分が現れてゐる。これは秀吉の人格其のまゝが現れてゐるのである。或は又日光の東照宮の建築を見ると、其の大膽な遣口に驚くのであるが、これは即ち徳川家光公のあの負嫌ひな、さうして英邁果敢な氣性が造り出したのである。此の様に一つの名建築といふものは、いつまでもそれを造つた人の精神が現れ、其の時代の精神が現れるものである。若し嚴島の社殿建築が非常に美しい立派な建築であるならば、それを造つた人は、やはり美しい立派な人であればならぬ。此の意味からして、私はこれを造營せられたところの清盛の人格の如何に美しく立派であつたかを聯想せざるを得ないのである。

傳説によると、嚴島神社の社殿は、當地の住人佐伯鞍職なるものが神託に因つてこれを造營したとある。即ち西の方から神様が現れて来て鞍職に向つて、十七間の社殿及び百八十間の廻廊を造つて、我を祭れと仰せられて、これに基いて造營した、それが端正五年であると云ふ。ところでこの端正五年と云ふのは、推古天皇の即位元年に當るといふ。傳説は傳説として、誠に興味のあるものとして、吾々は尊重してゐるが、理窟から云ふと甚だをかしいことで、其の時分の神社建築に廻廊といふものがある筈がない。又其の神様は十二重を著て出現されたと云ふが、其の頃には十二重の著物はなかつた。しかし斯様な理窟は傳説に對しては云はないものとして、兎に角其の頃に創立されたものとする。其の後は建築に關する記録は缺けてゐるが、神社は其の後國民の大なる崇敬を受けて來たのである。其の次には清盛の造營であつて、先に述べた様に、今日の様な大規模の社殿に改築したのである。或は清盛以前既に大規模の改築があつたかとも想像されるが、併し社殿の建築に、今日のやうな廻廊を附けるといふことは、清盛の時代前後に始めて行はれたことである。昔の社殿建築は、例へば伊勢の大神宮であるとか、出雲の大社であるとか云ふや

うに、極めて質素なものであつて、非常に、大規模なものを建てるとか、或は朱塗にしたり、或は反つた屋根を附けたりすることはなかつたのである。平安朝の末になつて、初めて今日吾々の見るやうな社殿建築が起つたので、例へば春日、賀茂など記録の徴すべきものが澤山にある。時の記録を見ると「鳥居を改めて樓門と爲す」とか「玉垣を改めて廻廊となす」といふやうなことが書いてある。「大日本史」にも「神社の體此に至つて一變す」とまで書かれてゐる。平安朝の末には、神社建築がさういふ風に變つて來た。其の時代に清盛が嚴島神社を再建したのである。これは確に熱烈な信仰の力と、非常な勢力と、美的趣味と、此の三つが揃つて初めて出來た建築である。其の一つを缺いては、かう云ふ建築は出來ない筈である。此の建築によつて、私は、清盛の信仰の力、其の勢力、其の美的趣味といふものを、遺憾なく窺ふことが出來ると考へるのである。

清盛がこれを造營した時の建築の規模は、如何なるものであつたかと云ふことは、確實には傳はつてゐないが、今日の規模と大した違ひは無い、殆ど同じと云つてよからうと考へられる。何故かと云ふと、清盛以後の神社の再建の歴史を見ても、根本的に變へたと云



ふことは更にない。古制に従ふといふことはあるが、大體の方針を改めたと云ふことは全然ない。のみならず、高倉上皇の「嚴島御幸記」を辿つてみても、今日の規模と其の時の規模と、殆ど同じであつたことが想像される。治承四年に、嚴島へ御幸仰出されて、有の浦に神符をととのへる御拜ありと云ふやうなことが書いてあるが、其の時は船路より御参詣になつたので、御船は有の浦の或る地點に著いて、御迎の人には會はれ、其處で神符を御拜されて、それから社殿の南の方に三間四間の御所を造られて、其處を行在所として御逗留になつた、其の場所は今の久保町であると考へられるさうである。更に「廻廊の北の濱を廻りて詣り、廊を通りて詣らせ給ふ。客人宮まらうどに先づ詣らせ給ふ」とある。これが今の客人神社であつて、先づこれに御参拜になつた。それから「御神樂終りて大官に詣らせ給ふ」とある。矢張り御神樂をおあげになつて、それが済んでから大官に御参拜になつた。古來宮島では、先づ客人神社に参拜して、然る後に大官へ参拜するのが法則ださうだが、高倉上皇も今日と同じに、其の順序で御参拜になつて居られる。兎に角今の建築の規模が全然古式と同じであるか否かは疑問であるが、殆ど同様であると見て差支へないと思ふ。

其の後に三度火災があつて、三度改築された。第一回は土御門天皇の建永年間、第二回は順徳天皇の貞應年間、第三回は龜山天皇の文永年間が記録されてゐる。併し改築の時に殆ど總て前の規模に依つたらしく、根本的に改められたといふことは、更に無かつたのである。大願寺古文書の中に後村上天皇の貞和二年に作られた嚴島往古繪卷があるが、此の圖を見ても、幾分の差はあるが、現今の配置と大差ない。そして記録にも傳説にも、文永より貞和に至るまで、社殿が其の規模を變更したといふことを考ふべき理由がない。其の後の歴史はといへば、弘治元年毛利と陶の戦の時に、社殿が一時危かつたが、辛うじて火災を免れた。さうして戦争によつて、社殿が汚れたといふところから、板を全部張替へたと云ふことである。更に其の後永祿より元龜にかけて、毛利元就が大改築をしたことがある。これは全部改築したのであるか、或は本殿のみを改築したのであるかは明かでない。又其の區域も分らないが、大改築をしたことになつてゐる。しかし乍ら、此の時も大體の規模は變らず其のまゝであつた。かうして今日まで來てゐる。即ち嚴島の社殿建築の規模は、殆ど清盛造營のまゝ今日まで傳はつて來たと云ふことが出来る。斯くまで古來の規模

がよく保存されてゐるといふことは誠に貴いことである。

嚴島の建築が極めて特殊であることは繰返して述べたが、次に其の特殊な點を箇條別にして説明しよう。第一の特色は海を敷地とすること。これは随分特殊な考で他に類例がない。なぜ陸の上に持つて行かなかつたかといふ疑問が起るが、それは一つは趣味の上から來た考へであらう。一つは私の想像であるが、全山花崗岩の堅い岩であるので、其處を切開いて、數百間に涉るところの平地を作り、此の大規模の建築をするといふことは大變な仕事で、奥まで切擴げることには容易でない、かういふ考へも這入つてゐたのではなからうか。それから風景の美を添へる爲めに、一つの變つた趣向をして見ようといふことも考への中にあつたらう。普通ならば大鳥居が參道の入口にある筈であるが、さうでなくて海の中にあり、つまり海を敷地としてゐるのである。第二の特色は建物の配置の極めて奇抜なこと。屈曲した廻廊があつて、其の廻廊が社殿と結び付いてゐる。或は橋がある。これは海を敷地とするので自然かう云ふ間取りが出来るのである。かういふ配置を考へた動機は何處にあるかと云ふと、これも私ひとりの考へだが、平安朝時代には當然考へ付くべき配

置であると思ふのである。清盛の造營よりや、以前に、既に山城の宇治に鳳凰堂といふ建築物が出來てゐる。これは後冷泉天皇の天喜元年に出來たので、眞中に中堂といふ建物が一つあつて、左右に廊下が出てゐる。其の廊下が又前の方に折曲つて、其の折曲りの隅のところには樓閣があるといつた甚だ面白い間取りである。又京都の大内裡にしても、此の時は衰へてはゐたが廢滅はしてゐなかつた。其の大内裡がどう云ふ建築であつたかと云ふと八省院にしても豐樂院にしても、長い曲折した廻廊をもつて四方を圍んで、其の内部に色々な建物が配置されてゐて、若干嚴島を見るかのような建築であつた。そこで嚴島の社殿を造るに當つて、それ等のものを手本として、それに新しい意匠を加へれば、かうした配置を考へつくべき理由がある。高倉上皇の「嚴島御幸記」の中に、御船が此の有の浦へ著いた時、非常に建物の美しいことを形容されて「唐土の湖心亭もかくや」といふことが書いてある。湖心亭とはどれを指して云はれたのか、私にはまだよく分らないのであるが、支那には湖心亭といふものが澤山ある。最も好い例は浙江省杭州城の西に在る西湖の中に水上に建てられた湖心亭で、九曲橋といつて、九度び曲折した木橋によつて陸に通じてゐる。

嚴島神社の場合の曲廊は、七度曲折してゐる。それから湖の真中に島があつて、其の島の中に宮殿樓閣があつたり、或は廟があつたりする、それも湖心亭の一種である、近い例を挙げれば、今の支那の北京の宮城の西に西苑といふ大きな庭があつて、其の西苑の中に太液池といふ大きな池があり、其の中に瀛台といふものがあるが、其の瀛台の建築なども、或る意味に於いては、幾分嚴島の社殿に似てゐるとも云へる。殿堂が並んでゐて、陸地から屈曲した廊が續いてゐる、やはり湖心亭の一種である。かう考へると支那の建築が我が國のそのの参考になつたと考へられる。大内裡或は鳳凰堂の建築などは、畢竟支那の建築を日本化したもので、それ故に結局嚴島神社の配置は、間接に支那建築の配置を攝取したものと云ふことが出来るのである。

第三の特色は建物の壯大なこと。勿論神社としてあるが、これは確かに日本一である。本殿の建坪が八十五坪、拜殿が百八坪ある。これだけの大きな本殿、拜殿を有する神社は他に無い。これに加ふるに廻廊、客人社を初め、千疊閣、五重塔、多寶塔など、すつかり合せると、概算三千坪以上あると云ふ。斯様に大きな神社は他になく、確かに日本一である。

又大鳥居は實に大きなもので、たび／＼改造されてゐるが、大きさは大抵變らないものと考へられる。細かい寸法は略すが、兎に角今日の大鳥居の笠木の長さは七十七尺あるといふ。銅やコンクリートで造ればどんな大きいのも出来るかも知れないが、木造として斯様に大きいのは、蓋し空前にして絶後であらうと信じられる。またこれ程大きくなければ、此の天然の規模にふさはしくない。これ程の大きさがあつて、初めて彌山を背にして大海を前に控へた風景に調和するのである。

第四の特色としては、此の建築物が何れも結構な建築であることである。政府に於いて建築物の優秀なもの、或は特殊の歴史を有つてゐるものを、特別保護建造物としてこれを保護してゐるが、其の特別保護建造物の中に加へられてゐる棟数が、嚴島神社所管の建築物の中に三十一點ある。これは日本に於いて唯一である。他と比較して見ると、大和の法隆寺に於いては、特別保護建造物として指定されてゐるものが二十八點、京都の上賀茂神社は小さい建物が澤山あつて、それを連續する小さい廻廊が澤山あるが、それを別々に勘定して矢張り二十八點ある。日光の東照宮が二十九點、即ち三十點以上の特別保護建造物

を有つてゐる所は嚴島神社だけである。如何に其の建築が貴いものであるか、我が國の寶であるかといふことはこれを以ても分るのである。

第五の特色としては、此の社殿建築に於いては、各時代の様式を見ることが出来るのである。社殿の建築が悉く一つの様式で揃へば、統一してゐてよいのであるが、變化といふ點がなくなる。嚴島神社に於いては、其の改修毎に、或る部分は其の様式が變つて來てをり、大體の規模は變らないが、細かい部分の扱ひ方が變つて來る。即ち清盛創立當時の様式も幾分遺つて居り、鎌倉時代の様式も遺つてゐる、或は、足利時代の様式も遺つてをれば、桃山時代の様式も遺つてゐる、桃山時代以後のものも遺つてゐると云ふ風に、各時代の様式が遺つてゐる。これは建築の方から云ふと大層面白いことで、一つの様式を以て統一されてゐる様に純潔ではないが、却つて興味ある現象である。

其の他にも、第六に史蹟に富むこと、第七に多數の國寶を有することなど、色々數へ立てられるが、それ等は他の専門に屬するからこゝでは省略しよう。要するに建築上から見た特色は上述の如くであるが、次に此の特色に就いて、もう少し具體的に、建築の専門的

方面に向つて話を進めよう。

先づ第一には、嚴島神社の建築物の中には、平安時代の様式が遺つてゐる。これは一番古い様式で、本殿、拜殿等に於いて見ることが出来る。本殿、拜殿は全體の氣分が平安朝の氣分で、非常に建前が低く、柱が太く、擔が軽く、屋根の勾配が緩く出來てゐる。これが平安朝の趣味を現した建築である。

軸部はすべて丹堊を以て塗り、勾欄は朱塗とし、窓は櫺子といつて豎の格子があり、縁青で塗つてある。これは平安朝時代の宮殿建築の最も普通に行はれた型である。

更に専門的になるが、丁度宇治の平等院附近にある、平安朝時代の宇治上神社に附いてゐると同型の慕股がついてゐる。それから被殿の屋根が違ふので、普通ならば軒が引き通しになるべきところを、引き通さないで、中央の一部だけ軒を一段高く上げてある。これは本社及び客人神社の被殿の恰好であるが、これ等も平安朝時代の趣味で、宇治の鳳凰堂の屋根を初めとして、よく見られる例である。

鎌倉時代の様式は何處にあるかと云ふと、これは客人神社にある。私の見る所では客人

神社は全く鎌倉時代の建築であつて、毛利元就はこれに手をつけなかつたらしく、墓股、柱の上の料栱即ち組物などが、純粹の鎌倉時代の様式である。

足利時代のものは澤山あつて、社殿の方では、平安朝時代、及び鎌倉時代の様式を除けば、大部分は足利時代の様式である。五重塔、多寶塔については後に述べる。

桃山時代のもので最もよい標本は千疊閣である。これも後述する。桃山時代以後のものは取り立て、云ふ程のことはない。

此の様に嚴島神社の建築には、各時代の様式が這入つてゐるから、これを比較研究すると中々面白いのである。

次に附屬建築物のことを簡単に附加へて置かう。附屬建築物の主なもの、千疊閣、五重塔、多寶塔の三つである。千疊閣は場所といひ、規模といひ、實に申分のない建築で、大きさから云つても、先づこれだけの建築は、日本に於いて有数のものである。千疊敷とは云ふが、實際に縁廻りを加へたら恐らくは三百六十坪位であると思ふが、これだけの殿堂は實に珍しいのである。又その遣口が頗る振つてゐる。御厨子に附いてゐる彫刻などは

桃山時代の好い標本で、柱の上に附いてゐる龍などの恍けたやうな馬鹿氣た所が面白いので、かういふことは桃山時代でなければ出来ない。これが太閤時代の特色で、太閤のやうな無頓著な、大ざつばな人でなければかう云ふ考が出ない。つまり其の時代の空氣がかうしたものを拵へさせるのである。江戸時代になると此の龍が、下手な狩野派の畫師が描くやうな街氣にみちた厭味のある龍になる。桃山時代の作品には總て氣分の大きい悠々として迫らないところがある。屋根には小口に金箔を押した瓦が使つてある。棟の鬼瓦にも其の鬼の面などに皆金箔が押してある。伏見桃山城などに於いても、瓦に金箔が押してあるのが發見される。これ等は桃山時代の豪壯な、派手な遣方の一つの例である。兎に角桃山建築の立派な標本が有ることは、嚴島神社の一つの誇りである。

次に五重の塔は、建築の方から見て甚だ面白い。先づ塔の組物であるが、餘りに専門的になりすぎるから細かいことは略すが、堂塔の組物には、唐様といふのと和様といふのと二種類あつて、奈良朝以來皆和様で造つてあつてドッシリとしてゐる。此の五重の塔は唐様の方で、唐様といふのは鎌倉時代に、禪宗と共に宋から輸入したもので、極めて輕快に

造られて、軒なども激しく反り、細部の手法に變化が多い。此の唐様で造つた塔といふのは、日本に於いては極めて珍らしいので、應永年代の創立といふことであるが、證據はなく、今の塔の九輪に天文二年の銘があるから其の時の建築と認められる。

もう一つは多寶塔で、今寶山神社となつてゐるが、これも大層珍らしいもので、年代は大永三年癸未六月建立となつてゐる。

多寶塔の建築は、普通の塔と違つて、一番下が四角であつて、其の四角な上に四角な屋根を架ける。其の屋根の上に饅頭形即ち伏鉢を載せ、又其の上に圓い筒狀の構架を立て、更に其の上に又方錐形の屋根を載せ、さうして其の上に相輪を立てる。要するに下層が四角で上層が丸い二層塔の形である。かういふ形をしてゐるのを多寶塔といつて、建築の方から云つても、形の美しい點に於いては特殊のものである。今日本には多寶塔の餘り古いものは遺つてゐない。嚴島の多寶塔は比較的古いものに屬し、又形の上から見ても比較的美しいものに屬してゐる。

嚴島の誇りとするところは、自然の風景と人工美との調和、即ち海と山と建物と、此の

三つの調和にある。建物といふものは土地を離れては存在し得ない。他の藝術は土地とは無關係に現存し得るものであるが、建築物に限つて、土地を離れて存在することが出來ない。であるから建築の美は第一に土地に適合すると云ふことである。土地を離れて存在しない以上は、土地との調和が第一義でなければならぬ。建築物を土地から引き離して考へると云ふことは、無意味である。例へば京都に金閣、銀閣といふ様な、氣の利いた瀟洒な建築があるが、あれはあの鹿苑院、慈照寺の庭園と調和して初めて氣が利いてゐるのである。極端な言ひ方であるが、若しあの建築を亞弗利加のサハラ沙漠の眞中へ持つて行つたらどうだらう。それは全然建築の價値が没却されるのみでなく、只一陣の颶風の爲めに吹き飛ばされるだけである。又彼の埃及のピラミッドの如きは、一望千里際涯も知らぬ大沙漠の一角にあるから、あの簡單龐大な姿で丁度よいので、人が皆驚いて魁偉とか壯大とか云つて歎賞するが、若しあれを日本の京都の瀟洒な小庭園内へでも置いたらどうであらうか。まるでアチこはしである。といふやうな譯で、建物は土地に適合することが第一義である。建築の美といふことは、環境を離れて建築其のものだけでは考へられない。其の

點から云つて、嚴島の社殿建築は、誠に自然の環境と適合してゐるのである。背に鮮綠の彌山を負ひ、前に深藍の大海を控へて、然る後にあの丹青の社殿の規模が生きて來るのである。そこで私の希望としては、此の人工と天然との調和を是非永久的に保存したい。社殿附近に如何がはしい怪建築を建てたり、奇巧を弄した庭園などを作ることは甚だ迷惑千萬である。又自然を壊してしまつてもいけない。例へば鬱蒼と茂つてゐる彌山の樹を伐つて坊主にしてしまつたら、嚴島の風景は全く廢滅してしまふ。それと同じ様に、彌山がいくら茂つて居ても、社殿の建物が壊されたら、嚴島の生命は絶たれる。要するに自然の美と人工の美が相伴つて調和して行かねばならないのである。此の意味からして、將來とも、嚴島の社殿附近に、人工的の忌はしいものが澤山出來るといふ様なこと、例へば調子外れの建築物が出來るといふ様なことは好ましくない。それと同様に、此の山が人工に依つて壊されること、例へば彌山を切り開いてケーブルカーや自動車道など造るといふ様なことは好ましくない。願はくば永久に現状の儘で、日本三景の一として、否日本第一の勝景として存在させたいといふのが私の希望である。

## 日本佛塔建築の沿革

### 緒言

本邦建築の中に於いて、歴史上、形式上、構造上、凡ての點に於いて最も興味あるものは佛塔であらう。

佛塔の起源は遠く印度にあつて、中央亞細亞、支那、朝鮮がこれを繼承し、各自これを換骨奪胎し、又日本もこれをうけて一種の様式を大成したのである。故に日本の佛塔を詳述するためには、是非とも先づ印度以下諸國に於ける佛塔を論述せねばならぬのだが、今はこれについて詳説するいとまがないから凡て省略し、單に日本の佛塔のみについてのべ

ることとする。

佛塔は幾多の方面から觀察することが出来る。これを宗教上から見れば一種の崇拜を目的とする佛器であり、これを歴史の上から見れば、佛塔建立は國民の思想の反影なる歴史的事實である。然し私は單にこれを一種の建築として觀察するに止めたいと思ふ。これを歴史上若しくは宗教上より觀察することは、私にとつて不可能事だからである。従つて以下に述べることは、日本佛塔建築の沿革の概要にすぎない。

## 第一章 總 說

### (一) 佛塔形式の起源

塔は印度のスツーパーの漢音窣堵婆から出たのである。窣堵婆とも書いたが略されて塔婆となり、塔となつた。スツーパーは元來印度の墳である。傳説に従へば釋迦の舍利を藏める

ために築いたのが始まりであると云ふが、其の前から一般に行はれてゐた墳墓の形なのであらう。其の原型は、最下に基壇があり、其の上に半球體の塔身を築き、その頂上には相輪を立てゝゐる。此の形が諸國に傳播して到る處で其の形式を變更した。

支那に於いては新たに塔を造るに當つて、一面に於いては舊來發達してゐた樓閣建築から暗示を求め、他面に於いては佛塔としての約束をスツーパーから求め、兩様相融和して一種の支那の木甍混用の塔の様式を大成した。これが日本に入つて即ち三重、五重等の多層塔となるのである。又印度のスツーパーが比較的原型に近い形で支那に傳へられ、更にこれが我國に傳はつたのが所謂寶塔で、更にこれを變形したのが多寶塔となるのである。

要するに我が國の多層塔はスツーパーの間接の系統を繼承するものであり、寶塔及び多寶塔は其の直接の系統を繼承するものと見る事が出来る。

### (二) 立塔の目的



印度に於いて佛塔を起した根本の目的は無論佛舍利を奉藏するためであつたが、やがて佛の遺物を藏するため、佛に關係ある聖蹟を顯彰するため、或は佛に對する供養のため、或は禮拜の對象とするために立塔されるやうにもなつた。

日本に於ける立塔の目的も、結局印度のそれを繼承してゐるわけであるが、又別種の目的の爲めにも塔が營まれてゐる。試みにそれらの中から著しいものを列擧すれば、次の如くである。

- 一、佛舍利奉安のため。二、法舍利奉安のため。三、伽藍を莊嚴にするため。四、三昧耶形として。五、佛像を安置するため。六、供養のため。七、墓表として。八、一種の裝飾物として。

(三) 佛塔の種類

塔の種類は種々雑多であるが、ここでは専ら木造建築としての塔のみ扱ふ。

木造塔は其の「平面」と「形状」と「層數」との三點から觀察すれば、左の如くに分類することが出来る。

(甲) 「平面」に従へば

- 一、圓形
- 二、正方形
- 三、多角形

(乙) 「形状」に従へば

- 一、相輪のみのも
- 二、一層にして圓形のもの
- 三、二層にして上層圓形下層方形のもの及びその變形
- 四、三層以上にして正方形又は多角形のもの

(丙) 「層數」に従へば

- 一、無層のもの

即ち所謂 相輪櫛

寶塔

即ち所謂大塔・多寶塔

層塔

即ち所謂 相輪櫛

- 一、單層のもの
  - 二、二層のもの (單層裳階附のもの)
  - 三、三層のもの
  - 四、三層のもの
  - 五、五層のもの
  - 六、七層のもの
  - 七、九層のもの
  - 八、十三層のもの
- 賣塔の類  
 多賣塔の類  
 三重塔  
 五重塔  
 七重塔  
 九重塔  
 十三重塔

以上は唯一般の場合を示すもので、仔細にこれを分類すれば尙幾多の異種を生ずるであらう。例へば三重塔に裳階のあるものとなしものとの區別するが如きである。次に、以上三様の觀察による分類相互の關係を示せば次表の様になる。

層	形	狀		層	塔
		相輪	寶塔		
無		無	一	三	普通
一		一	二	四	の
二		二	三	五	層
三		三	四	七	塔
四		四	五	九	
五		五	七	十三	

プ  
 ラ  
 ン  
 圓  
 方  
 形  
 又  
 は  
 多  
 角  
 形

しかし、これも又普通一般の場合を示すもので、他に異例のあることを記憶して置かねばならない。

此の外、古來工匠の間に傳へられてゐる木造塔の形式及び名稱は少くない。例へば、阿舎塔、華嚴塔、小塔、輪塔、春見塔、寶久塔、琴塔、金剛塔等である。これ等の形式は實際に行はれたのではなく、單に工匠の理想的のものが多く、其の命名も妥當でなく、考究の必要の認められないものである。

(四) 塔の各部の名稱

塔の説明に就いて先づ各部の名稱をあげれば、其の平面に於いて、外側の柱を側柱(カハバシラ)と云ひ、内部の柱を四天柱(シテンバシラ)と云ひ、中心の柱を心柱(シンバ

シラ」と云ふ。其の他は普通の堂宇に於けるものと同一である。相輪は塔に於ける最も重要なものであつて、空輪、九輪、承露盤、露盤とも呼ばれてゐる。其の各部は特殊な名稱を有し、最下部の方形の盤を地盤(チバン)又は伏盤(フクバン)と云ひ、其の上にある半球體をなすものを覆鉢(フクバチ)と云ひ、其の上を須彌腰(シュミゴシ)と云ひ、其の上の花弁状のものを請花(ウケバナ)と云ふ。請花の中央に立てる柱を刹又は擦と云ふ。刹には通常九箇の寶輪があるが、大和當麻寺三重塔の相輪の様に八輪しか持たぬものもある。相輪の上に火焰状の水煙(スイエン)があり、其の上に球状の龍車(リウシャ)があり、更に其の上に寶珠(ホウジュ)がある。これが普通の層塔に於ける相輪の形式である。多寶塔の相輪はやゝ異り、水煙がなく、四葉、六葉、八葉の三重の請花があり、又龍車がなく、絶頂には原則として三枚の水煙に包まれた寶珠がある。尙別に四條の鎖があつて、刹の上部と、上層屋蓋の四隅の末端にある寶珠形とを連絡し、鎖には四條とも風鐸がついてゐる。

## 第二章 塔の經歷

### (一) 飛鳥・奈良朝時代の佛塔

書紀の傳へるところに依れば、敏達天皇十四年、蘇我馬子は大野丘の北地に佛塔を營んだといふ。若しこれが事實であれば、本邦佛塔の濫觴であらう。此の塔の形状は不詳であるが、恐らく普通の塔であつたらしい。

次いで聖德太子及び歴代の天皇はしきりに伽藍を起され、無數の塔が、京畿附近に聳えた。これ等の塔は多く三重から九重位のもので、もつとも普通な様式を備へたものであつたやうである。

大和法起寺及び法輪寺の塔は共に飛鳥式の遺物で共に三重、大和薬師寺の東塔、同當麻寺の東西兩塔は奈良時代の遺物で何れも三重の塔である。

五重塔の例は最も多く、現存の法隆寺五重塔を始め、元興、興福、西大、招提の諸大寺は皆五重の塔を有つてゐた。七重のものでは、聖武天皇諸國に命じて七重塔を建立せしめ給へるの傳記がある。南都東大寺及び大安寺の塔も又七重であつた。九重塔はかつて百濟大寺に建てられたことが書紀に見えてゐる。定慧は多武峯に十三重塔を建てたといふが、これが事實であれば、當時かゝる多くの層を有するものもあつたことになる。

以上の様に文獻及び遺物によつて、飛鳥・奈良時代に於ける塔の層数が三乃至十三であることは分るのであるが、只此の以外に如何なる木造塔が存在したかは詳でない。しかし私は建造物としては十三層以上の多層塔なく（百萬塔の類にはあり）、又三層以下のものがなかつたと想ふのである。（二層及び單層のものは多寶塔及び寶塔の類にはあり）。

當期の塔は、多くは伽藍の重要な位置を占め、其の大きさもほと一定の關係があつたらしく、層數も伽藍の大小に由つて多少異つてゐたやうである。又當時の佛寺は一般に規模壯大を極め、其の塔の如きも往々非常な高さに達してゐるものがある。東大寺の塔は七重で平面方五丈半、全高三十三丈餘に及んでゐた。相輪の長さは八丈八尺許で、第一輪の直

徑は一丈二尺と傳へられてゐる。大官大寺九重塔も方五丈半の平面を有するから、其の全高は東大寺七重塔よりはやゝ高かつたと推定される。元興寺塔は五重塔としては稀に見る大規模なもので、平面方三丈二尺許、高さは十七丈前後であつたと思はれる。此の他諸國分寺塔中には大規模なものが澤山あつたやうである。

## (二) 平安時代の佛塔

平安時代に於いては、奈良時代に於ける各種塔の外に、新たに二種の塔を生じた。一は所謂多寶塔で、空海始めてこれを高野山に造るといはれ、一は所謂相輪櫓で、最澄始めてこれを比叡山に造ると傳へられてゐる。事の眞偽は容易に判断出来ないが、參考資料としては價値あるものである。建築沿革の順序としては所謂多寶塔の起る以前に、必ずや寶塔の存在を認めねばならぬのであるが、確證もなく、又今日では其の遺品も發見されないものである。木造寶塔が古來我が邦に稀なのは、其の構造が最も困難であつたためであらう。

相輪様は相輪のみから成る一種の塔で、比叡山のものが最も古式のものらしく、大阪四天王寺に於けるのもこれと類似の形式を示してゐる。日光山にあるのは後世の形式に屬する。

當時立塔が盛んに行はれたのは、眞言、天台の兩宗が立塔を以て伽藍制度の必要な事項としたからであらう。此の時代の塔は、前代の様に高大なものは比較的少かつたやうであるが、獨り法勝寺八角九重塔と稱するものは、高さ八十四丈と云ふ。素より信じるに足りぬが、非常に高大であつたことは推察される。

神社にも神佛混淆の結果として亦塔を建立した。其の多くは多寶塔であつたが、これは其の形狀が、檜皮葺の神殿と最もよく調和を保つたためであらう。山城北野神社、男山八幡宮、攝津の住吉神社、豊前宇佐八幡を初め多寶塔を有する神社は相當多い。

### (三) 鎌倉・室町時代の佛塔

鎌倉・室町時代は禪宗全盛の時代で、禪刹では古來塔を建てないのを通例としたため、天台、眞言の二宗が前代を繼續して立塔の事を怠らず、また日蓮宗でも起塔を重んじたけれども、一般には佛塔の新たに起るものに次第に減少した。淨土宗の伽藍では塔は未だ重要視されず、他の諸宗に於ては寧ろ塔は必要とされなかつた様である。禪刹に塔のある例は京都五山の一である相國寺を以て著しいものとする。此の塔は應永中に成り、七層、高さ三十六丈と云はれる。其の他の禪刹にもまた塔を有するものもあるが、未だ建築界に重きをなす様なものはない。

### (四) 桃山・江戸時代の佛塔

桃山・江戸時代は前期の繼續にすぎず、新しい局面を開いたものはない。前期には豊臣氏父子が諸宗の堂塔を再建修築し、中頃には徳川家光が盛んに堂塔を造營し、終りには徳川綱吉及び其の母桂昌院もしきりに佛教建築を保護した。此の様にして佛教建築は能く其

の命脈を維持して來たが、古代の塔婆の火災などで焼失し又朽敗するものが多く、次第に其の數が減少し、新しく建立されるものにはこれを補ふほどの大作がない。左に現存塔婆の中から重要な例を擧げる。

平	奈	飛	棟
安	良	鳥	式
室	藥師寺 當麻寺東塔 西塔	法隆寺 法起寺 法輪寺	寺社 の 名
生			形
寺			狀
五	三	三	五
重	重	重	重
			所
			在
			地
			名
宇陀郡室生村	都跡村 北葛城郡當麻村	奈良縣生駒郡法隆寺村 富郷村	

鎌												
"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	
倉												
醍醐寺	延曆寺	海住山寺	興福寺	靈山寺	百濟寺	淨瑠璃寺	西明寺	明通寺	石手寺	不退寺	金胎寺	大福光寺
"	相輪櫓	五重	三重	"	"	"	"	"	"	多寶塔	"	"
京都市伏見區醍醐町	滋賀縣滋賀郡坂本村	京都府相樂郡瓶原村	奈良市登大路町	生駒郡富雄村	北葛城郡百濟村	京都府相樂郡當尾村	滋賀縣犬上郡東甲良村	福井縣遠敷郡松永村	愛媛縣溫泉郡道後村	奈良市法蓮町	京都府相樂郡和本村	船井郡高原村

〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃

南法華寺	岩船寺	園城寺	總見寺	常樂寺	一乘寺	名草神社	向上寺	西國寺	新長谷寺	三明寺	國分寺	大法寺
------	-----	-----	-----	-----	-----	------	-----	-----	------	-----	-----	-----

〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃

重

奈良縣高市郡高取町  
京都府相樂郡當尾村  
大津市  
滋賀縣蒲生郡安土村  
〃 甲賀郡石部村  
兵庫縣加西郡下里村  
〃 養父郡八鹿村  
廣島縣豐田郡瀬戸田村  
尾道市久保町  
岐阜縣武儀郡關町  
愛知縣寶飯郡豐川町  
長野縣小縣郡神川町  
〃 〃 浦里村

室

〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃

町

石山寺	慈眼院	金剛三昧院	淨妙寺	長保寺	淨土寺	日龍峯寺	興福寺	法觀寺	明王院	嚴島神社	瑠璃光寺
-----	-----	-------	-----	-----	-----	------	-----	-----	-----	------	------

五

〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃

重

滋賀縣滋賀郡石山村  
大阪府泉南郡日根野村  
和歌山縣伊都郡高野町  
〃 有田郡箕島町  
〃 海草郡濱中村  
廣島縣尾道市尾崎町  
岐阜縣武儀郡下保村  
奈良市登大路町  
京都市東山區八坂上町  
廣島縣沼隈郡草戸村  
〃 佐伯郡嚴島町  
山口市

江	桃	
戶	山	
淺草寺	仁德寺	東
五重	金剛寺	勝曼寺
東京市下京區九條東寺町	常寂光院	日吉神社
右京區花園町	多寶塔	長命寺
東京市右京區嵯峨町	寶積寺	寶積寺
滋賀縣蒲生郡島村	出羽神社	出羽神社
岐阜縣安八郡神戶村	本門寺	本門寺
京都市右京區嵯峨町	金鑽神社	金鑽神社
大阪府南河內郡天野村		
大阪府天玉寺區夕陽丘町		
東京市大森區池上町		
山形縣東田川郡手向村		
京都府乙訓郡大山崎村		
廣島縣佐伯郡嚴島町		
山口縣都濃郡末武北村		
愛知縣額田郡岩津村		
中島郡稻澤村		

性海寺	大樹寺	關伽井坊	寶山神社	大傳法院	法道寺	智恩院	寶塔寺	吉田寺	安樂寺	談山神社	西明寺	小山寺
多寶塔	八角塔	十二重										
中島郡稻澤村	愛知縣額田郡岩津村	山口縣都濃郡末武北村	廣島縣佐伯郡嚴島町	和歌山縣那賀郡根來村	大阪府泉北郡上神谷村	京都府與謝郡吉津村	京都市伏見區深草町	奈良縣生駒郡龍田町	長野縣小縣郡別所村	奈良縣磯城郡多武峯村	栃木縣芳賀郡益子村	茨城縣西茨城郡北那珂村



〃	〃	〃	〃	〃	〃
輪	乙	最	妙	法	寛
王	寶	勝	成	華	永
寺	寺	院	寺	經	寺
相	三	〃	〃	五	〃
輪	重	〃	〃	重	〃
様					下谷區上野公園地
	新瀉縣北蒲原郡乙村	弘前市銅屋町	石川縣羽咋郡上甘田村	千葉縣市川市中山町	
	栃木縣上都賀郡日光町				

(附言) 日本建築様式の分類は頗る困難で、こゝにしめしたのは便宜的のものである。又建築物の時代も、最も確實な考證を経た後でなければ決定出来ない。上表にあげた建築物中、時代の明らかでないものは、構造様式の上から推定して其の時代を假定して置いた。様式といふのは、現建築の屬すべき様式を云ふので、其の創建の際に於ける建築の様式ではない。又建築物は時として時代と様式が一致しないものがある。例へば甲の時代に或建築を再建する時、其の時代の様式に依らず、却つて創建時代、即ち乙の時代の様式に模

すこともあり、また別の理由によつて丙の時代の様式を採ることもある。こゝでは主として現建築の様式を採つて、其の建築された時代を採らない。

### 第三章 塔の沿革

#### 其の一 塔の資格の變遷

##### (甲) 伽藍の中心として

塔が始めて印度に起された時には、其の目的が佛の遺骸若しくは遺物を藏するためであるか、或は靈域を表示するためであるかの差別なく、單獨に建築されたのである。そして規模の宏大なものには圍りに玉垣を繞らし、鳥居社の門(トラナ)を建てた。後世殿堂、僧房が附隨して所謂伽藍の規模を作るやうになると、塔は常に其の中心となつたやうである。支那に於いても昔は塔は多く單獨に建立され、若しくは伽藍の中心として建てられた

と思はれる。』

攝津四天王寺の規模は尙古式を留めてゐるもので、塔が中央に屹立し、其の後に金堂、講堂があり、前には中門があり、廻廊がこれ等を圍繞してゐる。これは塔が金塔と共に伽藍の中心となることを意味するので、飛鳥時代前後の伽藍はかかる配置を取るのが普通である。例へば大和山田寺は天王寺式をとり、大和法起寺、同法輪寺は法隆寺式の配置をなしてゐる。但し法起寺では、塔と金塔との位置が法隆寺のと入れ替つてゐるが、配置の精神は全く同じである。

要するに、塔を伽藍の中心とするのは、塔の目的及び起源から云つて最も正當なのである。我が邦では、佛教渡來の際に、此の適用を見、飛鳥時代はよく其の制を守つてゐたのである。』

(乙) 伽藍の一部として

奈良朝に於いて頻りに建立された大宗の伽藍の大多數及び天台、眞言の大伽藍に在つては、塔は一要部分を成すとは云へ、最早伽藍の中心ではなかつた。寧ろ伽藍の標號、又は

莊嚴さを表すものとして、或は單獨に、或は東西相對して二基建てられるものもあつた。

二、三の例を示せば

- 一 對にして金堂と中門との中間にあるもの  
大和薬師寺、河内百濟廢寺
- 一 對にして中門と南大門との中間にあるもの  
大和東大寺、西大寺、當麻寺
- 一 對にして南大門外にあるもの  
大和大安寺

單基にして金堂の斜前方にあるもの

大和興福寺、元興寺、山城醍醐寺、東寺

此の他單基の塔の位置には種々あるが、要するに金堂の斜前方、特に向つて右前方にあるのが普通の様である。

塔を伽藍の中心とする場合には必ず一基を建立した。伽藍の一部とする場合には一對を

原則とし、單基は其の省略であると見做される。此の意味に於ける立塔は、奈良時代より平安時代を通じて行はれてゐたやうである。

(丙) 伽藍の附屬として

此の時代に於いては塔は伽藍の附屬物となつてゐる。其の位置にも一定の規則はなく、或は本堂、門等と一緒に一體を作る様なものもあるが、塔のあるために伽藍の莊嚴さを増すといふわけでもない。此の種の塔は往々本堂等の諸宇と全く離れて、適當な所に獨立することもある。此の場合は伽藍の所在を示す標識となつてゐるやうに見える。此の意味に於いて建築される塔は、多くは小さい三重塔或は五重塔、小さい多寶塔の類で、伽藍の裝飾に過ぎない。

神社に於ける塔は、左右一對の時は神社の一部をなすやうに見えるが、元來佛教伽藍の兩塔に眞似たもので、塔の有無は神社自體にとつて何等關係なく、左右二基と單基とを問はず、凡て神社の附屬、即ち裝飾的のものと認めてよからう。

最近では、塔の資格は殆ど皆無となり、これを一つの玩弄的建築と見做して、金をとつ

て公衆に登らせてゐるものもあれば、又普通の家の屋根に九輪をのせたものさへある。昔は、徳の厚薄によつて輪の數を争つたものを、今は、一般の屋上に裝飾として應用されるとは、世運の變遷とは云へ實に驚くべきことである。

其の二 塔の形式の變遷

(甲) 手法自由の時代

當代は塔建築最初の時から鎌倉時代を通過して室町時代に入る。手法自由とは塔の形式の構成及び細部の經營が一定の機械的規律に依らないことを云ふので、従つて此の時代の塔は千種萬様であり、甚だ奇抜な手法さへ見られる。其の成功したものは雄大の姿勢、卓犖の氣魄があり、或は秀麗の風貌、優美の態度がある。

此の時代の前年頃に於いては、塔が伽藍の中心として建立され、若しくは其の一部として存在した關係上、塔の意匠は最も工夫をこらしたもので、特に其の相輪の意匠は工匠の一

番注意する所であつた。此の頃の相輪は一般に頭部が甚だ輕快で、水煙は最も意匠を盡した模様からなり、輪は比較的大きく、請花・須彌腰・伏鉢は皆頗る強い曲線から成り、鉢盤は廣く、高くなく、最近の相輪と比較すればまるで正反對の手法に出てることを注意すべきである。水煙は相輪の中でも特に注意を要するものである。水煙以外の部分にはない一定の形式があるが、水煙の手法に至つては全くそれが無いからである。随つて此の頃の水煙には優秀なものが多い。

大和薬師寺東塔の水煙は瑞雲中に天人の模様があつて、其の纏衣は翻つて見事に其の輪廓を作つてゐる。實に本邦無二の逸品といふべきである。尙其の寶珠には八葉の蓮座がある。山城醍醐寺の五重塔の水煙は雲珠から成り、曲線が極めて爽快に使はれてゐる。また輪は異常に大きく雄偉の姿勢がある。室生寺塔の相輪は一種特別の形式を有し、水煙の代りに寶瓶があり、寶瓶の上に天蓋がある。天蓋は八稜形で八箇の風鐸を懸け、寶瓶の下には蓮座がある。此の様な意匠は我が邦では非常に珍しく、遙かに漢土の塔を想起せしむるものがある。

次に當時代に於ける塔の形狀に就いて述べよう。次に掲ぐるのは山城醍醐寺の五重塔の記載である。天曆五年の建立で爾來幾多の修繕を受けてゐるが、其の大體の形式は猶能く創立當時の面目を留め、殊に内部の裝飾は依然として九百年の古色を保つてゐる。

	軒	高	其の差	平	面	其の差
初	重	一六・七 <sup>尺</sup>	—	二一・七 <sup>尺</sup>	—	—
二	重	一三・四	三・三 <sup>尺</sup>	一九・六	二・一 <sup>尺</sup>	—
三	重	一二・六	・八	一七・四	二・二	—
四	重	一一・三	・二	一五・一	二・三	—
五	重	一一・八	・五	一三・六五	一・四五	—

初層が獨り超然と高く、其の最も重要な部分であることを示し、二層以上は順次に高さを減じてゐるが、減縮の割合は級數的ではなく却つて一種の方級數的方法による。各層の料枳も各々其の手法に異同がある。相輪は既述の如く秀美なもので、其の高さは全高の

百分の三十四にも及んでゐる。

次の表は山城淨瑠璃寺の三重塔に關するものである。創立沿革等は明瞭でないが、大體の形式、手法は鎌倉時代の初期頃に屬するものである。此の塔も毎層の減少は級數的ではなく、一種の方級數的方法によつてゐる。

	平	面	其	の	差
初	重	一〇・一〇	尺	—	
二	重	九・三六	尺	・七四	
三	重	八・五五		・八一	

要するに當代に於ける塔建築の特性は左の如くである。

- 一、最下層は常に他の各層に比して特に重要な意味を持つ。
- 一、各層の高さは級數的に減せず方級數的に遞減する。
- 一、各層の平面は級數的に遞減せず方級數的に遞減する。但し稀に例外もある。
- 一、各層の細部の手法は互に異同あつて一律に流れない。
- 一、相輪は秀高にして輕快の觀を備へてゐる。

一、全體の輪廓は沈着にして安定の姿勢を示してゐる。  
其他料栱の制、軒廻りの手法は、一般佛寺建築と同一であるから特に述べる必要はないからう。

(乙) 手法拘束の時代

當時代は主として桃山・江戸時代の塔を包括するが、又室町時代の一部をも含める。手法拘束とは、前時代の手法自由に對して云ふのである。

此の時代に於いては毎層の變化は級數的で方級數的ではない。毎層の平面の大きさは所謂一支落ちと稱する法則によつて減縮するやうになつたので、形式は千遍一律となり、屋蓋の彎曲及び勾配も急になつて溫和な餘裕を示さない。料栱は各層の手法が全く同一で、時に初層に重きを置くこともなく、漫然と同一物を機械的に反覆するにすぎない。相輪の形狀は甚だ奇醜となり、秀高さを失ひ、手法も全く無味乾燥となつた。

次の表は日光東照宮に於ける五重塔に關するものである。軒高は二重以上は全く相等しく、毎層平面の大きさが級數的に變化してゐる。

	軒	高	其の差	平	面	其の差
初	重	一三・四 <sup>尺</sup>	—	一六・〇 <sup>尺</sup>	—	—
二	重	一五・三	一・九 <sup>尺</sup>	一四・五	—	一・五 <sup>尺</sup>
三	重	一五・三	〇・〇	一三・〇	—	一・五
四	重	一五・三	〇・〇	一一・五	—	一・五
五	重	一五・三	〇・〇	一〇・〇	—	一・五

要するに當時代に於いては、已に塔の本體の何者なるかは記憶されてゐない。毎層同一の手法を反覆し、其の間に些の變化も加へず、九輪に重きを置くことを忘れ、單にこれを屋蓋の尖端を裝飾する器具と見做し、細部の手法には一々嚴格な規定でこれを拘束し、若し少しでもこれに違反するものがあれば、勿論反則とする有様である。これでは形式の優秀を求めようと欲しても到底不可能である。我が國の工匠は往々にして建築術の真相を誤解して、人爲の機械的法則を不易の眞理と思ひ込み、甚だしいものは、垂木一支の大きさ

を測定すれば建築全體の形狀を知り得ることを、一大技能としてゐるものすらある。我が國工匠の誤謬も爰に至つて極ると云ふべきである。

要するに此の時代に於ける塔建築の性質は左の如くである。

- 一、最下層は他の各層と平等の意味を持つ。
- 一、各層の高さは級數的に縮減する。
- 一、各層の平面は級數的に縮減する。
- 一、各層の細部の手法は平等である。
- 一、相輪は短くて奇醜の觀がある。
- 一、全體の輪廓は寧ろ輕浮で危げである。

今本邦著名の塔に就いて比例を研究すると、五重塔は奈良時代に於いては相輪の長さは全高の百分の三十、初層平面の大きさは百分の二十となる。平安時代のもは醍醐寺の塔を標準とすべく、鎌倉時代の海住山寺、室町時代の嚴島神社、江戸時代の仁和寺等がそれぞれその時代を代表して顯著な成績を示してゐる。三重塔を比較した結果は五重塔程良好で

多寶塔

室	鎌	奈	飛	様
町	倉	良	鳥	式
岩南 船法 寺華 寺	靈興 山福 寺寺	淨瑠 璃璃 寺寺	當麻 寺東 塔塔	法起 輪寺 寺寺
山 城	大 和	山 城	大 和	寺 名
二二・一	三三・三	三三・一	二二・七	全高百に對する相輪の長さ
一九・九	二二・二	一八・五	二七・三	全高百に對する初層の大きさ

三重塔

(備考) 藥師寺塔は三重で裳階を有するものであるが、性質が五重塔に類似するので此の部に編入した。

五重塔

江	室	鎌	平	奈	飛	様
戸	町	倉	安	良	鳥	式
日光 東照 宮	仁和 寺	嚴島 神社	醍醐 寺	藥師 寺	法隆 寺	社寺 の名
山下 野城	安藝	山 城	山 城	大 和	大 和	國名
二二・三	一九・七	二二・八	二四・五	三〇・〇	三〇・〇	全高百に對する相輪の長さ
一四・〇	一六・七	一六・五	一五・二	二三・三	二〇・一	全高百に對する初層の大きさ

はないが、大體五重塔と同様の成績を見、多寶塔は相輪の長さに於いて五重塔、三重塔と正反對の結果を示し、初層平面の大きさに於いて却つてこれに符合してゐる。多寶塔は形が五重塔とは異なるから、其の比例も亦互に相等しくないのは當然であらう。

棟式	鎌倉	室町	全高百に對する相輪の長さ	全高百に對する初層の大きさ
寺名	高野山金剛寺	三昧山寺	二五・〇	四五・七
國名	紀伊	近江	二一・二	三五・〇
	山城	紀伊	四四・二	三四・〇
		大和	三七・〇	三九・七
		吉田寺	三四・一	二五・四

(附記) 以上に掲げた諸塔は幾多の修繕をうけ、また改造等の事もあり、必ずしも當初の姿を保つものではなく、又これらの寸法を實測するにあたつても、種々の事情から多少の誤差は免れ得ない。従つて前掲の諸表は先づ大體の見當を示すものである事を諒察されたい。

其の三 塔の構造及び裝飾の變遷

(甲) 鎌倉時代以前

塔の構造は極めて簡單である。先づ中心に礎を置いて中心柱を樹立し、次いで四方の構架を積み、最上層の屋蓋に相輪を冠する。相輪は全く中心柱の支承するところとなり、其の重量は周圍の構架には普及しない。各層の軒の重量は、比較的強大な垂木を以て支承する。此の垂木の末端は其の上層の軸部の重量を以て壓抑し、下層の組物を以て適宜の位置に支點を作り、一種の横杆をなすものである。又、此の時代の塔は屋蓋の勾配が甚だ緩かであるため、楕木を容れる餘地がない。これが塔建築初期の構造法である。

古來塔は細く高いにも拘らず、比較的能く震災、風災等に堪へるものとして驚歎されるのであるが、塔建築には別に他と異つた構架法といふものもなく、殊に堅牢であるといふ理由もない筈である。此の時代の塔の構架法は近代のものに比べれば粗にして拙であり、側柱の如きは只平滑な礎石の上に立つのみであり、木材の接合や釘緊等も甚だ不完全である。

中心柱は常に堅牢な礎石の上に樹立する。大和藥師寺の心礎は中央に圓孔を穿つて舍利



を藏し、其の上に心柱を立てゝゐた。法隆寺塔の心礎も舍利奉安の孔を有するが、これは床面より餘程低く設置してあるので、中心柱は地中に掘り立てられた形である。尙此の他心礎の中央に單なる凹孔又は柄狀突起を設け心柱をうけてゐるものもある。

中心柱は相輪を支へるためのものであるが、此の細長い柱は單獨で立つてゐる事が出来ない。そこで柱の上部、即ち相輪の部分を露出し、それ以下の部分を、多層の構架即ち枠で包んだものと解することが出来る。心柱は塔全體の構造を強めるために立てたのではなく、反對に相輪即ち心柱を支へるために四圍に枠を組んだので、此の枠を藝術的に取扱つて美觀を成したのであると、私は考へるのである。故に枠が三重でも五重でも、何重でもそれは別に問題ではない筈である。

若しも塔の構造の堅牢だけを考へるならば、外部の側柱と内部の四天柱とを十分に組合はせ、更に補強すれば澤山であり、時に心柱を入れる必要はない。即ち心柱は構造の意味から案出されたと思ふことは出来ないと思ふ。故に若し心柱即ち相輪柱が短くて四方に枠の支へを必要としないならば、これが無くとも差支へなく、しかも亦これを塔と呼んでも

差支へない。相輪櫓(又相輪塔、相輪幢とも書く)がこれで、全然枠がなく、四本の控柱に貫を通して支へるだけのものである。私はこれを無層の塔と名づけてゐる。

此の時代の塔は、外部は悉く丹塗を塗り、木材の末端だけ黄土を塗る。内部の柱以下木材部には色彩紋様を施すのが常で、又壁上に繪畫を描く場合もある。

#### (乙) 鎌倉時代以後

鎌倉時代頃から塔建築に多少の變化が現れた。其の一は下層四周に縁を設けるやうになつたことである。奈良時代の塔では、床は直ちに地盤で板を敷くことはなかつたが、平安朝の頃から初層内部に床を張り、四周に縁を繞らすものが出来たやうである。今日残存する諸塔の内、鎌倉以前のもものは皆縁を持たぬが、鎌倉時代からのものの中には縁を繞らしてゐるものも多い。試みに古いところから例をとれば、山城海住山寺五重塔、同淨瑠璃寺三重塔、大和興福寺三重塔、同靈山寺三重塔等がある。

第二には中心柱が下層まで貫通せずして中途で止つてゐる塔が現れた事である。これも鎌倉時代に突發したのではないが、兎も角遺構としては此の時代のものが最古である。

此の時代の三重塔では心柱が上層の梁上に立つてゐるのが普通のやうである。例へば上記の淨瑠璃寺、興福寺、靈山寺の各三重塔を初め其の例は澤山ある。又五重塔の中にも心柱が貫通してゐないものがある。山城海住山五重塔は其の最古の例である。多寶塔の類は初めから心柱が初層梁上に止つてゐたと思はれるが、これは其の内部に五佛を安置する必要から出たものであらう。

尙鎌倉以後に於いては宋朝文物の影響をうけ建築の様式が一變し、随つて塔建築も細部に變化を生じたものがある。信濃安樂寺八角塔の如きは其の著しい例である。又其の他の塔で部分的に宋の様式を加味してゐるものも現れてゐる。

裝飾の方法は前期と大差はないが、たゞ美術的價値は漸次減退する傾がある。

(丙) 江戸時代以降

此の時代に於いては、塔の工作上的發達が著しく、終に中心柱を心礎から遊離させて、周囲の構架から垂下せしめるに至つた。日光東照宮五重塔、東京淺草寺の五重塔などがこの例である。

中心柱を心礎上に安定せしめるのと、遊離せしめるのとでは、どちらが構造上有利であるかは、又別の機會に論ずるとして、こゝには唯、中心柱遊離の方法が、我が國塔建築構造の術に一大進歩をもたらした現象と認めるのみに止めよう。

中心柱の性質及び其の作用に關しては、次に京都東寺五重塔の記録を抄出して參考にしよう。此の記録は延寶年間京都の工匠の手に成るものである。

一、東寺五重塔。土居三丈一尺二寸八分。惣高十八丈一尺の内九輪の間一尺有。寛永乙亥十二月七日の夜炎上す。再興は寛永十八年事始。同廿年造癸未畢也。

右者繪圖詳に有之。故不記之。此の塔立時、心柱の根本に六寸の木を敷、瓦葺き立て塔下る故に其木を取り、程無く亦塔下り、心柱を四寸切る。凡て一尺也。根を切る時、心柱を揚る事、佛檀の壁板を取り、心柱に角木を入以三間木四方より人夫三四十にて心易く別揚る也。楮十箇年程有て見るに、露盤と福鉢の相ひ四寸許りも明きて見ゆる。今猶多し。昔の炎上は、永祿癸亥雷火也、卅一年絶て文祿三年七月二十一日洛慶東寺塔。此の塔の心柱も後に二尺爲切云傳ふ。故に今度の塔は、和泉抽丹誠、木重正しく、

升形の中にも鉤を宛、以來の下りを考へしかれども、如斯也。可得意。亦云。古の塔者度々に心柱の根を爲し切、佛壇より上の心柱を板にて包み、如し箱其れに佛像を畫云、此度は爲し念入し故恐は下る事不可有、不し及し營事無念也、然れども未來を考へ、福鉢の吞深き故、今以て雨不し入。

此の記事に由つて考へれば、東寺の塔の中心柱と、相輪及び周圍の構架との關係は甚だ明瞭である。第一に注意すべきは、心柱は長い木を縦に使ふ爲め、年を経ても縮むことが甚だしい。然し四圍の構架は小さい多數の横材を積み重ねるから、年と共に縮む上に荷重のために壓縮される。そこで心柱を四圍の構架の接續點、即ち伏盤と伏鉢の間に空隙を生じ、こゝから雨が浸入するのである。此の破綻を防ぐために、豫め柱の下に數寸の木を敷いて置き、四圍構架が數寸下つた時にこれを取り外し、心柱を礎の上まで降すのである。東寺の塔は文祿の再建の時は心柱を二尺切りつめた。即ち四圍の構架が二尺下つたのである。寛永の再建の時は一尺切り縮めたが、尙四寸ばかりも伏盤と伏鉢との間に空隙が出来たといふ。しかし此の様に構架が沈下する毎に塔の心柱を幾度も切り去ることは如何にも

# 欠

# 欠

ある。我が國の塔は其の他の一般の宗教建築と共に千餘年間唯一の様式を守り來つたもので、此の様な例は世界廣しといへども曾つて其の例を見ぬ所である。従つて形式、手法の變遷は比較的に激しくなく、其の發達も著しくはないが、千年以來徐々に進歩して終に今日に到つた。假令其の意匠に退歩の觀があるとはいへ、其の構造に至つては、木造建築としての最大能力を發揮し、嶄然建築界に一頭角を顯し、實に東洋各地方の佛塔建築の間に立つて儼然として異彩を放つてゐる。

## 殿堂建築の話

近頃日本には色々な建築が興りつゝあつて、丸の内邊に行くと、種々雑多な建築が雜然と並んでゐるが、中には随分大きなものも、立派なものも、奇抜なものもある。此の状態

を見て常に考へるのであるが、成程、一面に於いては日本の建築は大いに進歩して、舊來夢にも想はなかつた建物が續々出来るやうになつて、其の發展を想はせるが、他の一面から見て一寸問題が起るのである。果して此の現象が建築の進歩であるや否や、現代建築は總ての點に於いて既往の建築に優つてゐるであらうか、或る一面だけは勝つてゐるが、或る一面は舊來の建築に比して、却つて劣るといふやうな點がありはしないかと考へて見ると、現代必ずしも悉く既往に優るとは云へない事實を發見する。規模の宏大といふ點から見ても、既往に於いて決して今日の所謂大建築に譲らないものがある。外觀の美しさに於いても、既往に於いて今日の建築に勝るものが尠くない。又は内部の裝飾、設備等に於いて、或る意味に於いては昔の建築の方が今の建築よりも、もつと徹底して美しいものがあつたやうに思はれる。さうして見ると今日の建築の成功は、一面に於いては驚歎すべき値はあるが、他面に於いては寧ろ退歩、と云ふと不穩に聞えるが、たしかに劣つてゐるやうにも思へる。此の點から見て、私は既往に於ける殿堂建築といふ範圍で、私の感想を具體的に證明したいと考へる。

鎌倉時代に出來た書物に「口遊」といふ本がある。大變に面白い本で、色々當時の一口話や諺のやうな記事が載つてゐるのであるが、其の中に日本の三大建築を擧げてゐる。それは雲太、和二、京三といふので、これは何かと云ふと、雲太は出雲の大社であり、これが第一、和二と云ふのは大和の東大寺の大佛殿で第二、京三といふのは京の大極殿で第三であるといふのである。何故かういふ順に並べたかと云ふと、或る學者はこれは大ききの順に並べたので、出雲の大社が一番大きな建物で、東大寺の大佛殿は其の次で、京都の大極殿が其の次であると解釋するが、私はさうでなく、建物を種類別にして、其の代表的な建築をあげたもので、第一は神社の代表的建築、次は佛寺の代表的建築、第三は官室の代表的建築である、と解釋したいのである。即ち社殿、佛殿、官殿。社殿に於いては出雲の大社、佛殿に於いては大和の東大寺、官殿に於いては京都の大極殿、と、かういふのであらうと思はれる。大ききから云ふと、云ふまでもなく東大寺の大佛殿が一番大きいから和太と云はなければならぬ。然るに日本は國體上、神社といふものを一番尊いものとして崇拜するのであるから、神社を一番先に擧げたと、私は解釋するのである。此の解釋は

或は誤つてゐるかも知れないが、兎に角、これが三大建築として謳はれて居た。此の建築が上述した現代の進歩せる建築と較べて見て、どうであるかを考へたいと思ふのである。つまり雲太、和二、京三から暗示を得て、社殿の建築としては出雲の大社、佛殿建築の代表としては東大寺、それから宮殿建築の代表としては大極殿のことを述べるのであるが、それを切り離してしまつては一向に面白くないから、最後に此の三つを綜合して結論を得たいと思ふ。

### 出雲大社

出雲の大社の成立ちは周知の如く大國主命の宮殿である。歴史によれば大國主命は出雲の國に在つて日本の國土の一部を支配して居られたが、天孫の使が来て、國を譲り渡せと仰せられたので、大國主命は無條件で天孫に國土を譲渡された。そこで天孫は大國主命のために宮室を營んで、其所に住居されるやうになつたのが、天日隅宮、即ち今日の出雲の

大社である。即ち此の出雲の大社の建物は日本の上古の住宅であつた。今は社殿と宮室とは様式が變化したが、太古に於いては神社も宮室も區別はなく、同じ物であつたので、此の事を説明するには、第一に大社の間取りのことを記さねばならない。出雲の大社は南面の眞四角な建物で、四方各二間で中心に太い眞柱があり、眞柱から向つて右に間仕切りがある。四方に廻り縁があるが、縁の幅は正面だけが特に他の三面より廣く、入口は前面に向つて右の間であつて階が其の前にある。神座は間仕切りの後に西を向いてゐる。面白いことに、此の間取りは、今日でも普通一般の農家の間取りの元となつてゐる。更に面白いことは、朝鮮の咸鏡南道、江原道、平安北道等の民家の平面圖が、これも又同じ系統に屬する。大體の方針は四つ目の間取りであつて一方に土間が付いてゐる。日本の各地の農家の間取りを見ると多くは後世變化してゐるやうであるが、それでも各地方に田字形、即ち四つ目の間取りが残つてゐる。これがだん／＼後世發達して来て、「田」の字が崩れて色色に變化して今日に至つたのである。

出雲の大社の間取りは、つまり此の田字形の一變種で、眞中に心の御柱といつて非常に

大きな柱がある。今日の直径が三尺六寸ある。其の前後の柱を「うづ柱」と云つて、直径二尺八寸、隅から隅への見通しの線から少し外の方へ駈け出してゐる。廻りの椽は特に前面だけ広く、椽の右手に昇り階段がある。心の御柱から向つて右の方に仕切りがあつて、其の仕切りの後に左向きに神座が設けてある。かう云ふ間取りは、出雲の大社の外に、支那の雲南の西南境及び緬甸の北境の農民の家にも、私は見たのである。

要するに出雲大社は日本の太古の住宅である。これが社殿として造られたのではなく、住宅として造られたのであるといふ證據は、建物が南面してゐるに拘らず神座が西に向いてゐることでも分る。若しも神座として造つたものならば、神座は南面して公衆に向つて其の禮拜を受けなければ工合が悪い。公衆が北を向いて參拜するのに、神座が西の方を向いて居らつしやるのは甚だをかしい。即ち神社の建築としては體裁を備へて居ないといふことになる。それでは何故西向きになつてゐるか云ふと、それは西の方が開いて景色がよいからである。

出雲の地形は、大社所在の杵築は西が海になつてゐる。海岸は伊奈佐之濱といつて天孫の

御使が来て、大國主命と國土授受の談判をされた所である。即ち杵築は西方海に向ひ、北は山を負ひ、東南は平野である。西方は海を距て、遙かに朝鮮と相對してゐるので、神座は坐ながらに海を眺め、朝鮮の方を望むやうになるのである。

又、二尺八寸の大きなうづ柱が列を離れて駈け出して居り、更に前面の椽が特別に廣くなつてゐるのは何故かと云ふと、これは先きの雲南、緬甸の實例を見れば明瞭になるので此の地方の風俗は、原住民は晝間は總て外で仕事をし、夜になると家の中に這入つて寝る。恐らく太古の日本でもさうであつたらうと思はれるのだが、照明の設備が貧弱であるために、夜は何も仕事をする事が出来ず、たゞ寝るばかりであつたに違ひない。建物は寝るためと物を藏するためで、晝間は多く外に居る、そして入口の前の廣い椽、又は其の下の地面の上で仕事をする。従つて此の椽及び地面は深く挺出した屋根で蔽はれ、其の屋根は大きな遊離した柱によつて支へられてゐる。此の遊離した支柱は後世伊勢の大神宮に於いて、棟持柱として殘存されてゐる。出雲の大社のうづ柱が、列を離れて外に駈け出して、他の柱よりも一段太いといふのは、即ち此の遊離した支柱の變化したもので、初め遊離し

てゐたのが後世建物に密着したものと考へられぬことはなく、又前面の椽が特に廣くなつてゐるといふのは、此の椽で仕事をするに便利であるために相違ない、と、これは私の想像に過ぎないのであるが、かう考へれば、出雲大社の建築の解決がつくのである。

間取りのことは此の位にして置いて、次に構造形式について考へると、此の時代は原始的な時代であるから、材料に關しても何等加工といふことをしない。天然其のまゝの木を伐つて來て、其の柱は地の中に埋め込む。石を伐つて地形を造るなど、云ふことは知らないのである。それから又木を伐つて來て、桁を載せ、梁を架け、だん／＼積み上げて屋根を造る。其の連絡は悉く藤葛の類を以て縛つた。此の時代には釘とか鋸とか云ふものがないのであるから、皆細絡らげに絡らげて造つたのである。屋根は、多くは萱或は藁で葺いた。

そもそも我が國では、伊弉諾、伊弉冉兩尊が、八尋殿を造られたのが宮殿の初まりといふことであるが、これも恐らくは出雲大社と同じ系統の建築であつたのであらうと想像される。文献に依ると、出雲大社即ち大日隅宮を造る條に「即ち千尋の栲紮を以て結びて百

八十の級にせん。柱は則ち高太、板は即ち廣厚」といふことがあるが、それは千尋の栲紮を以て柱や桁や梁をぐる／＼結び絡らんだことを云ふのである。「柱は則ち高太、板は即ち廣厚」と書いてあるから、柱は成るべく高い太いのを使ひ、板は厚いのが使つてある。

さうして柱の仕立方は所謂「底津石根に宮柱布斗しき立て高天原に氷木多迦斯理て」といふやうに、地盤は堅い岩盤の所まで掘り其の上に柱を建てる。此の時代にはコンクリートを以て地形を造るといふやうなことは勿論ない。「高天原に氷木多迦斯理て」とは、氷木即ち千木が高く空中に聳えたことで、此の千木が後世變化して破風となつたのである。

要するに此の當時の建築材料は、全部植物性の野生のものであつて、鑛物性の物は絶対にないのである。石とか土とか金とかいふものはなく、一切の加工もない。今日の建築に比べて見ると、これは原始的の建築と云はねばならず、かくの如き建築は、今日猶ほ南洋方面に多くの類例を見るので、我々は此の型の建築を南洋型と名付けてゐる。

出雲大社の大きさについては面白い傳説がある。最初どれ程の大きさがあつたかと云ふと、初めてこれが出來た時の本殿の高さが三百二十尺、桁の長さが八十尺と傳へられてゐる。



る。それから後高さが百六十尺になり、桁の長さは四十尺になつた。即ち、四丈四方で百六十尺の高さである。其の後又高さが半分に減つて八十尺になつたが、大きさは矢張り四十尺であつたと云ふことである。今建つてゐる本殿はどれ程あるかといふと、實測の結果大きさが殆ど四十尺あり、高さは約八十尺で、神社の本殿としては、實に偉大なものである。

尤も面積の上から云へば、まだ／＼大きいものが後世現れたので、今日では一番大きい神社の本殿は何處であるかと云ふと、それは京都の祇園の八坂神社で百五坪ある。又安藝の宮島の本殿は八十坪以上ある。出雲大社のは四十四坪に過ぎないのであるが、建物の偉大を云ふのは必ずしも建坪の大きいことを云ふのではなく、柱を始め諸材料が太くて屋根が高く聳え、雄壯な氣魄を表はすものこそ、偉大な建築である。眞の意味に於いて大社はやはり日本第一の大社殿である。其の日本第一の大建築が日本民族によつて神代に造られてゐる、日本民族が歴史以前に於いて、既にかくの如き大きな氣魄を持つて居たのは實に偉いものだと思ふ。

ところが今の八十尺の高さでさへも驚くべき大建築であるのに、其の前は百六十尺の高さであり、更に其の前は三百二十尺の高さであつたと云ふのは、實に驚くべきことで、到底信じられない不可能なことであると思ふのだが、古書は信じて疑ふべからずといふことがあるので、これが眞實であるとし、創立當時の大社は奈良の大佛殿よりも遙かに高大であつたと云ふ人もあるが、建築の學術上から考へてこれは首肯出来ないことである。何故かといふと、神代の原始的時代に細絡らげの構造を以て、三百二十尺の高さのものを造り上げるといふことはどう考へても不可能である。三百二十尺といふ高さがどれ程かといふと、これは大變な高さで、東京で例を取つて見ると、震災前に淺草に淺草閣といふ十二階の建物があつた。あれが約二百尺だつたが、其の脇に淺草寺の五重の塔がある、これが百十尺である。さうすると十二階の天邊に五重の塔を載せたよりも十尺高いことになるのでさういふものが神代に細絡らげなどでどうして出来ようか。私は建築家の立場から想像して、大社の高さは神代から今日まで依然として八十尺の建築であると思ふのである。大社の高さが百六十尺であり、又其の前には三百二十尺であつたと云ふのは、これを神秘的に

するため、社殿の尊嚴を増すために、さういふことを云ひ傳へたのだらうと思ふ。

出雲大社の型を有する社殿は出雲地方には尙ほ多數の類例がある。例へば同じ出雲に熊野大社、神魂神社等があるが、其の形式構造は、殆ど出雲大社と同じである。神魂神社の内部は全く出雲大社と同型で、古い間仕切りが眞柱から左になつて居り、従つて神座が其の後に右向きになつてゐる。これは其の土地の事情から、必要に應じて出来た結果だと思ふ。それから出雲系統の神社、例へば美保神社等も此の變態と見られる。かう考へると、出雲の太古の住宅は皆かういふものであらうと思はれる。更に面白いと思ふのは、此の形が次第に變化して違つ形の神社が出来たが、それは山陰道に其の類例があり、北陸道にも其の類例がある。恐らくは出雲系統の民族が山陰道を根據として、日本海沿岸地に發展して行つた結果と見ることが出来ると思ふ。

我々が大鳥造と命名してゐる形式は、全體の形は出雲大社と同様であるが、たゞ入口が移動して正面の中央に来るのである。即ち左右と後の三面は二間であるが前面は一間になるので、當然心の御柱が邪魔になるので撤却され、神座が後壁の前に入口の方へ向つて置

かれる。こゝに、參拜者と神様とが正しく相對するやうになつて、神社の體裁が一步進むのである。實例は伯耆の大神山神社、越中の射水神社、和泉の大鳥神社等である。要するに出雲の大社と云ふのは日本の社殿の根本であり、又同時に日本の住宅の根本でもある。此の意味に於いてこれは非常に意味の深い大切な建築である。さうして、これによつて我々は日本の民族が如何に雄大な考へを以て建築を經營したかと云ふことが考へられるのである。

### 東大寺大佛殿

第二の和二、即ち東大寺の大佛殿は、聖武天皇が天平年間に造營されたのであつて、其の動機は學者に依つて種々に解釋されてゐるやうであるが、先づ簡単に云へば、聖武天皇は佛教に對して、非常に敬虔の念を持つて居られたので、國家の隆興、國民の安寧を祈るといふ御考へで、日本全國に命じて一國毎に國分寺をお建てになり、其の總本山、即ち總

國分寺として當時の帝都に大伽藍をお造りになつたのが東大寺である、と、解釋するのが  
 妥當であると思ふ。これを御造りになる時、聖武天皇は非常に御心をお用ひになり、先づ  
 伊勢の大神宮に御使を御立てになり、大神宮様の神許を得られて後、始めて著手されたので  
 ある。天平十五年から愈々仕事に御掛りになつた。其の第一著の仕事は伽藍の本尊たるべ  
 き大佛、即ち盧舍那佛の鑄造である。建物が出来て後から大佛を入れることが出来ないか  
 ら、先づ大佛を据ゑてから建物を建てねばならない。そこで大佛の鑄造に著手されたが、  
 これは非常にむづかしい大工事で、やつては失敗し、失敗してはやり直し、たうとう八回  
 目に出来上つたのである。其の丈五丈三尺五寸と云ふ。

大佛殿の造營にかゝられたのは天平十九年で、聖武天皇の御思召は三國一の大伽藍を御  
 造りにならうと云ふので、三國一の大伽藍といふのはどういふことかと云ふと當時の日本  
 の知識では世界に強大な國が三つしかなく、一つは日本、第二は唐、第三は天竺、その他  
 の國は知らなかつた。従つて三國一と云ふのは世界一と云ふことなので、世界一の大伽藍  
 を造らうと御考へになつたのである。さうして聖武天皇は國帑を傾けて御造りになつたと

云はれるのであるが、當時の日本の富は幾何あつたか、東大寺の工費がどの位かは勿論分  
 らない。今日天平當時の東大寺の伽藍を全部新しく建てることは、到底不可能であるが、  
 假りに出来るとしても數億圓の金を要する。これでは成程、當時日本はこれがために貧乏  
 しなければならぬ程金が掛つたらうと思はれる。三善清行が封事を上つた中にも、聖武天  
 皇は東大寺を建てられて國帑の半ばを盡されたとある。何の爲めに聖武天皇が斯くの如き  
 偉い御奮發をなされたのか、其の御心情を忖度し奉ることは出来ないが、兎に角、破天荒  
 なことを企てられ、そして實行されたのであるから唯驚歎するばかりである。

此の當時世界の大建築と云ふと、歐羅巴は希臘、羅馬の舊文化が亡びて、まだ新文化が大  
 成しない時代であるから大建築は起らない。エジプトとかアッシリヤとかでは、數千年の  
 太古に於いて突飛な大建築を起したが、それ等は既に廢滅した。支那・印度の方面は如何  
 かと云ふと、支那では曾て秦の始皇帝の阿房宮などといふものもあつたが、其の記事はど  
 の點から考へても、全く誇張的の文字であらうし、印度にも案外巨大な建築はなかつたや  
 うである。さうすると東大寺の伽藍は確かに聖武天皇の御理想通り、三國一の大伽藍であ

つた。

其の規模はどれだけあつたかといふと、何しろ四徑八町といふのであつて、南北は約八町、東西は八町より延びてゐる。それは春日山の中まで境内が入つて居るから一寸判らないが八町以上である。其の中には所謂唐様の七堂伽藍と云つて、澤山の建物が建込められて、其の建物が集つて一團を成し一つの規模を整へる。大佛殿一つだけでも恐ろしい大建築物であるが、これに連続、又は附屬して澤山の建物がある。所謂七堂伽藍、後に講堂があり、左右から前に廻廊、中門があり、其の前に東塔、西塔が對峙し、更に其の前に南大門がある。鐘樓、鼓樓は講堂の前にあり、其の他多數の堂宇が蔓を並べて相連つてゐた。今日の大佛殿は聖武天皇時代に比べると、六割五分の大きさに過ぎない。

大佛殿の平面圖は、横長い直角形で、前面十一楹二百九十尺、側面七楹百七十尺、重層四柱造りといふので、屋根の高さが約百六十尺、柱は直徑三尺五寸、内部の柱の高さは少くとも百二十尺にならなければならぬことになる。聖武天皇は當時の建築奉行及び建築家猪、名部百世、譽田繩手等に出来るだけ大きな物を造れ、世界一の大きなものを造れと仰

言つたと想像すると、此の二百九十尺に百七十尺、高さが百六十尺、北の邊の大きさが、當時最大限であらうと思はれる。幾ら金を掛けようがこれより大きなものゝ出来なかつたといふのは材料が許さないからで、今日であれば、直徑三尺五寸、長さ百數十尺と云ふ柱は一本でも殆ど得られない。此の時代には随分澤山の巨材があつたので、これだけは集め得たのであらうが、然しこれ以上の巨材を集めることは、當時でも不可能であつたらうと思ふ。尤も織ぎ合せの張子にすれば出来るが、それでは建築の價値がない。殊に眞中の大佛の頭の上に當つて梁が二本架けられる。此の梁が今日ならば鐵でもつて譯なく出来るのであるが、木材で此の梁を架けるといふことは、非常に難儀であつたと想像するのである。此の梁は、後に豊臣秀頼の造つた方廣寺の大佛殿の梁と同大であるとすれば、幅五尺、高さ七尺、長さは少くとも百尺といふ寸法になる。さう云ふ梁は今日では迎も得られない。私はいふが、これはこれが當時日本に於いて得られる材料を以てしては、最大限の設計であつたと思ふ。そして聖武天皇もそれで御満足になつたと解釋するのである。

もう一つ特に此の建物について興味があると思ふことは、東大寺は所謂四聖建立の伽藍